

仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告 I

— 平成23年度・平成24年度震災復興民間文化財
発掘調査助成事業に伴う発掘調査報告書 —

小鶴城跡第9次・洞ノ口遺跡第20次・鴻ノ巣遺跡第15次～16次
南小泉遺跡第72～74次・養種園遺跡第9次
北屋敷遺跡第5次・沖野城跡第13次・富沢館跡第3次
郡山遺跡第224次・第230次・第232次

2013年3月

仙台市教育委員会

仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告 I

— 平成23年度・平成24年度震災復興民間文化財
発掘調査助成事業に伴う発掘調査報告書 —

小鶴城跡第9次・洞ノ口遺跡第20次・鴻ノ巣遺跡第15次～16次
南小泉遺跡第72～74次・養種園遺跡第9次
北屋敷遺跡第5次・沖野城跡第13次・富沢館跡第3次
郡山遺跡第224次・第230次・第232次

2013年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市は「杜の都・仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれています。この仙台の風景は、私たち市民の誇りであり、将来へ守るべき大切な財産でもあります。

平成23年3月11日の東日本大震災により、東北地方の沿岸部は多くの被害が発生しました。震災の後は復興に伴う個人住宅や共同住宅等を再建する事業の増加により、発掘調査の件数は例年をはるかに上回るものになりました。遺跡の保存もさることながら、速やかな復旧・復興のための発掘調査も急務であります。

本書は、震災後に創設された東日本大震災復興交付金により仙台市教育委員会が行った「震災復興民間文化財発掘調査助成事業」における発掘調査の成果をまとめた最初の報告書です。

本報告書には、本発掘調査を実施した洞ノ口遺跡、神野城跡、南小泉遺跡、小鶴城跡、養種園遺跡、北屋敷遺跡、富沢館跡、郡山遺跡の発掘調査を収録しています。

先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの大切な仕事であります。地域が育んだ文化を語る上で、歴史や文化資源がその根底をなしているからです。つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で活用され、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

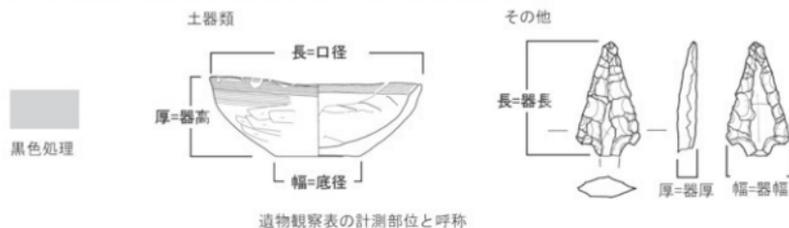
最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しまして、ご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、心より感謝申し上げます。

平成25年3月

仙台市教育委員会
教育長 青沼 一民

例 言

1. 本書は、「東日本大震災復興特別区域法」に基づき、仙台市が作成した「復興交付金事業計画」に対して復興庁が交付した「東日本大震災復興交付金」により平成23年度、平成24年度に仙台市教育委員会が行った、「震災復興民間文化財発掘調査助成事業」による個人専用住宅および中小企業等の補助対象事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書は、宮城野区内の洞ノ口遺跡第20次、鴻ノ巣遺跡第15次、第16次、小鶴城跡第9次、若林区内の南小泉遺跡第72次、第73次、第74次、養種園遺跡第9次、沖野城跡第13次、北星敷遺跡第5次、太白区内の富沢館跡第3次、郡山遺跡第224次、第230次、第232次の調査を中心に掲載している。なお、青葉区及び泉区内に所在する遺跡については、確認調査にいたる案件はなかった。
3. 本書の各項の執筆は第I章を鈴木・水野、第II～第四章を小泉・水野、第V章を斎野が行い、編集は水野が行っている。
4. 本書の地図・遺構図は、特に断りがない場合、上が真北を示す。
5. 遺構図・遺物実測図等の縮尺は、各図に付記してある。
6. 断面図の標高は、海拔高度を示している。
7. 本書中に掲載した地図は、国土地理院発行の25,000分の1『仙台市東南部、西南部、東北部』の一部を加工して使用している。また、仙台市の保有する2,500分の1『都市計画基本図』のCADデータを利用した。
8. 遺構は種別ごとに次の略号を用いた。
SB: 掘立柱建物跡 SD: 溝跡 SE: 井戸跡 SI: 堅穴住居跡 SK: 土坑 P: ピット SX: 性格不明遺構
9. 遺物の登録は、以下の分類と略号を用いた。
C: 土師器(非ロクロ) D: 土師器(ロクロ) E: 須恵器 F: 丸瓦 G: 平瓦 I: 陶器 J: 磁器 K: 石器・石製品 L: 木製品 N: 金属製品 P: 土製品 Q: 骨角製品・自然遺物
10. 遺物実測図に用いたトーンについては、使用した各ページに凡例を載せている。
11. 遺物観察表の法量は種別により測る名称が変化するが、長・幅・厚と表現を統一した。それぞれが指す部位については、下図を参照されたい。器高にカッコを付した数値は残存値を、口径・底径にカッコを付した数値は還元値を示す。
12. 本文中の「灰白色火山灰」(庄子・山田1980)は、これまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田a火山灰(To-a)」と考えられている。降下年代は現在、西暦915年と推定されており、本書もこれに従う。庄子貞雄・山田一郎1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」
『多賀城-昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所
仙台市教育委員会2000『沼向遺跡第1～3次発掘調査』仙台市文化財調査報告書第241集
小口雅史2003「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題-十和田と白頭山(長白頭)を中心に-」
『日本律令制の展開』吉川弘文館
13. 引用・参考文献については、巻末一括して付してある。
14. 本書に関わる遺物・写真・実測図等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。



目 次

序 文	
例 言	
目 次	
第 I 章 調査計画と実績	1
1 調査体制	1
2 調査計画	1
3 調査実績	1
4 調査方法	1
第 II 章 宮城野区内の調査	4
第 1 節 概要	4
第 2 節 洞ノ口遺跡	5
1 遺跡の概要	5
2 第 20 次調査	6
第 3 節 鴻ノ巣遺跡	10
1 遺跡の概要	10
2 第 15 次調査	10
3 第 16 次調査	16
第 4 節 小鶴城跡	18
1 遺跡の概要	18
2 第 9 次調査	18
第 III 章 若林区内の調査	22
第 1 節 概要	22
第 2 節 南小泉遺跡	23
1 遺跡の概要	23
2 第 72 次調査	25
3 第 73 次調査	37
4 第 74 次調査	45

第3節 養種園遺跡	56
1 遺跡の概要	56
2 第9次調査	56
第4節 沖野城跡	59
1 遺跡の概要	59
2 第13次調査	60
第5節 北屋敷遺跡	64
1 遺跡の概要	64
2 第5次調査	65
第IV章 太白区内の調査	81
第1節 概要	81
第2節 富沢館跡	82
1 遺跡の概要	82
2 第3次調査	83
第3節 郡山遺跡	86
1 遺跡の概要	86
2 第224次調査	86
3 第230次調査	88
4 第232次調査	90
第V章 総括	100
引用・参考文献	102
報告書抄録	
奥付	

図版目次

第Ⅰ-1図	平成23年度・平成24年度報告対象期間 調査実績一覧	3	第Ⅲ-10図	出土遺物2	42
第Ⅱ-1図	宮城野区と遺跡位置図の位置	4	第Ⅲ-11図	南小泉遺跡第74次調査	48
第Ⅱ-2図	洞ノ口遺跡・鴻ノ巣遺跡の位置と 周辺の遺跡	5	第Ⅲ-12図	S11・SK2・SK3 平面図・断面図	49
第Ⅱ-3図	洞ノ口遺跡20次調査地点と 周辺既調査地点	6	第Ⅲ-13図	出土遺物1	50
第Ⅱ-4図	洞ノ口遺跡第20次調査	8	第Ⅲ-14図	出土遺物2	51
第Ⅱ-5図	鴻ノ巣遺跡第15次・第16次 調査地点と周辺既調査地点	10	第Ⅲ-15図	第9次調査位置図	56
第Ⅱ-6図	鴻ノ巣遺跡第15次調査	13	第Ⅲ-16図	養種園遺跡第9次調査	58
第Ⅱ-7図	出土遺物	14	第Ⅲ-17図	沖野城跡第13次調査区位置図	59
第Ⅱ-8図	鴻ノ巣遺跡第16次調査	17	第Ⅲ-18図	沖野城跡第13次調査	62
第Ⅱ-9図	小鶴城跡の位置と周辺遺跡	20	第Ⅲ-19図	北屋敷遺跡と周辺の遺跡	64
第Ⅱ-10図	第9次調査区と既調査地点	20	第Ⅲ-20図	第5次調査位置図	65
第Ⅱ-11図	小鶴城跡第9次調査	21	第Ⅲ-21図	北屋敷遺跡第5次調査	71
第Ⅲ-1図	若林区と遺跡位置図の位置	22	第Ⅲ-22図	北屋敷遺跡断面図	72
第Ⅲ-2図	南小泉遺跡・養種園遺跡・沖野城跡の 位置と周辺の遺跡	23	第Ⅲ-23図	溝跡重複関係図	73
第Ⅲ-3図	南小泉遺跡の調査地点と主要調査地点	24	第Ⅲ-24図	出土遺物2	75
第Ⅲ-4図	南小泉遺跡第72次調査	29	第Ⅲ-25図	出土遺物3	76
第Ⅲ-5図	S11・S15 平面図・断面図	30	第Ⅲ-26図	出土遺物4	77
第Ⅲ-6図	出土遺物1	31	第Ⅳ-1図	太白区東部と遺跡位置図の位置	81
第Ⅲ-7図	出土遺物2	32	第Ⅳ-2図	富沢館遺跡・郡山遺跡と周辺の遺跡	81
第Ⅲ-8図	南小泉遺跡第73次調査	40	第Ⅳ-3図	富沢館跡第3次調査位置図	84
第Ⅲ-9図	出土遺物1	41	第Ⅳ-4図	富沢館跡第3次調査	85
			第Ⅳ-5図	郡山遺跡と調査位置図	87
			第Ⅳ-6図	郡山遺跡第224次調査	88
			第Ⅳ-7図	郡山遺跡第230次調査	89
			第Ⅳ-8図	郡山遺跡第232次調査	96
			第Ⅳ-9図	断面図	97
			第Ⅳ-10図	出土遺物	97

写真図版目次

写真図版Ⅱ-1	9	写真図版Ⅲ-10	54
写真図版Ⅱ-2	14	写真図版Ⅲ-11	55
写真図版Ⅱ-3	15	写真図版Ⅲ-12	58
写真図版Ⅱ-4	17	写真図版Ⅲ-13	63
写真図版Ⅱ-5	18	写真図版Ⅲ-14	74
写真図版Ⅱ-6	21	写真図版Ⅲ-15	78
写真図版Ⅲ-1	33	写真図版Ⅲ-16	79
写真図版Ⅲ-2	34	写真図版Ⅲ-17	80
写真図版Ⅲ-3	35	写真図版Ⅳ-1	85
写真図版Ⅲ-4	36	写真図版Ⅳ-2	88
写真図版Ⅲ-5	42	写真図版Ⅳ-3	90
写真図版Ⅲ-6	43	写真図版Ⅳ-4	97
写真図版Ⅲ-7	44	写真図版Ⅳ-5	98
写真図版Ⅲ-8	52	写真図版Ⅳ-6	99
写真図版Ⅲ-9	53		

第 I 章 調査計画と実績

1 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 文化財課

平成23年度

課長 吉岡 恭平

主幹兼調査調整係長 佐藤甲二 主査 荒井 格 平間亮輔 主事 小泉博明 廣瀬真理子 及川謙作

文化財教諭 吉野 信 石山智之 鈴木健弘 佐藤洋平 橋本勇人 専門員 結城慎一 臨時職員 五十嵐愛

整備活用係長 長島栄一 主事 大久保弥生 文化財教諭 佐藤正弥 調査指導係主事 鈴木 隆

平成24年度

課長 吉岡 恭平

主幹 佐藤甲二 調査調整係長 斎野裕彦 主査 佐藤 洋 平間亮輔 主任 村上とよ子

主事 鈴木 隆 小泉博明 及川謙作 間根章義 水野一夫

文化財教諭 伊藤翔太 千葉 悟 佐藤高陽 橋本勇人 専門員 結城慎一

整備活用係 係長 長島栄一 主任 斎藤克己 主事 大久保弥生

文化財教諭 石山智之 鈴木健弘

仙台城史跡調査室 主査 佐藤 淳 文化財教諭 佐藤洋平

2 調査計画

震災復興民間文化財発掘調査助成事業を、仙台市域を対象として平成23年3月から平成23年度と平成24年度に行なった。平成23年度は、総事業費は4,604千円（交付金額3,452千円）で、個人専用住宅補助事業費として事業費2,418千円（交付金額1,813千円）、中小企業等補助事業費として事業費2,186千円（交付金額1,639千円）の予算で計画した。また、平成24年度は、総事業費は26,885千円（交付金額19,747千円）で、個人専用住宅補助事業費として事業費9,485千円（交付金額7,021千円）、中小企業等補助事業費として事業費17,400千円（交付金額12,726千円）の予算で計画した。

3 調査実績

平成23年度、平成24年度に実施された本事業に関わる調査は、平成25年2月末現在で、34件（18遺跡）で、表 I-11 に記す通りである。そのうち本報告書で扱う調査は、平成24年3月12日から平成24年10月16日までの間に実施された調査である。それらの震災復興事業に係る個人住宅建設対応・中小企業等対応の全調査を図 I-3-11 に区ごとにおいて示した。それぞれ申請者より届け出がなされ（表中：届出等NO.）、確認調査に至る場合、それを原因に調査を実施している。確認調査中に本調査が必要な遺構が発見されるなどの事由が発生した場合、ほとんどが調査区が狭小であるため、そのまま本調査へ移行し、完掘、調査終了して現場引き渡しとしている。表中実施番号は、実施決定後に番号付与し、『年度-通番』を示している。

4 調査方法

各調査は建物建築などの開発する範囲を、申請者側が位置出しし、その範囲内に調査区を設定する。その範囲に対し、重機を用いて表土・盛土など、調査対象にならない土壌を除去し、遺構面まで掘削する。重機掘削後、人力で精査し、遺構検出、遺構調査、断面観察、各実測図採図、適時写真撮影を行い、調査の工程のすべてが完了したのち埋め戻して現状復帰、現場引き渡しを行う。図面は1/20を基本としている。写真はデジタルカメラでのJPEG撮影を基本とし、適時、フィルムカメラによるモノクロ、リバーサル撮影を行っている。

表 I-1

平成23年度個人専用住宅に伴う発掘調査一覧（平成24年3月・調査面積45.6㎡）

NO.	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構・遺物	備考	発出等NO.
1	南小泉遺跡	若林区古城三丁目	79.3㎡	21.6㎡	3月12日	土坑1基、溝跡1条、ピット1基、土師器		H23-106-90
2	今泉遺跡	若林区今泉二丁目	90.2㎡	24.4㎡	3月12日	土坑2基、ピット2基、土師器		H23-106-284

平成24年度個人専用住宅に伴う発掘調査一覧（平成24年4月～25年2月・調査面積696.7㎡）

NO.	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構・遺物	備考	発出等NO.
1	押口遺跡	若林区荒井	113.9㎡	49.5㎡	4月24日	遺構、遺物なし		H23-104-602
2	小鶴城跡	宮城野区新田三丁目	91.0㎡	11.7㎡	4月25日	溝跡1条、土師器、陶器	9次	H24-122-19
3	富沢館跡	太白区富沢	74.1㎡	16.6㎡	5月28日～5月30日	溝跡1条、土坑1基、柱穴1基	3次	H24-122-48
4	沖野城跡	若林区沖野七丁目	96.5㎡	31.7㎡	6月4日～6月6日	溝跡3条、石製品		H24-122-15
5	中在家酒造跡	若林区荒井	133.2㎡	25.6㎡	6月11日	溝跡1条		H24-122-29
6	溝ノ果遺跡	宮城野区岩切	32.0㎡	16.1㎡	6月4日～6月6日	溝跡3条、土坑3基、性格不明遺構1基	15次	H24-122-68
7	南小泉遺跡	若林区遠見塚一丁目	75.8㎡	27.6㎡	6月11日	遺構、遺物なし		H24-122-70
8	芳塚古墳	太白区西町九	121.0㎡	38.5㎡	6月13日～6月14日	溝跡2条、ピット2基		H24-122-65
9	南小泉遺跡	若林区南小泉二丁目	169.3㎡	25.3㎡	7月26日～7月30日	土坑13基、溝跡1条	73次	H24-122-64
10	沖野城跡	若林区沖野二丁目	74.4㎡	24.6㎡	7月9日	遺構、遺物なし		H24-122-106
11	郡山遺跡	太白区郡山三丁目	48.8㎡	6.3㎡	6月27日	遺構なし、土師器	224次	H24-122-100
12	養神園遺跡	若林区南小泉一丁目	69.0㎡	15.6㎡	7月18日	溝跡1条	9次	H24-122-113
13	南小泉遺跡	若林区南小泉二丁目	145.3㎡	36.3㎡	7月31日～8月8日	壁穴柱跡跡1軒、土坑3基、柱穴2基、性格不明遺構1基等	74次	H24-122-131
14	瀬ノ口遺跡	宮城野区岩切	50.3㎡	25.8㎡	9月3日～9月5日	溝跡2条、土坑1基、ピット3基、土師器、瓦葺器	20次	H24-122-122
15	郡山遺跡	太白区大内本町二丁目	39.5㎡	14.5㎡	9月6～9月10日	溝跡1条、陶器片	230次	H24-122-160
16	溝ノ果遺跡	宮城野区岩切	66.9㎡	16.9㎡	9月11日	溝跡3条、ピット1基、土師器	16次	H24-122-117
17	南小泉遺跡	若林区遠見塚一丁目	112.8㎡	28.2㎡	9月16日～9月12日	溝跡1条、土坑2基、ピット3基		H24-122-192
18	郡山遺跡	太白区郡山二丁目	89.3㎡	32.3㎡	9月20日～10月3日	材木91基、溝跡6条、土坑3基、柱穴7基、ピット4基	232次	H24-122-170
19	大野田遺跡	太白区大野田	196.7㎡	16.3㎡	10月9日～10月12日	溝跡1条、ピット6基		H24-122-186
20	中田南遺跡	太白区中田七丁目	90.8㎡	37.3㎡	10月9日～10月19日	土坑5基、性格不明遺構3基		H24-122-213
21	押口遺跡	若林区荒井	69.6㎡	35.9㎡	10月31日～11月16日	木材16点、弥生土師、土師器		H24-122-228
22	今泉遺跡	若林区今泉二丁目	69.9㎡	24.1㎡	10月30日～10月31日	溝跡1条		H24-122-229
23	南小泉遺跡	若林区遠見塚一丁目	91.9㎡	30.4㎡	12月3日	ピット1基、溝跡1条、土師器		H24-122-259
24	小鶴城跡	宮城野区新田三丁目	124.3㎡	30.1㎡	11月26日	ピット8基		H24-122-284
25	南小泉遺跡	若林区南小泉二丁目	61.5㎡	14.7㎡	1月16日	溝跡2条、土坑1基、ピット2基		H24-122-312
26	神邊遺跡	若林区沖野二丁目	88.6㎡	17.6㎡	1月23日	溝跡1条		H24-122-334
27	郡山遺跡	太白区郡山六丁目	68.5㎡	19.6㎡	2月4日～2月7日	溝跡2条、土坑6基、柱穴1基、土師器、瓦葺器	237次	H24-122-360

平成24年度中小企業等の復興復興事業に伴う発掘調査一覧（平成24年4月～25年2月・調査面積354.3㎡）

NO.	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構・遺物	備考	発出等NO.
1	南小泉遺跡	若林区遠見塚二丁目	117.0㎡	29.4㎡	6月20日～6月29日	壁穴柱跡跡3軒、土坑3基等、土師器	72次	H24-129-1
2	北須敷遺跡	若林区六丁目の日中町	244.8㎡	146.4㎡	7月30日～8月29日	溝跡9条、土坑1基、性格不明遺構1基、ピット4基、土師器等	5次	H24-129-7
3	出花遺跡	宮城野区出花二丁目	870.2㎡	75.9㎡	11月19日～11月21日	溝跡1条		H24-129-33
4	溝ノ果遺跡	宮城野区岩切	113.6㎡	38.6㎡	1月21日	ピット2基		H24-129-41
5	山口遺跡	太白区西崎一丁目	578.9㎡	64.6㎡	1月15日～2月14日	水田面3席	19次	H24-129-46



第1-1図 平成23年度平成24年度報告対象期間調査実績一覧

宮城野区

実施番号	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	調査回数	届出等No.
24-8	小鶴城跡	91.00㎡	11.70㎡	4月25日	第9次	H24 122-19
24-22	湊ノ奥遺跡	57.00㎡	16.10㎡	6月4日～6月6日	第15次	H24 122-68
24-43	洞ノ口遺跡	50.29㎡	25.80㎡	9月3日～9月5日	第20次	H24 122-122
24-47	湊ノ奥遺跡	66.00㎡	16.00㎡	9月11日	第16次	H24 122-117

若林区

実施番号	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	備考	届出等No.
23-33	南小泉遺跡	79.31㎡	21.00㎡	3月12日		H23 106-90
23-79	今泉遺跡	90.22㎡	24.60㎡	3月12日		H23 106-284
24-4	押野城跡	113.86㎡	40.50㎡	4月24日		H23 106-402
24-14	押野城跡	96.50㎡	31.68㎡	6月4日～6月6日	第13次	H24 122-15
24-15	中在家南遺跡	133.17㎡	24.96㎡	6月11日		H24 122-29
24-16	南小泉遺跡	117.00㎡	29.40㎡	6月20日～6月29日	第72次	H24 129-1
24-23	南小泉遺跡	75.80㎡	27.60㎡	6月11日		H24 122-70
24-26	南小泉遺跡	100.26㎡	25.50㎡	7月26日～7月30日	第73次	H24 122-64
24-28	押野城跡	74.39㎡	24.60㎡	7月9日		H24 122-106
24-34	養種園遺跡	60.00㎡	14.99㎡	7月18日	第9次	H24 122-113
24-26	南小泉遺跡	145.33㎡	36.30㎡	7月31日～8月8日	第5次	H24 122-131
24-37	北屋敷遺跡	244.78㎡	146.40㎡	7月30日～8月29日	第74次	H24 129-7
24-48	南小泉遺跡	112.82㎡	28.20㎡	9月10日～12日		H24 122-192

太白区

実施番号	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	備考	届出等No.
24-13	富沢館跡	74.12㎡	16.64㎡	5月28日～5月30日	第3次	H24 122-48
24-24	芳塚古墳	121.04㎡	38.50㎡	6月13日～6月14日		H24 122-65
24-29	郡山遺跡	48.75㎡	6.30㎡	6月27日	第224次	H24 122-190
24-66	郡山遺跡	59.50㎡	14.50㎡	9月4日～10日	第230次	H24 122-160
24-59	郡山遺跡	89.32㎡	32.28㎡	9月20日	第232次	H24 122-170
24-53	大野田遺跡	156.71㎡	16.30㎡	10月9日～10月12日		H24 122-186
24-57	中田南遺跡	90.75㎡	37.30㎡	10月10日～10月12日		H24 122-213

仙台市では報告書に詳細を掲載した調査に次数を付けています

第Ⅱ章 宮城野区内の調査

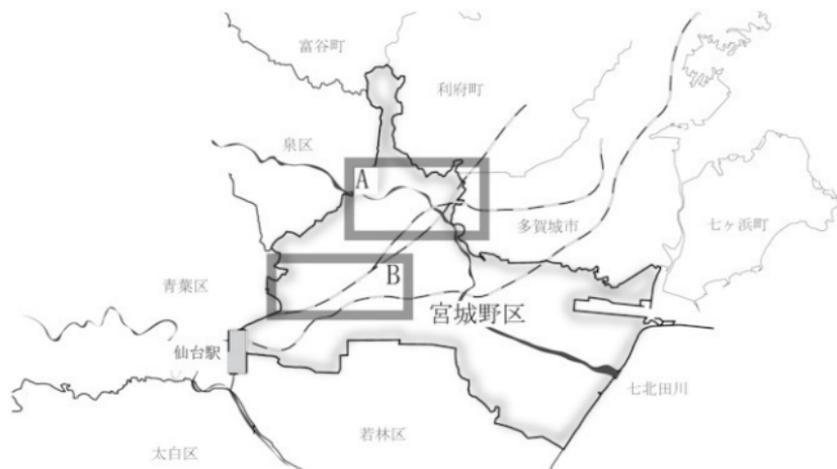
第1節 概要

本件に係る宮城野区内で行われた調査は、表Ⅱ-1に示すとおりである。宮城野区内では第Ⅱ-1図のA・Bの二か所の区域内で、3遺跡の調査を行っている。第Ⅱ-2図のa区域内の洞ノ口遺跡、b区域内の鴻ノ巣遺跡、第Ⅱ-9図のa区域内の小鶴城跡である。

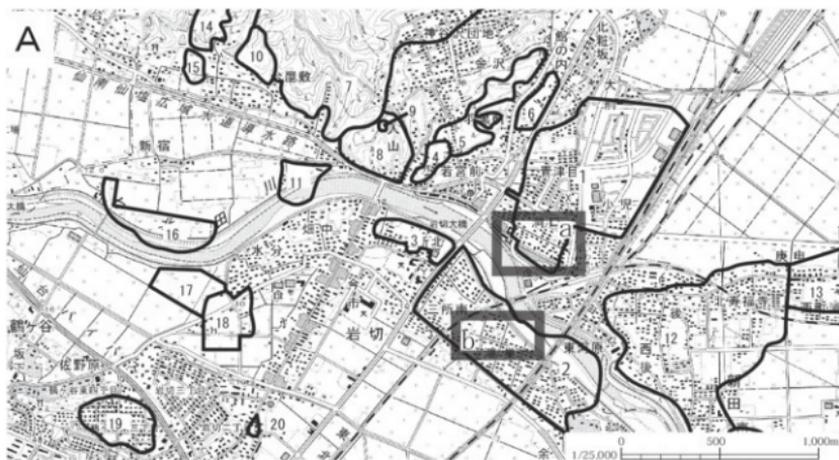
ここでは、小鶴城跡第9次調査（H24-8）、洞ノ口遺跡第20次調査（H24-43）、鴻ノ巣遺跡第15次調査（H24-22）、鴻ノ巣遺跡第16次調査（H24-47）の成果を報告する。

表Ⅱ-1 宮城野区内の調査一覧

NO.	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	備考	届出等NO.
24-8	小鶴城跡	91.0㎡	11.7㎡	4月25日	第9次	H24 122-19
24-22	鴻ノ巣遺跡	57.0㎡	16.1㎡	6月4日～6月6日	第15次	H24 122-68
24-43	洞ノ口遺跡	50.3㎡	25.8㎡	9月3日～9月5日	第20次	H24 122-122
24-47	鴻ノ巣遺跡	66.0㎡	16.0㎡	9月11日	第16次	H24 122-117



第Ⅱ-1図 宮城野区と遺跡位置図の位置



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	洞ノ口遺跡	集落跡・城館跡・屋敷跡・水田跡	自然堤防	古墳～近世	11	新切瀧遺跡	散布地	自然堤防	古代
2	鴻ノ巣遺跡	集落跡・屋敷跡・水田跡	自然堤防	弥生～中世	12	岩田遺跡	散布地	自然堤防	縄文・古墳～中世
3	今市遺跡	集落跡・祠堂跡	自然堤防	古代～中世	13	山王遺跡	都市・屋敷跡	自然堤防	弥生～近世
4	岩宮前遺跡	城館跡・信仰遺跡	丘陵斜面	縄文・古墳～近世	14	人生武蔵穴墓群	塚穴墓	丘陵斜面	古墳
5	岩宮前遺跡	城館跡・宗教遺跡	丘陵	中世～近世	15	人生武蔵遺跡	散布地	自然堤防	古代
6	化野丸城跡	城館跡	丘陵	中世	16	大正湖遺跡	散布地	自然堤防	古代
7	岩切城跡	城館跡	丘陵	中世	17	岩切畑中遺跡	集落跡・祠堂跡・畑跡・水田跡	自然堤防	縄文～近世
8	東光寺遺跡	城館跡・石室仏群・寺院跡・集落跡・板碑群	丘陵斜面	中世	18	福留館跡	城館跡	自然堤防	中世
9	東光寺塚穴墓群	塚穴墓	丘陵斜面	古墳	19	真瀬沢遺跡	散布地	丘陵	縄文・古墳
10	岩屋敷塚穴墓群	塚穴墓	丘陵斜面	古墳	20	山崎湖遺跡	散布地	丘陵地	縄文

第II-2図 洞ノ口遺跡・鴻ノ巣遺跡の位置と周辺の遺跡

第2節 洞ノ口遺跡

1 遺跡の概要

洞ノ口遺跡は、仙台市宮城野区岩切字洞ノ口、青津目に所在する。JR仙台駅の北東約8.0kmに位置し、七北田川左岸の自然堤防から背後湿地にかけて立地する。遺跡の範囲は、東西約0.8km、南北1.0kmで、標高は約5.0～8.0mである。洞ノ口遺跡の周辺には、国指定史跡岩切城跡をはじめ、東光寺遺跡、多賀城市新田遺跡など、多くの中世に属する遺跡が分布している。

洞ノ口遺跡は、古墳時代から近世にかけての複合遺跡であり、中でも中世の遺構・遺物が主体を占める。

平成4年（1992年）から開始された区画整理事業に伴う発掘調査の結果、自然堤防上に中世の屋敷跡と城館跡が確認された。13世紀に遡る屋敷地と15世紀後半から16世紀にかけての城館に大別される。この城館跡については、岩切城跡やかつての街道に近い地理的な条件やその規模などから、留守氏に関わるものとの見方もある。

また、城館跡の南側には、現在も主要地方道泉・塩釜線に沿って、細長い地割がみられる。これまでの発掘調査による成果などから、城館跡に隣接する町場の可能性が指摘されている地域である。



第Ⅱ-3図 洞ノ口遺跡20次調査地点と周辺既調査地点

2 第20次調査

(1) 調査要項

遺跡名:洞ノ口遺跡(宮城県遺跡登録番号 01372) 調査地点:仙台市宮城野区岩切字洞ノ口165-2

調査期間:平成24年9月3日(月)～5日(水) 調査対象面積:建築面積50.3㎡ 調査面積:25.8㎡

調査原因:個人専用住宅建築工事 担当職員:主事 水野一夫 文化財教諭 佐藤高陽 文化財教諭 千葉 悟

(2) 調査地点と調査経過

対象地は洞ノ口遺跡の南端部に位置する。主要地方道泉・塩釜線の北側に位置し、道路の南側には七北田川が北東から南に向かって流れている。この地域では度々個人住宅建設に伴う調査が行われてきた。それらの調査成果において、遺構確認は現地地表(GL-)50～150cmと一定ではない。今回の調査ではGL-80cm程度で遺構確認面となり、精査したところ溝2条、土坑1基、PIT3基を検出した。

遺物はSD2からのみ須恵器・土師器片が数点出土した。洞ノ口遺跡においては、遺構面が複数検出されていることから、下層に文化層が無いか確認のため、部分的にトレンチを設け、さらに80cm程度掘削したが、遺構・遺物は検出されず、一面グライ化した層に達したため、それ以上の掘削は必要ないと判断した。9月5日埋め戻してすべての調査を完了した。

(3) 基本層序

基本層は大別7層細別10層を確認した。Ⅰ層は、直近の住宅解体に伴う盛土である。Ⅱ層は、住宅建築に伴う造成土である。Ⅲ層は、Ⅱ層を混入するため、造成前の表土と考えられる。Ⅳ層はⅤ層が少量混入しており層相などから、耕作土と考えられる。Ⅳ'層もⅣ層同様、耕作土と考えられる。Ⅴ'層は、深掘したトレンチの視察で、やや明るい色調の部分をⅤ層から分層したものである。Ⅵ層は、南を流れる七北田川の河川堆積物と考えられる細砂層である。上位の鉄分凝着が著しい部分をⅥ、下位の凝着がほとんど認められない部分をⅥ'として分層した。Ⅶ層はグライ化粘質土層である。

層	マンセル	土色	土質	備考
I	10YR2/1	黒色	粘土	ごく最近の盛土 瓦礫多数
II	10YR4/3	にがい黄褐色	シルト	造成土
III	10YR3/2	黒褐色	シルト	造成土 II層を少量混入
IV	10YR2/2	黒褐色	シルト～粘土	耕作土 V層を少量 炭化物少量混入
IV'	10YR3/2	黒褐色	シルト～粘土	V層をブロック状混入
V	10YR4/6	褐色	シルト～粘土	遺構確認
V'	10YR3/2	黒褐色	シルト～粘土	斑状にグライ化
VI	10YR5/2	灰黄褐色	細砂	部分的に鉄分凝着多量
VI'	2.5Y4/4	褐色	細砂	鉄分の及ばなかった下位を分層
VII	N3/2	暗灰色	粘土	保水強、グライ化

(4) 発見遺構と出土遺物

遺構面はIV層上面とV層上面である。検出した遺構は、総数で溝跡2条、土坑1基、ピット3基である。

IV層上面では溝跡1条、土坑1基、ピット3基を検出した。

第1号溝跡 SD1

調査区西側で確認した。SK1と重複し、SK1より新しい。長軸は南北方向、確認できる範囲の規模は、南北2.8m以上、東西幅0.8m程度、深さ0.9m程度である。IV層上面で確認したが、上端はIII層の整地により失われている。壁は底面から概ね垂直に立ち上がるが、V層より上は構築面に向かって開く。覆土はIV～V層に由来する土壌を主体として、人為的に埋め戻されている。遺構内堆積土最下層の一部は、互層状の水性堆積を示す。また底面には遺構の両壁の立ち上がりから5cm程度内側にのみグライ化している範囲が確認できた。グライ化部分から壁際には側板があった可能性も考えられるが、杭跡などは検出されていない。

第1号土坑 SK1

調査区西側、SD1の完掘後、底面で確認した。SD1と重複し、SD1より古い。円形を呈し、規模は直径0.4m深0.68m程度である。堆積土は2層に分層でき、1層はV層近似土、2層はVII層近似のグライ化粘土である。1層が自然堆積であるため、遺構はVI層上面の所産で、1層としたものは2層が土圧で下がったために、上位の堆積が落ち込んだものであり、形態から柱穴と考えられる。

ピット

3基確認した。PIT1は調査区中央、PIT2は調査区東より、PIT3は調査区東で検出した。PIT3はSD3と重複し、SD3より新しい。平面形は、いずれも16cm四方程度の四角形を呈する。深さは12cm程度の残存である。底面は先細らない。PIT2・3は組み合う可能性がある。

V層上面では溝跡1条を検出した。

第2号溝跡 SD2

調査区東側で確認した。PIT3と重複し、PIT3より古い。長軸は南北方向、確認できる範囲の規模は、南北2.4m以上、東西幅0.55m程度、深さ0.3m程度である。V層上面確認したが、上端はIV'層の耕作により失われている。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土はIV'層と区別できない土壌で埋まっており、開放状態のSD2に上位の耕作土が入り埋没したのか、所謂小溝状遺構に類する遺構の可能性もあるが、調査区内に他に組み合うものがない。遺物は土師器片2点、須恵器片1点が出土したがいずれも小破片である。須恵器破片は平底の坏で、底部には切り難し後に再調整がなされている。仙台平野の須恵器編年（宮城県教育委員会1987）では、年代は8世紀頃と考えられる。

(5) 遺構外出土遺物

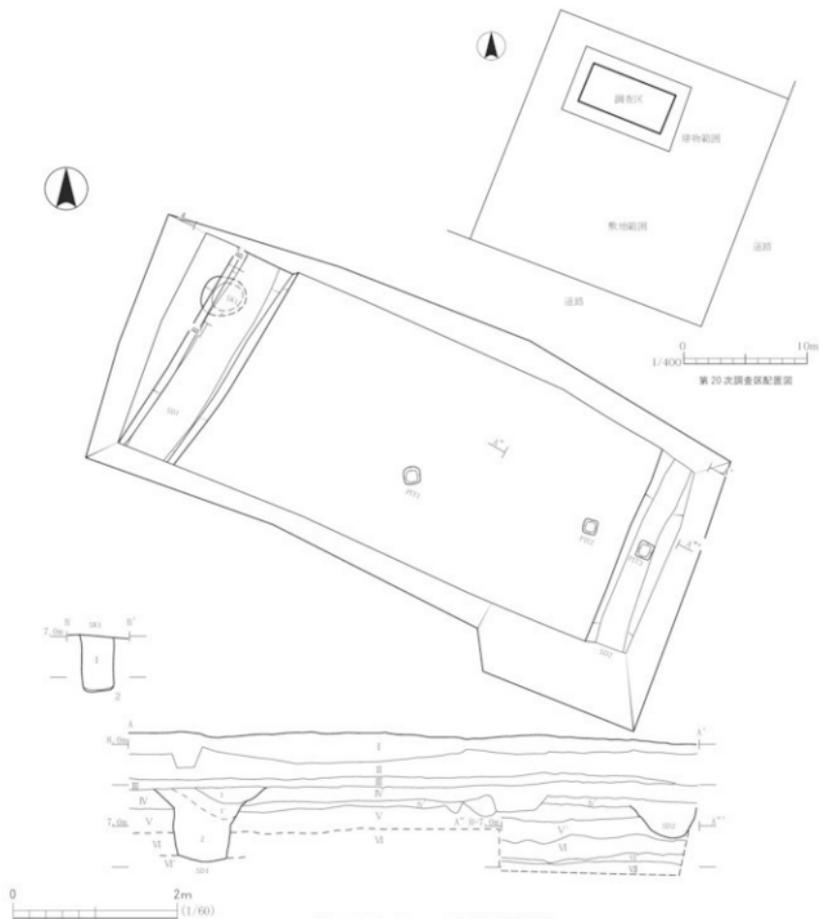
基本層からの遺物の出土はなかった。

(6) まとめ

平成19年度にH19-48として西側隣地の調査が行われ、掘立柱建物が確認されている。層序については砂質の基本層の存在など概ね似るが、各層の時期については、H19-48ではほとんど遺構時期を中世と理解している。今回の調査では、各遺構は時期不明であるが、SD2出土の須恵器破片には、8世紀頃の年代が与えられたことから、今後周辺地域の調査において、時期幅を考慮した調査が必要になると考えられる。

土層注記

SD1				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	シルト	Ⅲに近似
1'	10YR3/2	黒褐色	シルト	1に近似するが、炭化物粒状混入
2	10YR3/1	黒褐色	シルト～粘土	Ⅳ層・Ⅴ層土の混合土
SD2				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	シルト	Ⅳ'層近似
SK1				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/6	褐色	シルト～粘土	Ⅳ'層近似
2	N3/2	暗灰色	粘土	Ⅷ層近似





1. 調査区全景(南から)



2. 調査区断面(南から)



3. SD1完掘状況(北から)



4. SD2完掘状況(北から)



5. SK1確認状況(東から)



6. SK1断面(東から)

第3節 鴻ノ巣遺跡

1 遺跡の概要

鴻ノ巣遺跡は、宮城県仙台市宮城野区岩切字鴻ノ巣に所在する。JR仙台駅の北東約7.0kmに位置し、七北田川右岸の自然堤防上に立地する。今市遺跡に隣接し、遺跡の範囲は、七北田川に沿って、東西約1.0kmにおよぶ。標高は約8.0mほどである。

鴻ノ巣遺跡は、古墳時代から中世にわたる複合遺跡である。これまで宅地造成や河川改修工事、個人住宅建築などに伴い、断片的に発掘調査が行われている。古墳時代には、中期に大規模な集落が営まれていたことが明らかとなっており、古代でも、竪穴住居跡が検出されている。中世になると、陸奥国留守職の伊沢氏が留守氏を名乗り、その居城を岩切城跡とした。この周辺には、中世の遺跡が濃密に分布している。松森城跡、東光寺城跡、化粧坂城跡、小鶴城跡などの城館のほか、洞ノ口遺跡、新田遺跡などでは、大規模な屋敷跡が発見されている。鴻ノ巣遺跡では、12世紀代から14世紀代の屋敷地が確認され、検出される遺構の主体を占める。このうち、13世紀に属する遺構群は、『留守家文書 弘安8年留守家廣譲状』に記載がある冠屋市場もしくは河原宿五日市場の「北町・南町」に対応するとの指摘もある。



2 第15次調査

(1) 調査要項

遺跡名: 鴻ノ巣遺跡(宮城県遺跡登録番号01034) 調査地点: 仙台市宮城野区岩切字鴻ノ巣43番7

調査期間: 平成24年6月4～6日 調査対象面積: 57.5㎡ 調査面積: 16.1㎡

調査原因: 個人専用住宅建築工事 担当職員: 主事 水野一夫 文化財教諭 千葉 悟

(2) 調査地点と調査経過

対象地は鴻ノ巣遺跡の中央部に位置し、平成年に道路建設に伴う調査(『鴻ノ巣遺跡-第6次発掘調査報告書-』(仙台市文化財調査報告書代148集:1991))を実施している南に位置する。第6次調査では、区画の溝跡、水田の検出などの成果があり、今回の調査は、それらに類する遺構・遺物の検出に主眼を置いた。

調査は平成24年6月4日に着手した。現場に3×4.5m程度の調査区を設定し、重機による掘削を行った。130cm程度下げたところで、土坑を検出したため、それにあわせて一面平らにしたところ、東側に比較的新しい遺構が確認できた。全体的には主たる遺構確認面に到達していないことから、薄削りしながら更に10cm強掘削したところ、調査区の中央部に南北方向の溝跡3条を検出し、掘削を終了した。

(3) 基本層序

基本層は、大別9層、細別12層の基本層を確認した。基本層は第6次調査との対比が可能で、報告されているⅦb層が今回の調査におけるⅦ層と層相が類似している。

層	マンセル	土色	土質	備考
I a	2.5Y8/4	淡黄色	細砂	直近の盛砂
I b	10YR3/3	暗褐色	シルト	建物以前の水田耕作土の可能性あり。鉄分の凝着多い
I c	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	窪んだ地形の整地土が、鉄分の凝着多い
II	10YR3/3	暗褐色	粘質土	I cに近似するが鉄分の凝着少ない。
III a	10YR3/3	暗褐色	シルト～粘質土	調査区東側の遺構上面のみレンズ状堆積
III b	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト～細砂	河川氾濫に起因する堆積物の可能性あり
IV	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	SD1～3を自然堆積により埋める
V	10YR6/3	にぶい黄褐色	粘質土	植物遺体多量、鉄分凝着少量。
VI	10YR3/2	黒褐色	シルト～細砂	第6次調査におけるVI層水田耕作土と同じ可能性が高い。
VII	10YR8/2	灰白色	粘質土	黒色土を互層で挟む。
VIII	10YR3/1	黒褐色	シルト～細砂	VIに近似。鉄分凝着。植物遺体中量含む。
IX	10YR4/6	褐色	荒砂	黒い川砂

(4) 発見遺構と出土遺物

遺構検出面は断面の観察により、III a層とIII b層の間、及びV層上面の二面に大別できる。検出された遺構はSD溝跡3条、SX性格不明遺構2基、土坑2基である。各遺構は重複しており、新しい方からSK1→SK1→SX2→SK2→SD2→SD1→SD3の順である。

第1号溝跡 SD1

SD1は調査区中央に確認した。南北長軸の溝跡で、長軸3.6m、短軸0.96m、深さ0.41mである。底面は平坦で壁は急に立ち上がる。北側に向かって浅くなる傾向がある。堆積土はIV層との境界がないが、SD2にわずかに切られている。

第2号溝跡 SD2

SD2は調査区東より確認した。南北長軸の溝跡で、長軸2.4m、短軸0.6m、深さ0.24mである。底面は凹凸があり、平坦ではない。壁はなだらかに立ち上がる。堆積土はIV層との境界がない。底面も均一でない。南側はSK1により切られている。北側に向かって深くなる傾向がある。

第3号溝跡 SD3

SD3は調査区の南東角の断面で確認した。調査区内では部分的な検出で全体は不明であるが、東西長軸の溝跡で、長軸0.4m、短軸1.2m、深さ0.3m程度である。底面は平坦で壁は急に立ち上がる。

第1号土坑 SK1

SK1は調査区内では部分的な検出であるため、全体形は不明である。検出面での規模は長軸1.9m、短軸0.9mで、深さは1.2mである。底面は平坦に作られており、壁は急に立ち上がる。堆積土は混合土で、人為的に埋め戻した可能性が高い。遺物の出土は無い。調査範囲での平面形から土坑としたが、SX1に先行する区画溝の端部で、南ではなく、東方向へ伸びていた可能性もある。SK1を完全に埋め戻した後にSX1を掘り込んでおり、接している部分の底面から30cm程度は土橋状に基本層Ⅶ層以下が残存していた。

第2号土坑 SK2

SK2は調査区の北東角で確認した。遺構は調査区内に部分的に検出したため、全体形は不明である。検出面での規模は東西0.44m、南北0.5m、深さ0.2m程度である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土1層はIII b層との境界がない。自然堆積で埋まっている。遺物は一個体の土師器甕が底面に横たわって出土した。第II-7図1は土師器甕で、長胴を呈し、接合できなかった同体の口縁部は外傾する。外面調整は縦方向のヘラケズリで内面調整はヘラナゲしている。類似は、仙台平野の土師器編年において、養種園遺跡・保春院前遺跡(仙台市教育委員会2009)などで出土しており、国分寺下層式(奈良時代)に比定される。

第1号性格不明遺構 SX1

SX1は調査区南東角に黒色ブランとして検出した。調査区内では部分的な検出であるため、SXとした。断面の堆積方向などの検討から、土坑ではなく、南方向へ長く伸びていく溝跡端部の可能性が高い。確認面での規模は南北1.0m東西1.3m程度、深さ1.28m程度である。底面は平坦で壁は急角度に立ち上がる。堆積土中には下位ほど植物遺体が多

く混入している。堆積土4層は、灰白色火山灰が主体となる層である。SX1とSK1の間は土橋状になる。遺物の出土は無い。

第2号性格不明遺構 SX2

SX2は北壁断面で確認したため、平面形は不明。調査区内では部分的な検出である。断面から観察される規模は、東西1.4m南北0.8m程度、深さ0.24m程度である。底面は、平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は1層が自然堆積で、IIIa層との境界が判然としない。遺物の出土はない。

(5)遺構外出土遺物

第Ⅱ-7図2の、土師器高台付坪の高台部破片が出土している。

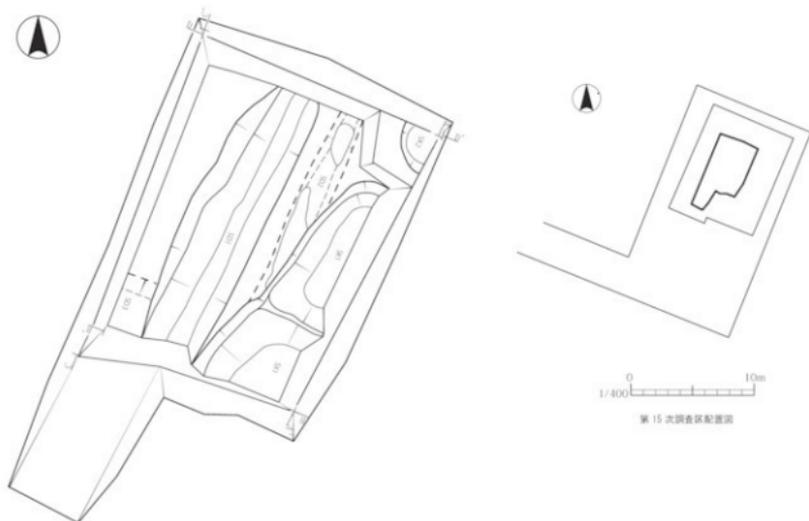
(6)まとめ

第6次調査で検出された遺構と、今回の調査における溝の末端部の可能性があるSX1・SK1の位置関係を確認したところ、同一の区画を構成しないことは明らかである。はじめ、SK1が東西方向、SX1が南北方向の溝でその接合点を見ている可能性を考えたが、土層断面の観察の結果、二者は明確な重複関係にあり、SX1機能時にSK1は存在しない。これらについては、狭小の調査区内での検出であり、不明な点も多いため、用途不明としておく。

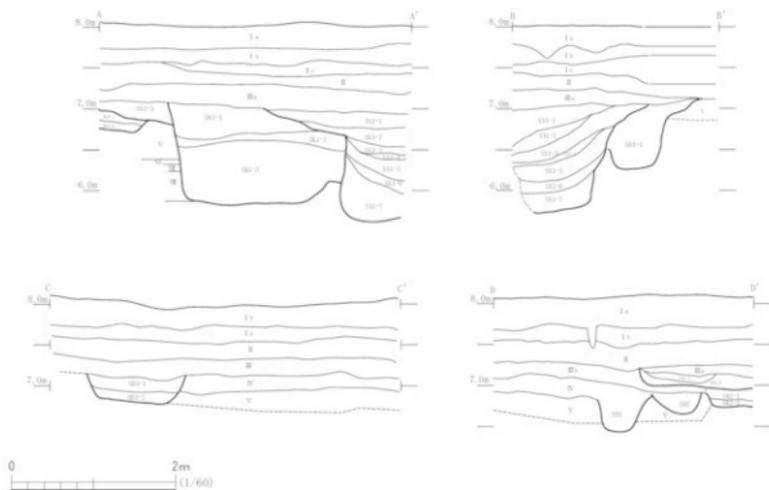
また、土層について対比を試みた。第6次調査ではVIIa層水田跡が検出されており、時期は古墳時代前期の終わりから中期の初めの頃と指摘されている。今回の調査では水田跡は検出されなかったが、層相からVII層に対比した。IIIb層～V層の堆積より新しいSX1の堆積土中から灰白色火山灰が検出されており、15次調査におけるIIIb層～V層からVII層は上限と下限が想定でき、遺構の時期は古墳時代～古代と考えられる。

土層注記

層	マンセル	土色	土質	備考
SD1				
1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	IV層土
SD2				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	IV層土
SD3				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	IV層土
2	10YR2/2	黒褐色	腐食質土	保水性強い
SK1				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	V層を斑状多量混入。人為埋め戻し。2に比しややゆるい
2	10YR3/3	暗褐色	シルト	V層を斑状多量混入。人為埋め戻し。締まり強～下位と境界
3	10YR4/1	褐灰色	細砂	鉄分凝着少量
SK2				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト+細砂	IIIbに同じ
2	10YR4/2	灰黄褐色	細砂	上面に土師器の固体土器
SX1				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR2/1	黒色	シルト	黒色土・鉄分粒状含む。
2	10YR2/1	黒色	シルト	1に近似するがより黒い色調を呈する。1と3の混合土。中位に層状にV近似粘土
3	10YR1.7/1	黒色	シルト	1に近似するがより黒い色調を呈する。下位に層状にV近似粘土
4	10YR5/1	褐灰色	火山灰小	灰白色火山灰?の二次的堆積層。一部抜き取り保存
5	10YR1.7/1	黒色	シルト	植物遺体多量混入
6	5Y3/1	オリーブ黒色	シルト+細砂	植物遺体多量混入
7	5Y2/2	オリーブ黒色	細砂	植物遺体多量混入
SX2				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	シルト+粘質土	自然堆積
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト+細砂	鉄分多く、部分的
3	10YR3/3	暗褐色	シルト+細砂	鉄分少なく、1に比しやや暗い色調



第15次調査区配置図



第II-6図 鴻ノ巣遺跡第15次調査



1



2



第II-7図 出土遺物



1



2



写真図版II-2

図版 番号	写真 番号	登録 番号	出土 遺物	出土 層位	種別	器種	残存	寸法(cm)			調物			材質・備考	
								高	幅	厚	内	外	底		
II-7-1	II-2-1	D-2	SK2	I層	土師器	甕	一部	106.0	-	106.0	タタタ	タタタ	タタタ	タタタ	
II-7-2	II-2-2	D-1		III	土師器	蓋台片	一部	-	36.0	(1.3)	ロクロナダ	タタタ	タタタ	回転糸切り	



1. 調査区全景(北から)



2. 南壁断面(北から)



3. SD3断面(東から)



4. SK1・SX1完掘状況・断面(西から)



5. SX1断面(北から)



6. SK2土師器出土状況(西から)

3 第16次調査

(1) 調査要項

遺跡名: 鴻ノ巣遺跡 (宮城県遺跡登録番号01034) 調査地点: 仙台市宮城野区岩切字鴻巣44-13
調査期間: 平成24年9月11日 調査対象面積: 66.0㎡ 調査面積: 16.0㎡ 調査原因: 個人専用住宅建設工事
担当職員 主事 小泉博明 文化財教諭 伊藤翔太 佐藤高陽

(2) 調査地点と調査経過

対象地は、遺跡の中央部に位置する。調査は平成24年9月11日に着手した。住宅建築範囲内に、東西5.00m、南北3.20mの調査区を設定し、重機により盛土および基本層Ⅰ層を除去して、基本層Ⅱ層上面で遺構検出作業を行った。その結果、南北方向の溝跡3条、ピット1基を検出した。同日中に調査区の埋め戻しを行い、今回の調査を終了した。

(3) 基本層序

基本層は、大別2層、細別3層を確認した。Ⅰ層は宅地に伴う盛土以前の細耕作土で、2層に細別される。Ⅱ層はにぶい黄褐色を呈するしまりのない砂で、今回の調査における遺構検出面である。

層	マンセル	土色	土質	備考
Ia	5Y3/2	オリーブ黒色	シルト	畑地耕作土。炭化物を粒状に含み砂をごく少量含む。
Ib	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	畑地耕作土。白色の小礫をやや多く含む。
Ⅱ	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	畑地耕作土。均質。

(4) 発見遺構と出土遺物

遺構面はⅡ層上面である。溝跡3条、ピット1基を検出した。

第1号溝跡 SD1

調査区中央部で検出した南北方向の溝跡である。SD2溝跡と重複し、これよりも新しい。検出長は約0.90mで、さらに調査区外北へ延びる。規模は上端幅約0.50m、下端幅約0.35mで、深さ約0.25mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層で、炭化物、白色を呈する微細な礫を含む黒褐色の粘土質シルトである。遺物は、土師器甕が1点出土している。体部の小破片で、図示することはできない。

第2号溝跡 SD2

調査区中央部で検出した南北方向の溝跡である。SD1溝跡と重複し、これよりも古い。検出長は約1.05mで、さらに調査区外北へ延びる。規模は上端幅約0.25m、下端幅約0.20mで、深さ約0.20mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層で、基本層Ⅱ層起源の砂と白色を呈する微細な礫を含む暗褐色のシルトである。遺物は、土師器甕が1点出土している。体部の小破片で、図示することはできない。

第3号溝跡 SD3

調査区中央部で検出した南北方向の溝跡である。SD2溝跡と重複し、これよりも新しい。検出長は約1.15mで、さらに調査区外北へ延びる。規模は上端幅約0.40m、下端幅約0.20mで、深さ約0.20mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層で、基本層Ⅱ層起源の砂と白色を呈する微細な礫を含む暗褐色のシルトである。遺物は出土していない。

(5) 遺構外出土遺物

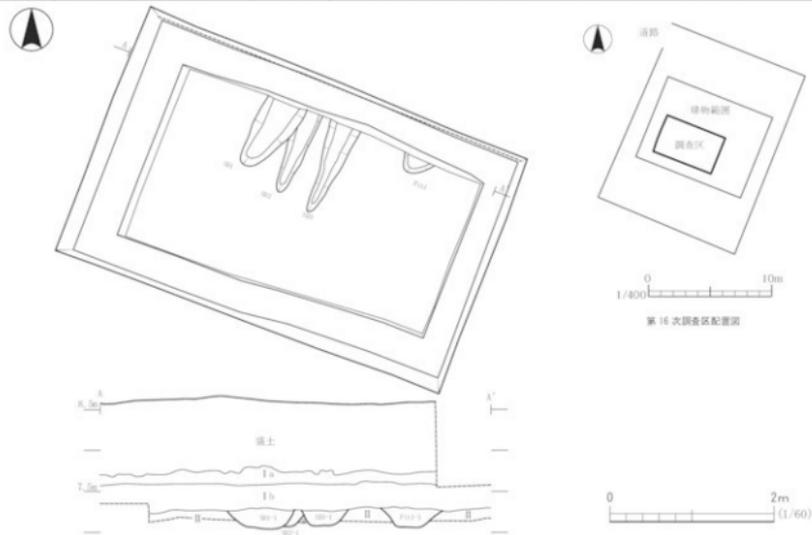
基本層Ⅰ層からは土師器甕1点、ロクロ土師器坏1点、丸瓦1点が出土している。いずれも破片資料である。

(6) まとめ

今回の調査では、溝跡3条、ピット1基を検出した。いずれも上部を基本層Ⅰ層に壊されており、残存状況は不良である。調査区の制約もあり、遺構の性格を明らかにすることはできない。P1は全体を捉えていないが、位置や規模から、SD1～3溝跡に類似した溝跡の端部の可能性もある。遺物は基本層および遺構堆積土から非ロクロ土師器、ロクロ土師器、瓦が出土している。いずれも小破片であり、出土遺物から遺構の年代を判断することはできない。

土層注記

SD1					
層	マンセル	土色	土質		備考
1	10YR3/2	黒褐色	シルト	炭化物と白色の小礫を若干含む。	
SD2					
層	マンセル	土色	土質		備考
1	2.5Y3/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	細砂と白色の小礫、にぶい黄褐色(10YR5/4)砂を粒状にごく少量含む。	
SD3					
層	マンセル	土色	土質		備考
1	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	細砂と白色の小礫、にぶい黄褐色(10YR5/4)砂を粒状にごく少量含む。	
PI					
層	マンセル	土色	土質		備考
1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	細砂と白色の小礫、にぶい黄褐色(10YR5/4)砂を小ブロック状に少量含む。	



第Ⅱ-8図 鴻ノ巣遺跡第16次調査



1. 調査区全景 (東から)



2. 調査区全景 (南西から)

写真図版Ⅱ-4



1. SD1~3溝跡・P1 (南西から)



2. 調査区北壁断面 (南東から)

写真図版Ⅱ-5

第4節 小鶴城跡

1 遺跡の概要

小鶴城跡は、JR仙台駅の北東約4.3kmの宮城野区新田三丁目に所在する。七北田丘陵が平野部と接する地点にあり、遺跡の東側に広がる後背湿地に突き出した舌状丘陵上に占地している。現況における標高は「伝上山」と呼ばれる丘陵頂部で約16mを測り、丘陵周辺の後背湿地との比高差は約11mである。

文献上の小鶴城跡については、『安永風土記御用書出』や享保13年(1728年)の『仙台領古城書立之覚』などに記載がある。『仙台領古城書立之覚』には、「小鶴城、東西六十間、南北三十六間、右之城主名一切不相知候」とある。また、『安永風土記御用書出』では、小鶴城を「古館」として記載し、「堅三十八間、横二十七間、先年、逸見丹波申御方住居之由申伝候処、年号相知不申候、寛永十八年御竿答之節、右館畑ニ罷成候ニ付、当時何館申義共ニ知不申候事」とあり、規模や城主、年代について記載されている。規模の記載については、本丸部分の規模を示すものとみられるが、現地地形からその地点を推定することはできない。城主については、『仙台領古城書立之覚』では不明となっている。一方、『安永風土記御用書出』では城主を「逸見丹波」としている。逸見氏は留守景宗が伊達氏より入嗣した際に従ってきた家臣で、留守氏では宿老的な立場にあったという(天文17年(1548年)『留守分限帳』)。また、留守景宗が国分氏と争った際、佐藤三郎に小鶴城を守らせたと『留守氏家譜』(留守氏文書)に記されている。小鶴城の具体的な年代の記載については、『安永風土記御用書出』が唯一とみられ、これによると、寛永18年(1641年)の段階で城館は畑地となっており、城の名称も不明となっている。

小鶴城跡では、これまで個人住宅建築や宅地造成に伴う発掘調査が断続的に行われている。城館主体部とみられる丘陵西部で行われた第4次調査A区では、小鶴城跡に関わりとみられる整地層や掘立柱建物跡などが検出されている。また、丘陵斜面下で行われた発掘調査では、丘陵裾部を巡る大規模な溝跡を検出している。第1次調査では、丘陵西側に確認できる土塁状の高まりと溝状の地表顕在遺構のさらに西側で溝跡2条などを検出し、三重に溝が巡る可能性が指摘された。第2次調査以降の発掘調査でも、丘陵斜面直下と丘陵裾部に配置された溝跡が確認され、その位置や規模から、小鶴城跡に関連する遺構と考えられている。

2 第9次調査

(1) 調査要項

遺跡名:小鶴城跡(宮城県遺跡登録番号01194) 調査地点:仙台市宮城野区新田3丁目98-3
 調査期間:平成24年4月26日 調査対象面積:91.0㎡ 調査面積:11.7㎡ 調査原因:個人専用住宅建築工事
 担当職員:主事 小泉博明 文化財数論 伊藤雅太

(2) 調査地点と調査経過

対象地は、小鶴城跡の東部に位置し、第6次調査地点の南に位置する。確認調査は平成24年4月26日に着手した。周辺の地形や第6次調査の成果から、小鶴城跡を囲む溝跡の検出が当初から想定された地点にあたる。この溝跡の検出を目的として、住宅建築範囲内に、東西3.9m、南北3.0mの調査区を設定した。調査では、重機を用いて盛土および基本層Ⅰ～Ⅱ層を除去し、基本層Ⅲ層上面で遺構検出作業を行った。その結果、南北方向の溝跡1条を検出した。

(3) 基本層序

基本層は、大別3層、細別5層を確認した。Ⅰ層およびⅡ層は、宅地化以前の表土もしくは耕作土で、それぞれ2層に細分される。Ⅲ層は黄褐色の均質な粘土で遺構検出面である。なお、今回の調査地点には、現在の宅地化に伴う約0.60mの盛土がある。

層	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰa	2.5Y3/2	黒褐色	シルト～粘土	小礫、砂を含む
Ⅰb	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト～粘土	小礫、砂をやや多く含む
Ⅱa	2.5Y3/2	黒褐色	粘質土	砂をやや多く含む、小礫を少量含む
Ⅱb	5Y3/2	オリーブ黒色	粘質土	砂を斑状に多く含む、礫をごく少量含む
Ⅲ	2.5Y3/1	黄褐色	粘質土	均質

(4) 発見遺構と出土遺物

遺構面はⅢ層上面である。溝跡1条を検出した。遺物は遺構堆積土から土師器甕、近世陶磁器、近現代磁器が少量出土している。

第1号溝跡 SD1

調査区東半部で検出した南北方向の溝跡である。調査区壁面の観察から、上部は削平を受けているものと考えられる。一部の検出であるが、検出長は約2.90m、上端幅約3.00m以上で、下端幅と深さは不明である。断面形は明らかではないが、溝跡西壁は緩やかに立ち上がる。堆積土はⅠ層を確認した。礫、砂、植物遺存体を含む黒褐色の粘土である。遺物は、土師器甕の小破片がごく少量出土している。SD1溝跡の時期は、出土遺物がごく少量であり、遺構堆積土上層からの出土であることから、遺物から遺構の年代を明らかにすることはできない。

(5) 遺構外出土遺物

遺構外から、遺物の出土は無い。

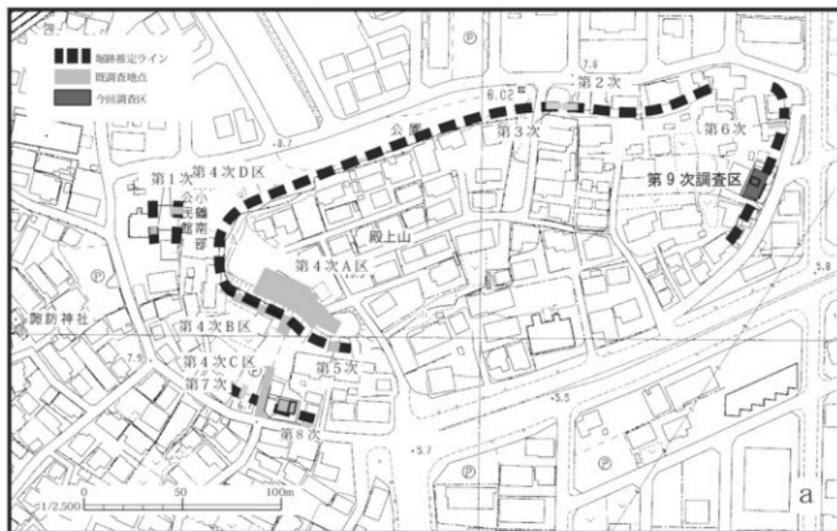
(6) まとめ

今回の調査では、南北方向の溝跡1条を検出した。西から東に向かって緩やかに傾斜する丘陵斜面の裾部に位置する。位置と規模などから、第6次調査で検出した障壁を伴う溝跡と一連の遺構と考えられる。今回の調査で確認したSD1溝跡は、一部の検出と調査であることから規模や障壁などの詳細や出土遺物から溝跡の年代を把握することはできなかった。小鶴城跡では、これまでの調査成果から、小鶴城跡が立地する丘陵が三重の溝跡で囲まれていた可能性が指摘されている。この三重の溝跡のうち、最も内側の溝跡は、丘陵斜面直下を巡ることが第1次調査以降の調査で確認されている。今回の調査で検出した溝跡は、現状の地形やこれまでの調査成果から、この丘陵斜面直下を巡る溝跡の一部と推定される。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	小鶴城跡	城郭跡	丘陵	中世	12	安養寺配木場前堂跡	堂跡	丘陵斜面	古代
2	小鶴遺跡	散布地	自然堤防	平安	13	小田原前田堂跡	堂跡	丘陵斜面	奈良
3	善広寺東横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳	14	神明社堂跡	堂跡	丘陵斜面	古代
4	善広寺横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳	15	神明社裏遺跡	散布地	丘陵	古代
5	高沢公園堂跡	堂跡	丘陵斜面	古墳・奈良	16	神明社東面鎌倉瓦堂跡	堂跡	丘陵斜面	古代
6	大蔵寺堂跡	堂跡	丘陵斜面	古墳・奈良	17	精江遺跡	堂跡	丘陵斜面	古代
7	十手前瓦堂跡	堂跡	丘陵斜面	古代	18	二の森堂跡	堂跡	丘陵斜面	平安
8	安養寺下瓦堂跡	堂跡	丘陵斜面	古代	19	二の森遺跡	散布地	丘陵斜面	平安
9	安養寺下間瓦堂跡	堂跡	丘陵斜面	平安	20	互瓦敷沼堂跡	堂跡	丘陵斜面	古代・近世
10	安養寺中間瓦堂跡	堂跡	丘陵斜面	古代	21	庵中前堂跡	堂跡	丘陵斜面	奈良
11	安養寺間瓦堂跡	堂跡	丘陵斜面	平安					

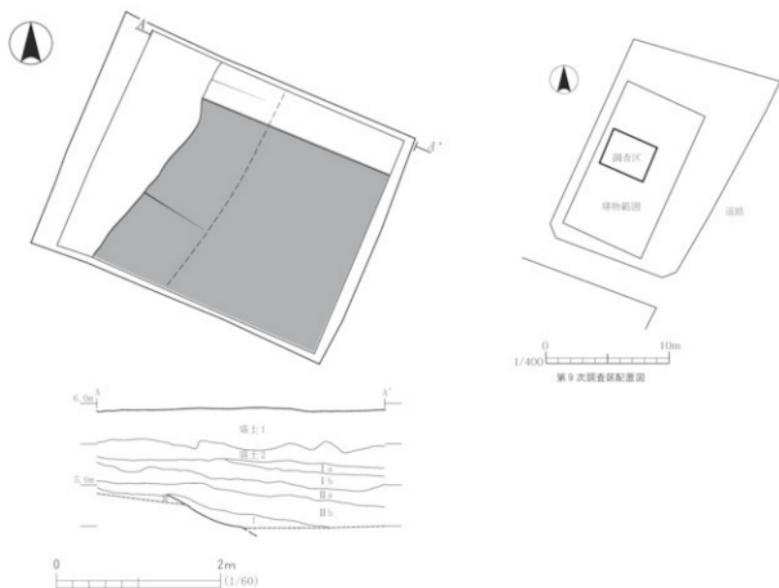
第II-9図 小鶴城跡の位置と周辺遺跡



第II-10図 第9次調査区と既調査地点

土層注記

SD 1				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	2.5Y3/1	黒褐色	粘質土	砂礫をごく少量含み、植物遺存体を少量含む



第II-11図 小鶴城跡第9次調査



1. 調査区全景 (南から)



2. 調査区北壁断面 (南東から)

写真図版II-6

第Ⅲ章 若林区内の調査

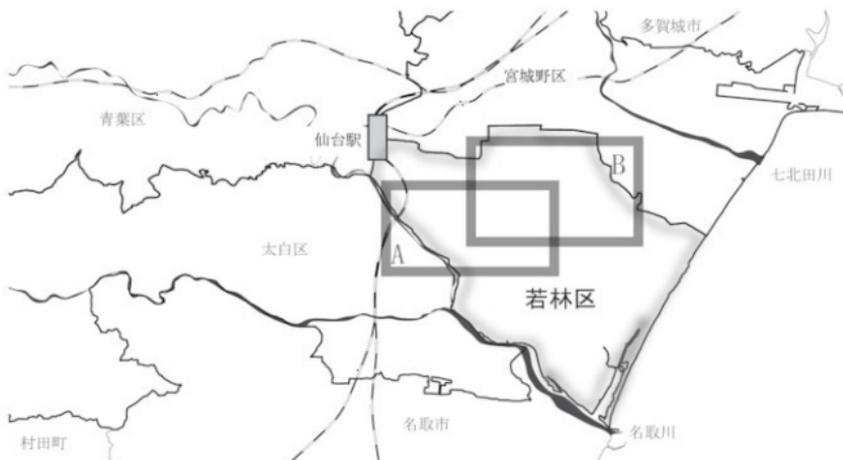
第1節 概要

本件に係る若林区内で行われた調査は、表Ⅲ-1に示すとおりである。宮城野区内では、第Ⅲ-1図のA・B二か所の区域内で7遺跡の調査を行っている。これらは、第Ⅲ-2図のa区域内の南小泉遺跡、b区域内の養種園遺跡、c区域内の沖野城跡、第Ⅲ-19図内の北屋敷遺跡、押口遺跡などである。

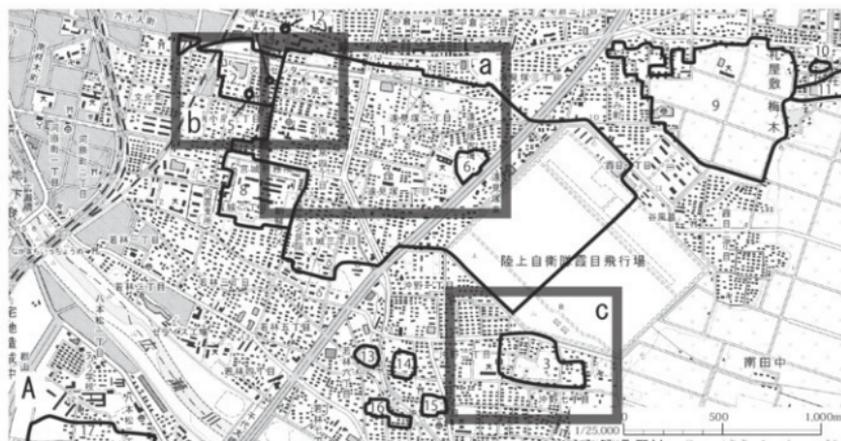
ここでは、南小泉遺跡第72次（H24-16）・73次（H24-26）・74次調査（H24-36）、養種園遺跡第9次調査（H24-34）、北屋敷遺跡第5次調査（H24-37）、沖野城跡第13次調査（H24-14）の成果を報告する。

表Ⅲ-1 若林区内の調査一覧

NO.	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	備考	届出等NO.
23-33	南小泉遺跡	79.3㎡	21.0㎡	3月12日		H23 106-90
23-79	今泉遺跡	90.2㎡	24.6㎡	3月12日		H23 106-284
24-4	押口遺跡	113.9㎡	40.5㎡	4月24日		H23 106-402
24-14	沖野城跡	96.5㎡	31.7㎡	6月4日～6月6日	第13次	H24 122-15
24-15	中在家南遺跡	133.2㎡	25.0㎡	6月11日		H24 122-29
24-16	南小泉遺跡	117.0㎡	29.4㎡	6月20日～6月29日	第72次	H24 129-1
24-23	南小泉遺跡	75.8㎡	27.6㎡	6月11日		H24 122-70
24-26	南小泉遺跡	100.3㎡	25.5㎡	7月26日～7月30日	第73次	H24 122-64
24-28	沖野城跡	74.4㎡	24.6㎡	7月9日		H24 122-106
24-34	養種園遺跡	60.0㎡	15.0㎡	7月18日	第9次	H24 122-113
24-36	南小泉遺跡	145.3㎡	36.3㎡	7月31日～8月8日	第74次	H24 122-131
24-37	北屋敷遺跡	244.8㎡	146.4㎡	7月30日～8月29日	第5次	H24 129-7
24-48	南小泉遺跡	112.8㎡	28.2㎡	9月10日～12日		H24 122-192



第Ⅲ-1図 若林区と遺跡位置図の位置



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	南小泉遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	弥生～近世
2	養種園遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	古代・中世・近世
3	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世
4	蛭塚古墳	円墳	自然堤防	古墳(後期)
5	猫塚古墳	円墳	自然堤防	古墳(後期)
6	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳(前期)
7	保春院前遺跡	集落跡	自然堤防	古代・中世
8	若林城跡	城館跡・円墳・集落跡	自然堤防	古墳・平安～近世
9	仙台東郊委埋	委埋遺構	自然堤防	古代
10	中在家遺跡	包含地	自然堤防	古代
11	中在家南遺跡	土器棺墓・土抗墓・方形周溝墓・河川跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	弥生～中世
12	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳(終末期)
13	砂埋Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古代
14	神橋遺跡	埴物跡・河川跡・包蔵地	自然堤防	古代
15	中榎西遺跡	散布地	自然堤防	弥生・古墳・古代
16	砂埋Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
17	郡山遺跡	官衙跡・寺院跡・包含地	自然堤防・後背湿地	縄文～奈良(旧)

第Ⅲ-2図 南小泉遺跡・養種園遺跡・沖野城跡の位置と周辺の遺跡

第2節 南小泉遺跡

1 遺跡の概要

南小泉遺跡は、宮城県仙台市若林区南小泉、遠見塚、古城、霞ノ目に所在する。JR仙台駅の南東約3.5kmに位置し、広瀬川左岸の自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は、東西約2.0km、南北約1.0kmにおよぶ。標高は7.0～14.0mほどである。南小泉遺跡は、縄文時代から近世までの複合遺跡である。これまでに68次におよぶ発掘調査の他、個人住宅建築などに伴う発掘調査が断続的に行われている。

縄文時代では、晩期の大洞A式に比定される縄文土器、剥片石器、礫石器が出土した遺物包含層が検出されている。弥生時代では、土器棺墓がある。集落の発見には至っていないが、多くの遺物が出土している。遺物には、弥生時代前期から後期の土器、石包丁、石斧、石鏃などの石器がある。

古墳時代には、古墳時代中期から後期にあたる集落跡が発見されている。また、南小泉遺跡の範囲内や周辺には、国指定である遠見塚古墳をはじめ、法領塚古墳、猫塚古墳などが分布している。

古代になると、奈良時代に遺跡の北側に陸奥国分寺や国分尼寺が造営される。遺跡内では、奈良時代末から平安時



第III-3図 南小泉遺跡の調査地点と主要調査地点

代の堅穴住居跡や掘立柱建物跡が増加し、9世紀代を中心とする集落が認められる。

中世には、遺構の分布は遺跡の西部で顕著になる。12世紀から16世紀にかけて、土塁や区画溝を伴う屋敷跡や城跡が検出されている。このうち、第16次調査で検出された城館とその周辺に散在する屋敷跡は、『仙台領古城書立之覚』の中にある小泉村の「古城」である可能性がある。

近世では、若林城跡に関する遺構群がある。寛永4年(1627年)の若林城の造営にあわせて区割りされた町並みと考えられ、家臣、町人の居住域となっている。溝で画された屋敷地の発掘調査では、掘立柱建物、井戸、土坑、土塀などが検出されている。

2 第72次調査

(1) 調査要項

遺跡名:南小泉遺跡(宮城県遺跡登録番号01021) 調査地点:仙台市若林区遠見塚2丁目305-1

調査期間:平成24年6月20日～6月29日 調査対象面積:88.3㎡ 調査面積:29.4㎡

調査原因 共同住宅建築工事

担当職員 主事 水野一夫 文化財教諭 佐藤高陽 千葉 悟 伊藤翔太

(2) 調査地点と調査経過

対象地は、南小泉遺跡の中央北より、遠見塚古墳の西北西100mに位置する。確認調査は平成24年6月20日に着手した。建物範囲内に概ね3×9m程度の調査区を設定し、重機による掘削を行った。0.7m程度掘削したところで遺構面が検出され、堅穴住居跡などの存在を確認した。平成24年6月29日すべての調査を終え、埋め戻して撤収した。

(3) 基本層序

基本層は大別3層、細別6層を確認した。Ⅰ層は耕作土。Ⅱ層が遺構面であるが、上面の削平が著しい。Ⅲ層は遺構調査で部分的に壁面で確認しており、弥生時代の土器片をわずかに包含している。

層	マンセル	土色	土質	備考
I a	10YR6/2	灰黄褐色	砂	直近の造成土、所澤山砂
I b	10YR3/4	暗褐色	シルト	宅地造成土
I c	10YR4/6	褐色	シルト	宅地造成土
I d	10YR3/4	暗褐色	シルト	宅地以前の耕作土
Ⅱ	10YR4/4	褐色	シルト～粘土	上面で遺構検出
Ⅲ	10YR3/3	暗褐色	砂	弥生時代の土器片を含む

(4) 発見遺構と出土遺物

堅穴住居は形態が推定できるもの2軒(SI1・SI5)、重複関係から別な住居を推定するもの2軒(SI2・SI3)、掘方のみで全体が不明なもの1軒の5軒を検出した。尚、SI2・3は堅穴の呈は残っていないかったが、現場所見にのみ報告する。土坑は3基検出した。

第1号堅穴住居 SI1

SI1は調査区南東りに検出した。SI2・3・5と重複関係があり、SI2・3より古く、5より新しい。上面は耕作および、重複する別な遺構により壊されており、残りが悪く、カマド周辺と貯蔵穴を含む部分で床面を確認した。カマド煙道方向を長軸と仮定したときの方向は北東。遺構の南側が調査区外に続いており、確認できた範囲での規模は長軸4.1m短軸3.2m、残存深さ0.11m程度。カマドの煙出しから燃焼面までの距離は1.6m程度である。カマド右側に貯蔵穴が確認できた。また、位置関係から伴うと考えられる柱穴を2基確認している。この柱穴の中心距離は1.5m程度である。堆積土はカマド周辺で上位に別な住居が設けられた形跡がみられ、その貼床ないしは硬化とSI1に対する人為埋め戻しで細別できた。

カマド

カマドは重複する遺構により上面の様子は不明である。また、袖の燃焼面側が貯蔵穴に落ち込んだ形で部分的に出土している。燃焼面は二面あり、間に間層が入る。下の燃焼面を1、上の燃焼面を2とした。1に対し2はカマドの張り出しが遺構の外側に広げられており、住居の拡張に伴う、作り直しと考えられる。燃焼部の煙道側には支脚として土器器の高坪を用いている。第Ⅲ-6図1が燃焼面側、第Ⅲ-6図2が煙道側に縦に並び、第Ⅲ-6図1は坯部のみを伏せて置

き、第Ⅲ-6図2は脚部以下で正位に置かれていた。同一個体の可能性もあるが、接合しなかった。特に第Ⅲ-6図1側の上面にはSI2（後述）の貼床が被っていたため、不明である。燃焼面は二面あり、作り変えを行ったものと考えられる。煙道はⅢ層と異なる土壌で満たされた部分を掘方として記録した。掘方内からは焼土塊・炭化物などは検出できず、第6図5が伏せた状態で出土した。

貯蔵穴

貯蔵穴は2重に掘りあがり、比較的浅いカマド袖と同じ広さのものと、壁より一段深く掘れる部分とがあるが、断面観察で別なものだと判断できなかった。深い方の底面からカマドの袖の破片が出土しており、その上から第Ⅲ-6図3、第Ⅲ-6図6が出土している状況から、袖の破片はSI1機能時の作り変えて生じたものの可能性がある。浅く広い方は、北側の縁辺から第Ⅲ-6図7の甎が出土している。

柱穴

北側から2基確認した。上部は耕作により削平されている。底面はP1、P2とも0.25m程度の円形を呈し、床面のレベルから底面までの深さは、P1が0.36m、P2が0.55mである。

出土遺物

貯蔵穴及び煙道出土土器は、出土状況から住居の廃絶時に伴うと考えられる。これらは仙台平野の土師器編年において、鴻ノ巣遺跡第7次調査のⅡ期～Ⅲ期の土器群：古墳時代中期後半（引田式）に比定され、この住居の時期を示している。

第2号竪穴遺構 SI2

SI1の、特にカマドを埋める堆積土は、上位に別な遺構を構築する際の人為埋め戻しであるが、この埋め戻しの上面が硬化しており、重複する住居の床面である可能性が高い。形態・規模等は不明であるが、SI1のカマドと後述SI3の柱穴に被るため、重複関係では最も新しい。住居であると考えられるが、残存がわずかであり、壁の立ち上がりも確認できなかった。不明な点が多いが、竪穴遺構として記録しておく。

第3号遺構 SI3

SI1のカマドの禁口に、重複する柱穴を検出した。SI1、SI2との重複があり、SI1より新しく、SI2より古い。北東側0.85mに同様の堆積を示す柱穴があるが、関係は不明である。住居の柱穴と考えられるが、SI1とはカマドの位置などを踏襲しない関係である。後にSI2の貼り床が被ることから、SI3の遺構形態も踏襲されなかった可能性がある。残存がわずかであり、不明な点が多いが、状況的に竪穴住居の可能性を指摘しておく。

第4号竪穴住居 SI4

SI4は掘方と中心部にPITがあるのみで、全体は不明である。P1は掘方を切るが、SI4に付随するものかは不明である。SI1、SI5と重複関係があり、どちらよりも古い。北側の調査区外へと続き、概ね方形を呈すると考えられるが、調査区内での規模は、北西から南東が3.45m、南西から北東が3.3m深さ0.13m程度で、堆積土は粘土質である。

第5号竪穴住居 SI5

SI5は調査区南西より検出した。上面は耕作および、重複する別な遺構により壊されており、残りが悪く、カマド周辺と貯蔵穴を含む部分で確認した。カマド煙道方向を長軸と仮定したときの方向は北東。遺構の南側が調査区外に続いており、確認できた範囲での規模は長軸2.0m短軸1.8m、残存深さ0.25m程度。カマドの煙出しから燃焼面までの距離は0.8m程度である。カマド右側に貯蔵穴が確認できた。柱穴は確認できなかった。堆積土は貯蔵穴周辺の観察から、人為埋め戻しと考えられる。

カマド

カマドは燃焼部がほとんど掘削されつくしており、焼け面はほとんど残っていない。煙道についても同様で掘方とみられる別な土壌で埋まる範囲と、煙出しから推定的に形状を把握した。煙出し部は焼土粒・炭化物粒が含まれており、断面で二段になることから作り直した可能性がある。

貯蔵穴

貯蔵穴は、カマドに対して右側に掘り込まれている。第7図1、2の土師器の球胴甕が出土した。これらは接点が無かったものの、出土状況から一個体であると考えられる。

出土遺物

貯蔵穴出土の球胴甕等、出土している土師器は出土状況からこの住居に伴うと考えられる。これらは、SI出土土

器と同様、古墳時代中期後半の引田式に比定されねこの住居の時期を示している。

第1号土坑 SK1

SK1は調査区東側で確認した。概ね円形を呈すると思われるが、半分程度は調査区外にあるため、全体は不明。また、上部を攪乱されている。SK2との重複があり、比して新しい。調査区内での規模は直径0.5m程度、深さ0.15m程度である。底面はやや不整で、壁の立ち上がりは緩やかである。

第2号土坑 SK2

SK2は調査区東側で確認した。長円形を呈する。SK1との重複があり、比して古い。長軸は南北方向で、規模は長軸1.0m程度、短軸0.85m程度、深さ0.28m程度である。底面は平らで、壁の立ち上がりはやや緩やかである。上面から1段下げたところで、倒立した小型の壺型土器が頸部以上が無い状態で出土した。土層は分層できない単一層で埋まっており、積極的に人為埋め戻しといえる要素がなかったため、土器が置かれたものか、流れ込みかは不明である。

第3号土坑 SK3

SK2は調査区北東側で確認した。長円形を呈する。他との重複はない。北側の一部が調査区外である。長軸は東西方向で、規模は長軸1.25m程度、短軸0.9m程度、深さ0.28m程度である。底面は平らで、壁の立ち上がりはやや緩やかである。土層は2層に分層したが、人為性は見られない。

(5) 遺構外出土遺物

天箱1箱分出土した遺物の大半は、II層の耕作により巻き上げられた古墳時代中期の土師器片であるが、わずかに下層の弥生時代の土器片が含まれている。また、III層中から弥生時代の土器片が少量出土した。

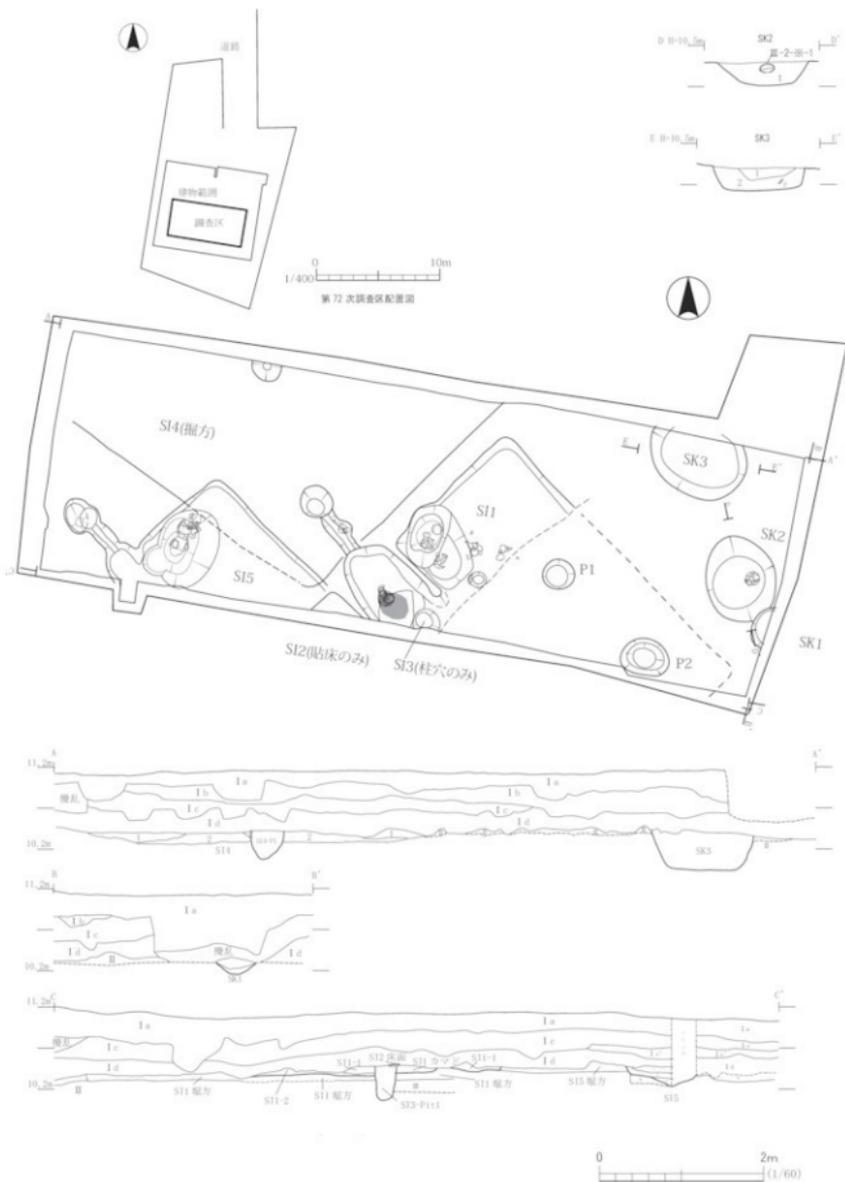
(6) まとめ

堅穴住居跡のうち、カマドまで確認できたSI1・SI5は、出土遺物から古墳時代中期後半・引田式期の住居であると考えられる。SI1のカマドは最低2面の燃焼面があり、上位の燃焼面では高坏を支脚に転用して利用していた。これらは南小泉遺跡や、鴻ノ巣遺跡において、南小泉式の土器が出土する住居に類似する例がある。また、これらの遺構以外から出土した遺物の中に、内面黒色処理を施された土師器が少量含まれており、それらに伴う遺構は、本調査区においては、明確化することができなかった。

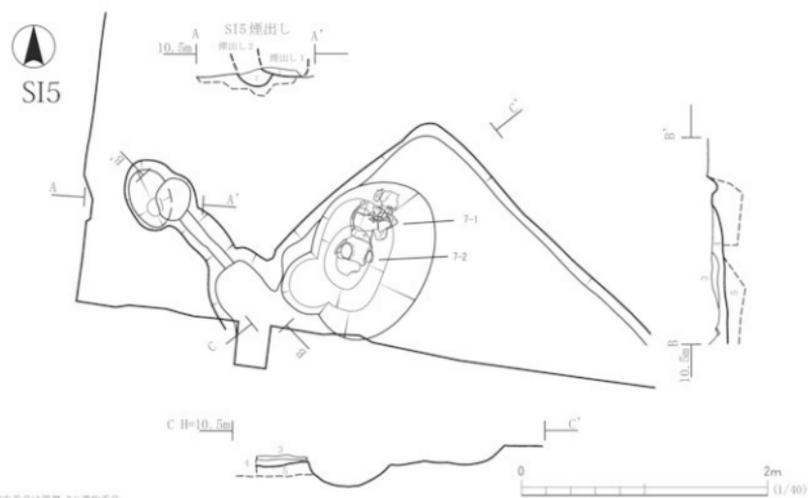
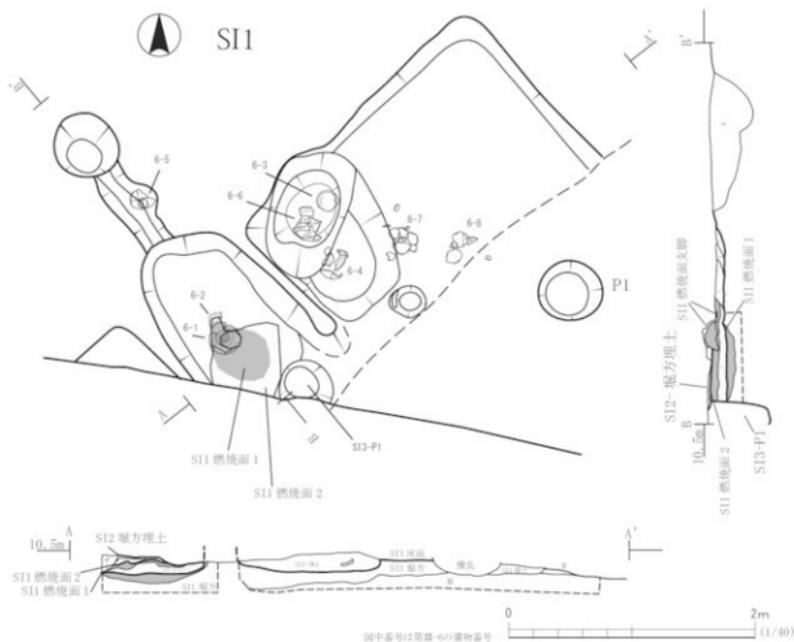
III層には、砂主体層であり、成因は河川の氾濫などによる再堆積であろうが、今回の調査においては、わずかであるが弥生時代の遺物のみを包含していた。I層からもわずかに弥生時代に属する土器片が出土しており、今後の近隣の調査における下層調査に期待したい。

土層注記

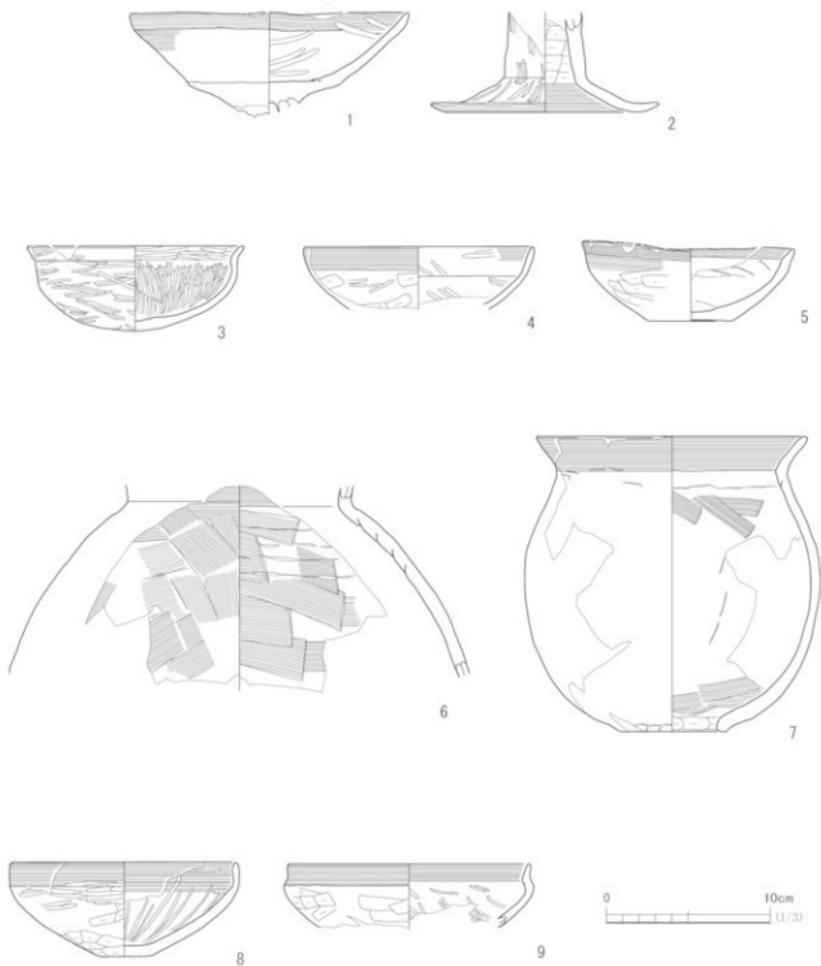
SI1				
層	マンセル	土色	土質	備考
焼土	5YR5/8	明赤褐色	焼土	燃焼面2
1	10YR3/4	暗褐色	シルト	カマド作り直しのための人為埋め戻し土
1'	10YR3/4	暗褐色	シルト	焼土粒状・ブロック状・細粒状を中量混入
2	7.5YR3/4	暗褐色	シルト	焼土粒を多量混入
3	7.5YR3/4	暗褐色	シルト	2に比して多量の焼土粒を混入
4	7.5YR4/4	褐色	シルト	焼土の混入がない。部方
焼土	5YR3/6	暗赤褐色	焼土	燃焼面1
SI1-SK1				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	5YR3/1	黒褐色	シルト	焼土粒・焼土細粒混入
SI1-新方埋土				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	7.5YR4/4	褐色	シルト	上面硬化
SI2				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	7.5YR4/4	褐色	シルト	SI2床面。硬化している。細砂少量混入
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	部分的に観察できる
SI3				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/4	暗褐色	粘質土	SI3-P1 10YR5/6との互層。人為埋め戻し



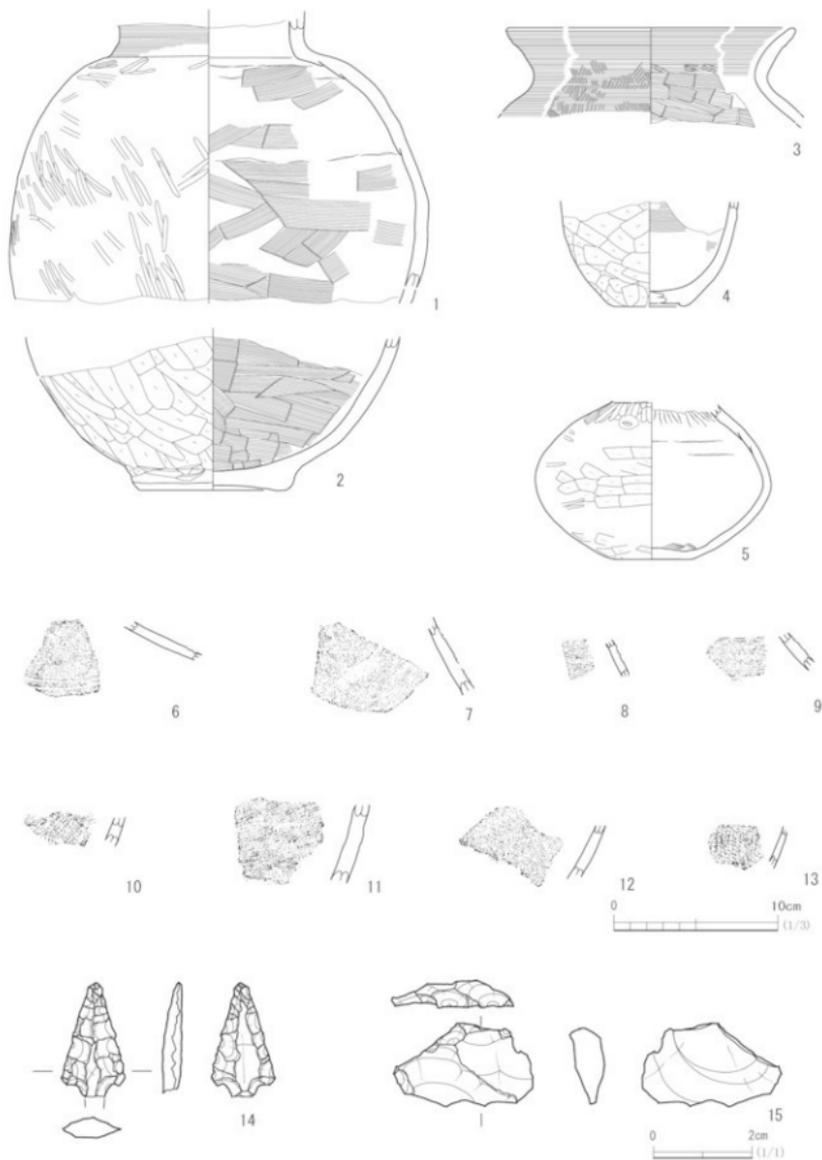
第Ⅲ-4図 南小泉遺跡第72次調査



第Ⅲ-5図 S11・S15平面図・断面図



第Ⅲ-6図 出土遺物1



第Ⅲ-7圖 出土遺物2



1



2



3



4



5



6



7



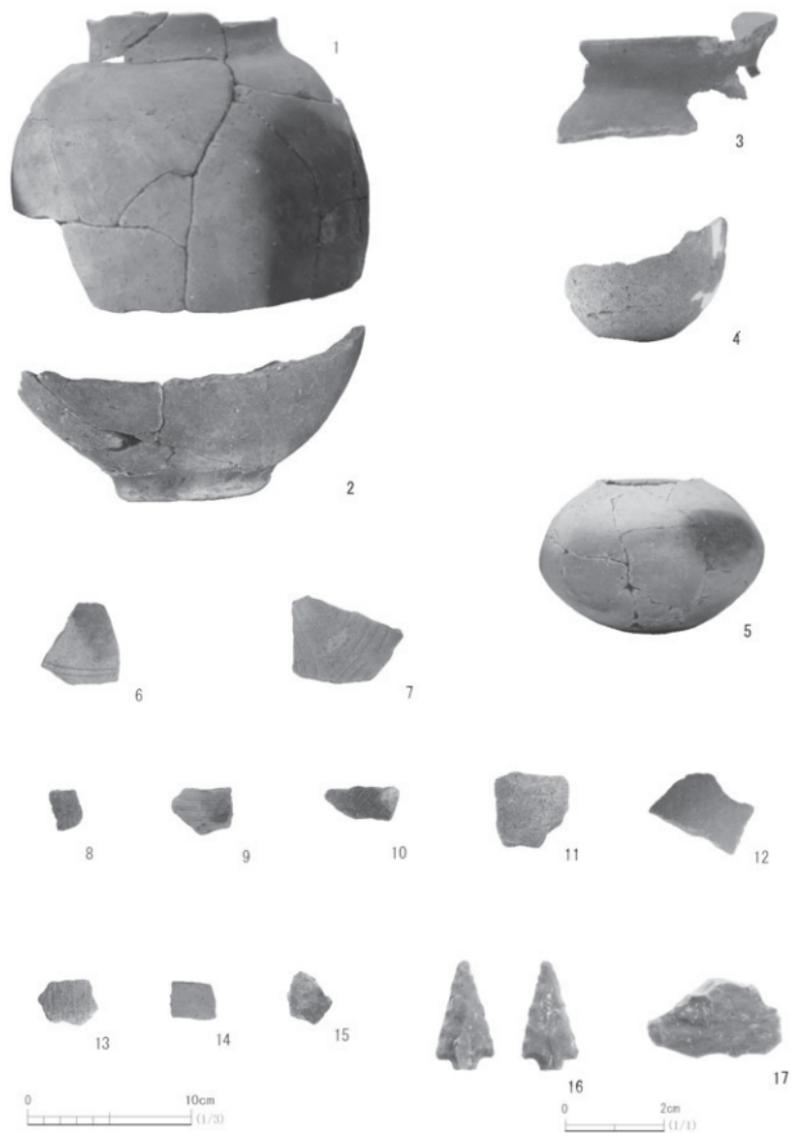
8



9



写真図版Ⅲ-1



写真図版Ⅲ-2



1. 調査区全景 (西から)



2. 調査区全景 (北西から)



3. 基本層南西部 (北から)



4. S11完掘 (南東から)



5. S11カマド断面 (北から)



6. S11断面 (南東から)



1. S11カマド完掘1(東から)



2. S11貯蔵穴遺物出土状況(北から)



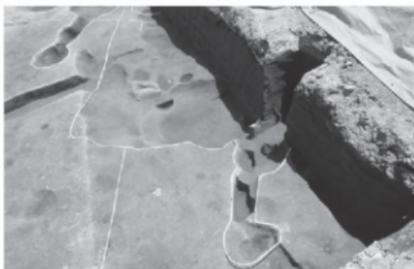
3. S11煙道掘方遺物出土(東から)



4. S11と重複する遺構(北から)



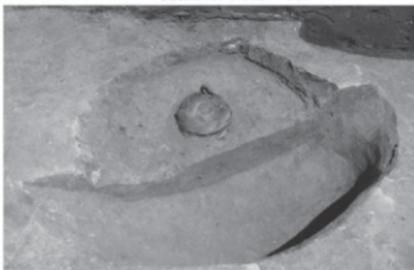
5. S14残存状況(南西から)



6. S15完掘状況(北西から)



7. S15貯蔵穴2段目(西から)



8. SK3遺物出土状況(西から)

2 第73次調査

(1) 調査要項

遺跡名:南小泉遺跡(宮城県遺跡登録番号01021) 調査地点:仙台市若林区南小泉2丁目121番4, 121番2
調査期間:平成24年7月26日～7月30日 調査対象面積:100.3㎡ 調査面積:25.5㎡
調査原因:個人専用住宅建築工事 担当職員:主事 水野一夫 文化財教諭 千葉 悟

(2) 調査地点と調査経過

対象地は、南小泉遺跡の中央西よりを南北に通る宮城の萩大通りの通り沿い、西側に位置する。確認調査は、平成24年7月26日に着手した。建物範囲内に概ね東西9m、南北3mの調査区を設定し、重機により表土・盛土の掘削を行った。0.46m程度掘削したところで、遺構を検出した。

各遺構は重複するため、重複の上位から順次調査・完掘を行った。土坑13基、溝跡1基を検出し、断面の観察により遺構の掘り込み面が二面あることが確認できた。調査終了後、埋め戻しを行い7月30日撤収を完了した。

(3) 基本層序

基本層は6層を確認した。Ⅰ層は上位が極最近の盛土と宅地造成土を一括したものである。Ⅱ層は造成以前の耕作土である。Ⅲ層は一部の遺構の上面にレンズ状自然堆積する。Ⅴ層上面は近世～近代の遺構確認面である。Ⅵ層は、周辺調査において、上面で古墳～古代の遺構が確認される層に近似する。

層	マンセル	土色	土質	備考
I	10YR3/3	暗褐色	シルト	黄褐色ブロック混入
II	10YR3/2	黒褐色	シルト	黄褐色シルト粒状混入 田耕作土
III	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	炭化物 ごく少量混入
IV	10YR4/4	褐色	シルト	炭化物粒ごく少量混入
V	10YR3/4	暗褐色	シルト	黄褐色シルトを塊状混入
VI	10YR4/6	黒褐色	シルト	均質

(4) 発見遺構と出土遺物

遺構面はⅤ層上面とⅥ層上面である。検出した遺構は、総数で溝跡1条、土坑13基である。

Ⅴ層上面で土坑12基を検出した。すべての遺構から近世～近代の遺物が出土した。遺構の重複は新しい方から順にSK5→SK1→SK4→SK2→SK3と古くなり、(SK5 SK6) → SK7→SK8 である。SK12・SK13はともにSD1よりあたらしい。また、遺物の出土状況から、多くは廃棄土坑と考えられ、掘り込み、廃棄後埋め戻しを繰り返している様子がある。

第1号土坑 SK1

SK1は調査区北西部で確認した。遺構は調査区外に半分程度かかっており、全体形は不明であるが、隅丸方形と考えられる。調査区内での規模は0.8m×0.4m、深さ0.53m程度である。堆積土は人為埋め戻しで、遺構内から焼し瓦が出土しており、時期は近世～近代と考えられる。

第2号土坑 SK2

SK2は調査区北西部で確認した。遺構は半分以上が調査区外であり、全体形は不明であるが、円形から長円形を呈すると考えられる。調査区内での規模は0.85m×0.7m、深さ0.97m程度である。堆積土は人為埋め戻しで、SK2は遺物が大量に出土した状況から廃棄土坑である可能性が高い。

第9図4は羽口の先端破片である。先端部は被熱し、一部ガラス化がみられる。第9図6は鉄製の鎌である。他に接合できない破片が含まれており、数個体分になる可能性がある。他に、木質部が消失した碗の漆塗膜片などがあるが、模様など判然としない。時期は近世～近代と考えられる。

第3号土坑 SK3

SK3は調査区北西部で確認した。遺構は調査区外に若干かかっているが、全体形は概ね長円形と考えられる。調査区内での規模は1.56m×1.0m、深さ0.68m程度である。堆積土は人為埋め戻しで、廃棄土坑の可能性が高い。第9図7は土鈴である。下部の一部を欠損するが、鈴の切込みの半分は残っている。内面には、成形時に包含していたものの反転痕跡がある。時期は近世～近代と考えられる。

第4号土坑 SK4

SK4は調査区北西部で確認した。遺構は調査区外に、半分程度かかっているが、全体形は概ね円形と考えられる。

調査区内での規模は0.95m×0.54m、深さ0.63m程度である。堆積土は人為埋め戻しで、不用品を廃棄した土坑の可能性はある。

第5号土坑 SK5

SK5は調査区北部で確認した。SK5は先述の通り、一連の重複遺構の中で最も新しい。遺構は調査区外に、半分弱程度かかっているが、全体形は概ね長円形と考えられる。長軸は東西方向、調査区内での規模は1.74m×0.86m、深さ0.65m程度である。堆積土は人為埋め戻しで、廃棄土坑の可能性が高い。遺構底面から図III-10-5の火消壺が、図III-10-4の組み合う蓋とともに出土した。骨壺として転用される例もあるが、今回はその痕跡はない。

第6号土坑 SK6

SK6は調査区北部で確認した。遺構は調査区外に、不整形円形を呈する。規模は0.82m×0.75m、深さ0.15m程度である。堆積土は人為埋め戻しで、他に比して小型であるが、廃棄土坑の可能性が高い。

第7号土坑 SK7

SK7は調査区北部で確認した。遺構は調査区外に半分程度かかり、他との重複で全体形は判然としない。調査区内での規模は1.1m×0.75m、深さ0.46m程度である。堆積土は人為埋め戻しで、廃棄土坑の可能性が高い。

第8号土坑 SK8

SK8は調査区北部で確認した。遺構は調査区外に半分程度かかり、SK7と殆どの範囲が重複するなど、他との重複で全体形は判然としない。調査区内での規模は1.13m×0.95m、深さ0.15m程度である。堆積土は人為埋め戻しで、廃棄土坑の可能性が高い。

第10号土坑 SK10

SK10は調査区北東部で確認した。遺構は調査区外に半分弱程度かかるが、全体形は概ね円形を呈する。調査区内での規模は直径0.62m、深さ0.34m程度である。北壁断面において、遺構の確認面上位は大きく広がる形状を呈する。堆積土は人為埋め戻しで、廃棄土坑の可能性が高い。

第11号土坑 SK11

SK11は調査区北東部で確認した。遺構の全体形は概ね長円形を呈する。長軸方向は北西～南東で、規模は長軸0.62m、短軸0.44m、深さ0.5m程度である。柱痕跡が確認面の南よりに検出でき、堆積土3、2と充填して押さえてある。柱痕跡は、平面径0.24m、深さ0.57mで土坑底面に7cmほど食い込む。底面は平らである。

第12号土坑 SK12

SK12は調査区南部で確認した。遺構は概ね円形を呈する。SD1とわずかに重複しており、比して新しい。規模は直径1.37m、深さ0.83m程度である。堆積土は人為埋め戻しで、南側から土を埋め戻している。堆積土1と2の間に30cm弱ほどの鏝を検出したが、意図したものかは不明である。形態・規模的に井戸の可能性が考えられるが、底面まで調査しても水はあまり湧かなかつた。燻した平瓦が出土している。

第13号土坑 SK13

SK13は調査区南東部で確認した。SD1と重複しており、比して新しい。遺構の全体形は概ね長円形を呈する。長軸方向は北～南で、規模は長軸0.89m、短軸0.65m、深さ0.5m程度である。

VI層上面では、溝跡1条と、土坑1基を検出した。遺構からは土師器の小破片がわずかに出土するのみであるが、周辺の調査で古代の遺構が確認される層序であることから、その可能性が高いと考えられる。遺構の重複は新しい順にSD1→SK9である。

第1号溝跡 SD1

SD1は調査区南部で確認した。遺構の長軸は西西北～東南東で、規模は長軸8.30m、短軸0.48m、深さ0.38m程度である。西壁の断面観察により、逆台形の断面形を呈することが分かった。SD1は重複するSK9の手前で若干方向を北側に屈曲している様子がある。

第9号土坑 SK9

SK9は調査区南東角で確認した。遺構は調査区内に4分の1程度しかなく、円形を呈すると考えられる。調査区内での規模は0.8m×0.75m、深さ0.55m程度まで掘ったが、深くて底面まで掘ることができなかつた。形態・規模から井戸の可能性が高い。

(5) 遺構外出土遺物

遺構外で出土した遺物はない。

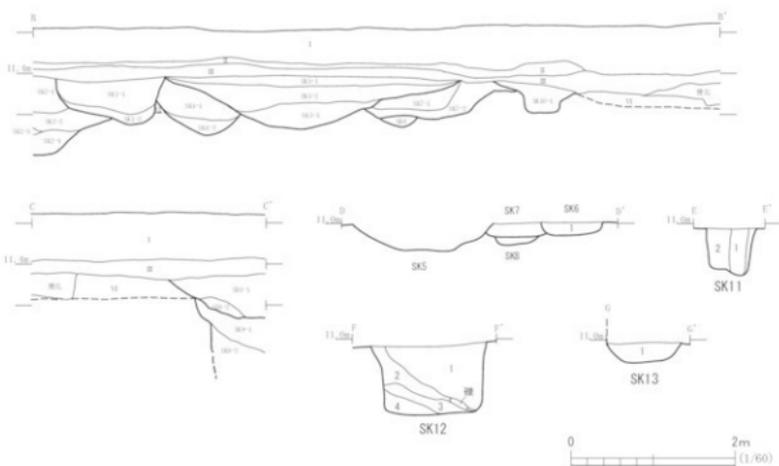
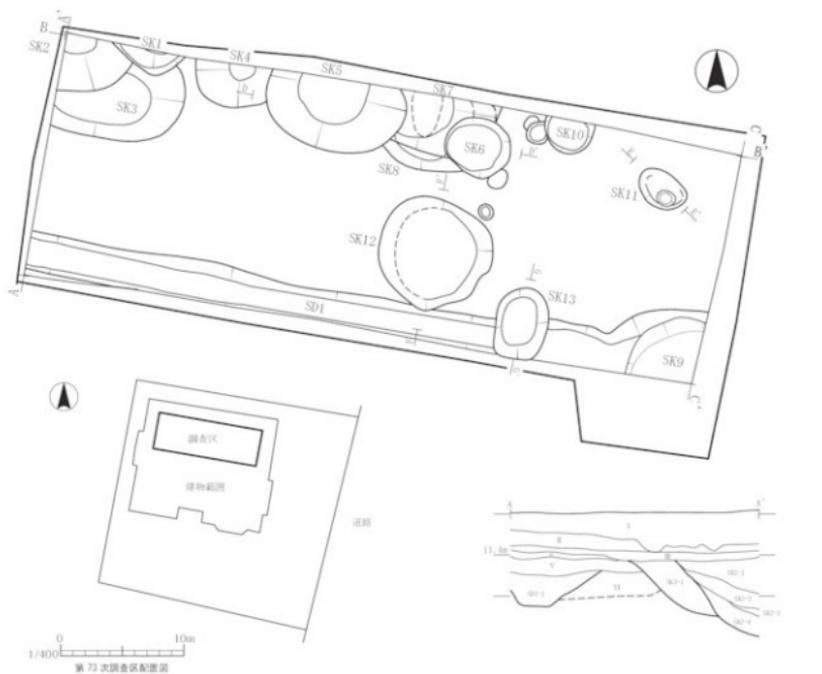
(6) まとめ

今回の調査では、基本層V層上面で、近世～近代の遺物が出土する土坑群と、基本層VI層上面で溝・土坑が検出された。

VI層上面検出の遺構は、溝跡1条と土坑1基であるが、土層観察・出土遺物から、当該地区に広く分布する古墳～古代に属する可能性が高い。V層上面検出遺構の多くは調査区北側に集中しており、重複が著しい。出土する遺物の状態から、ある程度範囲を定めて繰り返し穴を掘り、不用品の遺棄をしたものと考えられる。中には、個体の遺物を多く含まない土坑もあるが、土に戻る性質のものも十分廃棄対象であった可能性がある。出土遺物のうち陶磁器類は17世紀～18世紀を中心とするものの、火消壺は19世紀後半の可能性があり、比較的新しい生活の痕跡であると考えられる。

土層注記

SK	層	マンセル	土色	土質	備考
SK1	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	にぶい黄褐色ブロック混入
	2	10YR4/1	褐灰色	シルト	炭化物を層状に混入
SK2	層	マンセル	土色	土質	備考
	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	炭化物混入
	2	10YR2/2	黒褐色	シルト	細砂少量混入
	3	10YR4/6	暗褐色	シルト	鐵 炭化物少量混入
4	10YR3/1	黒褐色	シルト	炭化物混入	
SK3	層	マンセル	土色	土質	備考
	1	10YR4/1	褐灰色	シルト	褐色シルトをブロック状混入
SK4	層	マンセル	土色	土質	備考
	1	10YR4/6	褐色	シルト	2をブロック状混入
2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	1をブロック状混入	
SK5	層	マンセル	土色	土質	備考
	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	炭化物粒ごく少量混入
	2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	1を粒状少量混入
3	10YR3/2	黒褐色	シルト	炭化物粒ごく少量混入 1を少量混入	
SK6	層	マンセル	土色	土質	備考
	1	10YR4/4	褐色	粘質土	人為埋め戻し
SK7	層	マンセル	土色	土質	備考
	1	10YR2/1	黒色	シルト	2をブロック状混入
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	均質	
SK8	層	マンセル	土色	土質	備考
	1	10YR3/2	暗褐色	シルト	焼土ブロック状少量混入
SK9	層	マンセル	土色	土質	備考
	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック混入
2	10YR3/2	黒褐色	シルト	にぶい黄褐色粘土ブロック混入	
SK10	層	マンセル	土色	土質	備考
	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	炭化物少量混入
SK11	層	マンセル	土色	土質	備考
	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	にぶい黄褐色シルト斑状少量混入 柱状跡
	2	10YR3/4	暗褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック状少量混入
3	10YR5/3	にぶい黄褐色	細砂～シルト	暗褐色シルトブロック少量混入	



第三-8図 南小泉遺跡第73次調査

SK12

層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	小礫混入
2	10YR3/3	暗褐色	シルト～粘土	下位に土礫片
3	10YR4/4	褐色	粘土	
4	10YR3/2	暗褐色	粘土	

SK13

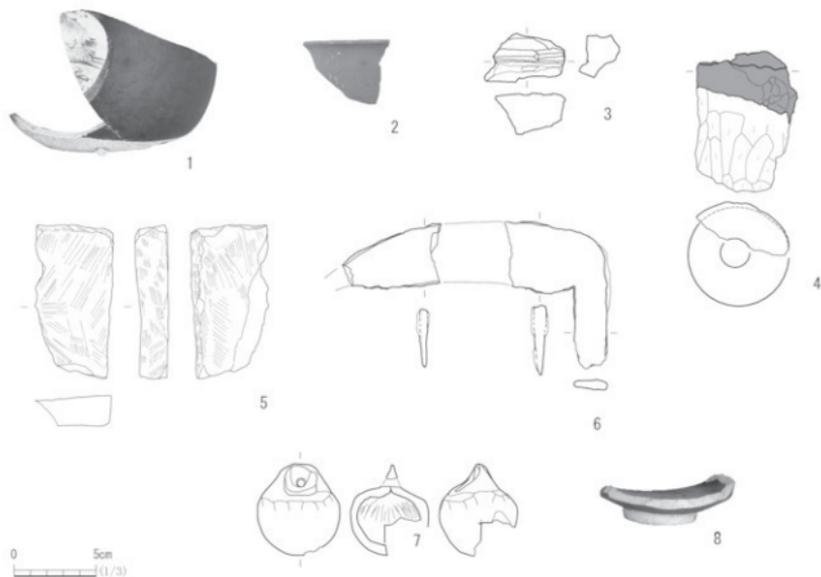
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	暗褐色	シルト	底面に炭化物を層状少量混入

SD1

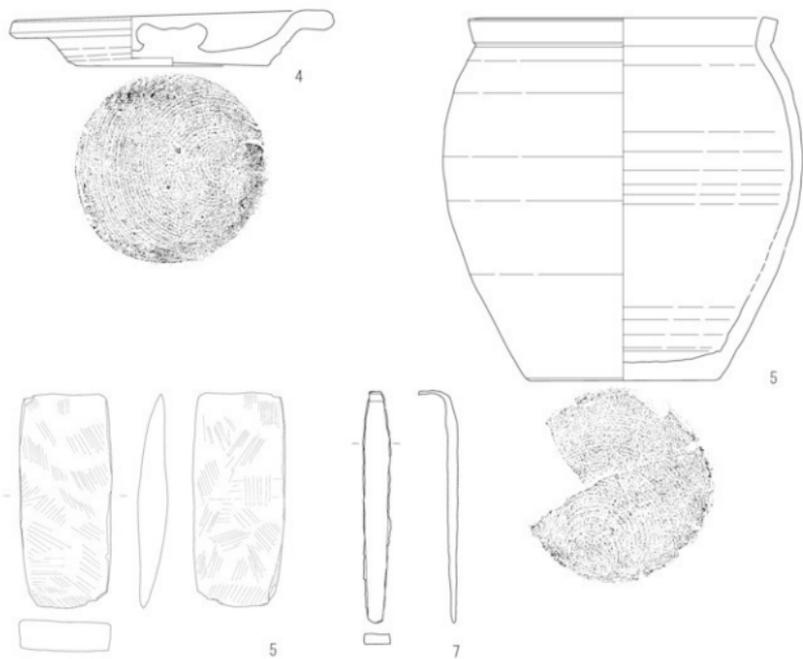
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/1	黒褐色	シルト	細砂含む
2	10YR5/1	灰褐色	シルト	シルトブロック混入

遺物観察表

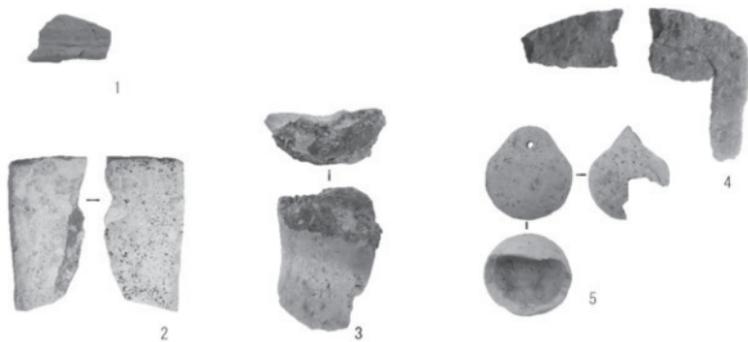
発掘番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	寸法(cm)			調整			特徴・備考		
								長	幅	厚	外	内	底			
Ⅲ-9-1	1-2	SK2	土器	Ⅲ-5	土製陶器	土瓶	一部	—	—	—	—	—	—	2.5x3.5 口径 4.5cm 高さ 10.5cm 口径 4.5cm		
Ⅲ-9-2	1-3	SK2	土器	Ⅲ-5	土製陶器	鉢	一部	—	—	—	—	—	—	大塚原 弥生前期 白土器 1000年		
Ⅲ-9-3	Ⅲ-5-1	P-3	土器	Ⅲ-5	土製品	不明	一部	4.8	2.6	2.4	—	—	—	胎土にスサを含む		
Ⅲ-9-4	Ⅲ-5-3	P-1	土器	Ⅲ-5	土製品	羽石	一部	8.6	6.3	3.4	—	—	—	ヘラケズリ		
Ⅲ-9-5	Ⅲ-5-2	K-1	土器	Ⅲ-5	石製品	砥石	一部	9.4	4.7	2.1	—	—	—	線状痕多数 石材:凝灰岩		
Ⅲ-9-6	Ⅲ-5-4	N-1	土器	Ⅲ-5	金属製品	鎌	2/3	16.3	18.9	0.8	—	—	—	—		
Ⅲ-9-7	Ⅲ-5-5	P-2	土器	Ⅲ-5	土製品	土鈴	3/4	5.0	4.8	5.6	ナデ	—	—	—	口径0.5cm	
Ⅲ-9-8	1-4	SK3	土器	Ⅲ-5	土製陶器	鉢	一部	—	—	—	—	—	—	西戸・美濃 弥生前期 鉄器 10~15C		
Ⅲ-10-1	Ⅲ-6-1	1-5	土器	Ⅲ-6	瓦質土器	蓋	完整	19.7	11.4	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	回転糸切り	
Ⅲ-10-2	Ⅲ-6-2	1-6	土器	Ⅲ-6	瓦質土器	壺	1/2	18.8	11.2	22.3	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	回転糸切り	
Ⅲ-10-3	Ⅲ-6-3	K-2	土器	Ⅲ-6	石製品	砥石	—	13.1	5.6	1.9	—	—	—	—	側面に磨痕 石材:凝灰岩	
Ⅲ-10-4	Ⅲ-6-6	N-2	土器	Ⅲ-6	金属製品	鉄石	完整	14.2	1.7	0.7	—	—	—	—	—	
Ⅲ-6-3	1-1	SD1	土器	Ⅲ-6	土製陶器	不明	一部	—	—	—	—	—	—	—	—	
Ⅲ-6-7	N-3	SK6	土器	Ⅲ-6	土製品	不明	一部	2.2	2.4	0.2	—	—	—	—	—	—
Ⅲ-6-8	1-1	SD1	土器	Ⅲ-6	土製品	不明	一部	—	—	—	—	—	—	—	—	—



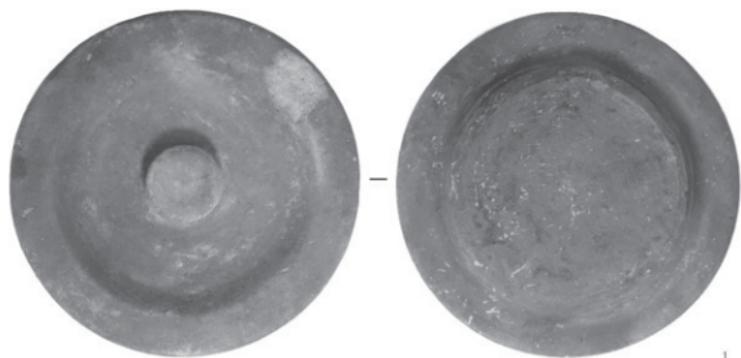
第Ⅲ-9図 出土遺物1



第Ⅲ-10図 出土遺物2



写真図版Ⅲ-5



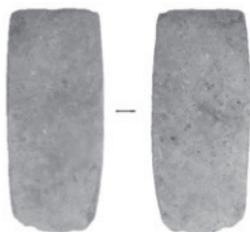
1



2



3



4



5



6



7



1. 遺構確認状況(南東から)



2. 調査区全景(北東から)



3. SK5遺物出土状況(南から)



4. SK9完掘状況(北西から)



5. SK11断面(南から)



6. SK12断面(東から)

3 第74次調査

(1) 調査要項

遺跡名:南小泉遺跡(宮城県遺跡登録番号01021) 調査地点:仙台市若林区南小泉2丁目121-1の一部
調査期間:平成24年7月31日～8月8日 調査対象面積:145.3㎡ 調査面積:36.3㎡
調査原因:個人専用住宅建設 担当職員:主事 水野一夫 文化財数論 千葉 悟

(2) 調査地点と調査経過

第74次調査は、南小泉遺跡の中央西よりを南北に通る、宮城の萩大通りの西側50m程度に位置する。確認調査は平成24年7月31日に着手した。建物範囲内に概ね東西11m、南北3mの調査区を設定し、重機による表土・盛土の掘削を行った。1.0m程度掘削したところで、遺構を検出した。遺構の検出面精査後、遺構の無い北西側に土層確認のため、一部深堀を行った。8月8日に調査の全工程を終了して埋め戻し、撤収した。

(3) 基本層序

基本層は大別6層、細別9層を確認した。Ⅰ層は上位が極最近の盛土とそれ以前の宅地造成土をまとめてある。Ⅱ層は近世から近代程度の造成土である。Ⅲ層はⅡ層の一段階前の造成土である。Ⅱ・Ⅲ層は二度火災にあったらしい、との口伝と合致する二時期の造成と火災起源とみられる焼土・灰の層で区分した。Ⅳ層は混入物の差で3層に細別できたが、基本的に遺構内に連続して堆積していることから、耕作等の攪拌を受けていない土層と考えられる。中位でS11の遺構掘り込みが確認できた。Ⅴ層は遺構確認面である。部分的に砂の堆積を確認しているが、成因は不明である。Ⅵ層は均質な層である。弥生時代の包含層はなかった。

層	マンセル	土色	土質	備考
I	10YR3/3	暗褐色	シルト	直近建物の造成土
II	10YR4/4	褐色	シルト	上面に火事2由来(口伝)の焼土・下面に火事1由来(口伝)の灰
III	10YR4/6	褐色	シルト	火災(口伝)の建物由来の造成土
IV	10YR4/5	褐色	シルト	10YR3/3を低状混入
IV'	10YR3/2	黒褐色	シルト	IVに比し混入が少ない部分
IV''	10YR3/2	黒褐色	シルト	IV'に比し混入がやや多い部分
V	10TB4/6	褐色	粘質土	遺構確認面
V'	10YR5/6	黄褐色	粗砂	V'の上面のみに部分的に検出。
V''	10YR7/3	にぶい黄褐色	細砂	V'の下面のみに部分的に検出。
VI	10YR5/6	黄褐色	シルト	均質

(4) 発見遺構と出土遺物

遺構面はV層上面である。竪穴住居1軒、土坑3基、性格不明遺構1基、ピット2基を検出した。

第1号竪穴住居 S11

調査区東側で確認した。北側は調査区外に及ぶため全体を確認できなかった。カマドは東南東に設けられている。深さは0.2m、規模は東西2.7m、南北は検出範囲で2.7mであるため、調査区外へ続いている。このため、カマドに対して直行する辺が長い。SK2と重複し、SK2より新しい。SK2を切り込んで設けられたため、元のSK2の範囲については深く掘削し、痕跡を取り払った後、掘方埋土を充填、上面は貼床している。

カマド

袖は、竪穴構築後に土を盛り上げて作られている。被熱による硬化が残っていた。また、燃焼面もよく焼けた焼土で範囲を確認できた。煙道は、オーバークラップする状態が残存していた。また、煙出しに向かって緩やかに下がる形状でいったん掘られ、その後、土を充填して整えている様子がある。煙出しの中心から、燃焼面の中心までの距離は1.6m程度。深さは、煙道が煙出しに向かって下り、最深で0.4m程度である。

貯蔵穴

いわゆる貯蔵穴はカマドの左右にあるが、右側のものは小さく、また焼土粒を含む土壌で埋められていたことから、何度かの作り直しの中で埋めて廃棄し、最終的には左側のものが機能していたと考えられる。第13図1～5は、左側の貯蔵穴から出土したものであるが、第13図1は調査終了時に調査区北壁から露出していたわずかな破片を、局所的に拡張して掘り進み、取り上げたものである。

柱穴

柱穴は明確なものを3基確認した。うち、南側の2基は底面に焼土ブロックが底突き痕として遺存していた。南西側

の柱穴は、抜き取り穴と見られる小ピットが付随している。

出土遺物

遺物は、堆積土1・2層は遺構の中央ほど、遺物の流れ込みが主体を占め、須恵器（第Ⅲ-14図1等）、土師器が混在している。SI1-SK1の1層から出土した土師器甕（第Ⅲ-13図1）は、ロクロ整形されている。SI1-SK1の2層から出土したロクロ土師器とみられる坏（第Ⅲ-13図2）は体部が内湾して立ち上がる。調整は外面がヘラケズリのちへラミガキである。

第1号土坑 SK1

調査区の南西で検出した。SK1と重複し、SK1より新しい。規模は東西2m南北0.7m程度の長円形で、深さは0.3m程度である。

底面にこぶし大から20cm程度までの礎が、土坑底面の立ち上がりに沿って湾曲しながら敷き詰められていた。側面には隙間を埋めるように扁平礎を立ててはめ込んでおり、人為的な敷石と考えられる。

土坑の形状や礎の上面が頂部になるものが多く、フラットにならないなど、柱穴・根石の可能性は低いと考えられる。後述SK1が、SK1に水を導く木樋の痕跡である可能性も考えて調査したがならなかった。

第2号土坑 SK2

調査区の東側で検出した。SI1・SK3と重複し、SI1より古くSK3より新しい。隅丸方形を呈し、規模は東西2m程度、短軸1.3m程度、深さ0.2m程度である。覆土は単層であるが、多量の炭化物と少量の土師器片が混入していた。土師器片は二次的に被熱している様子があり、焼成土坑の可能性も考えたが底面や壁に被熱痕はなく、用途は不明である。

第3号土坑 SK3

調査区の東側で検出した。SK2と重複し、SK2より古い。平面形は、残存部では長円形に見えるが、大部分がSK2と重複しており、不明である。規模は東西0.4m程度、短軸1.0m程度、深さ0.2m程度の残存である。堆積土は単層であるが、多量の炭化物と少量の土師器片が混入している。用途は不明であるが、利用の過程で、西側にSK2として掘りなおした可能性があり、一連の遺構として考えられる。出土遺物は、南小泉式期の土師器が大勢を占める。

第1号性格不明遺構 SX1

SK1と重複し、SK1より古い。南側壁面に四角形のプランとして確認した。規模は立面で32cm四方である。堆積土をくりぬくように局所的に掘削したところ、南側へ同じ形状で0.5m以上続き、断面形状が四角形である。周縁は被熱し下面には上面崩落等の残滓が焼土ブロックとして堆積していた。

前述SK1との関係から、木樋の可能性も考慮したが、断面方形であるが被熱しているトンネル構造から、おそらく調査区外の堅穴住居の煙道であると考えられる。

ピット

掘方のある柱跡を2基検出した。中心からの互いの距離が1.5mと近く、組み合わせ可能性が高いが、PIT1・PIT2として報告しておく。調査区内では2基のみの検出である。いずれも、一辺約50cm方形の掘り方、中央に径約22cm、深さ30cm程度の円形の柱痕跡がある状態で検出している。遺物はPIT1から土師器甕体部が1点出土している。台付甕体下～台部片で、塩釜式期の所産であると考えられる。柱穴が機能を失ったのち、流れ込みで入ったものと考えられるが、周辺に当該時期の遺構・遺物は確認できていない。

(5)遺構外出土遺物

I層から土師器・須恵器の破片が数点出土したのみである。

(6)まとめ

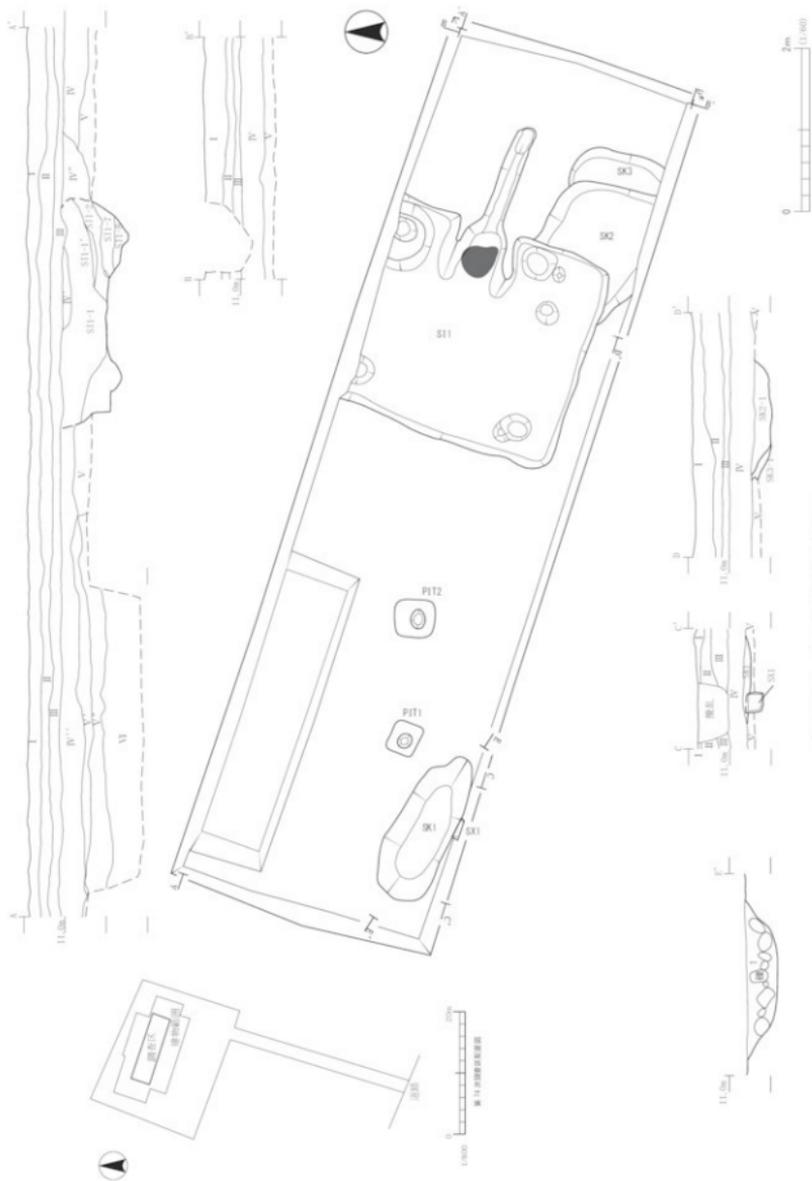
今回の調査では、平安時代初頭の堅穴住居が検出された。カマドに対して直行する辺が長い形状をしている。この横長の堅穴住居は、工房として堅穴中央に鍛冶炉が検出される例があるが、被熱痕などは確認できなかった。カマドは遺存状態が良好で、この堅穴に対する最終的なカマドである可能性が高い。SI1の出土遺物で、第Ⅲ-13図1・2は、出土状況から、この住居に伴う遺物と考えられる。これらは仙台平野の土器編年において、南小泉遺跡第20次調査（仙台市教育委員会1991）などに類型が認められ、遺構の年代は土師器の製作にロクロが導入され始める8世紀末から9世紀初頭と考えられる。堅穴住居に先行する土坑SK2・SK3は用途不明であるが、炭化物や二次焼成した土師器片が出土するなど、土師器の焼成土坑の可能性もある。SK2出土遺物のうち、第Ⅲ-14図8・10・12・13は南小泉遺跡第22次調査（仙台市教育委員会1994）沼向遺跡（仙台市教育委員会2010）などに認められる南小泉型関東系土器で

あり、第Ⅲ-14図11とともに、それらは仙台平野の土師器編年において、古墳時代後期中頃の住式新段階に比定される。

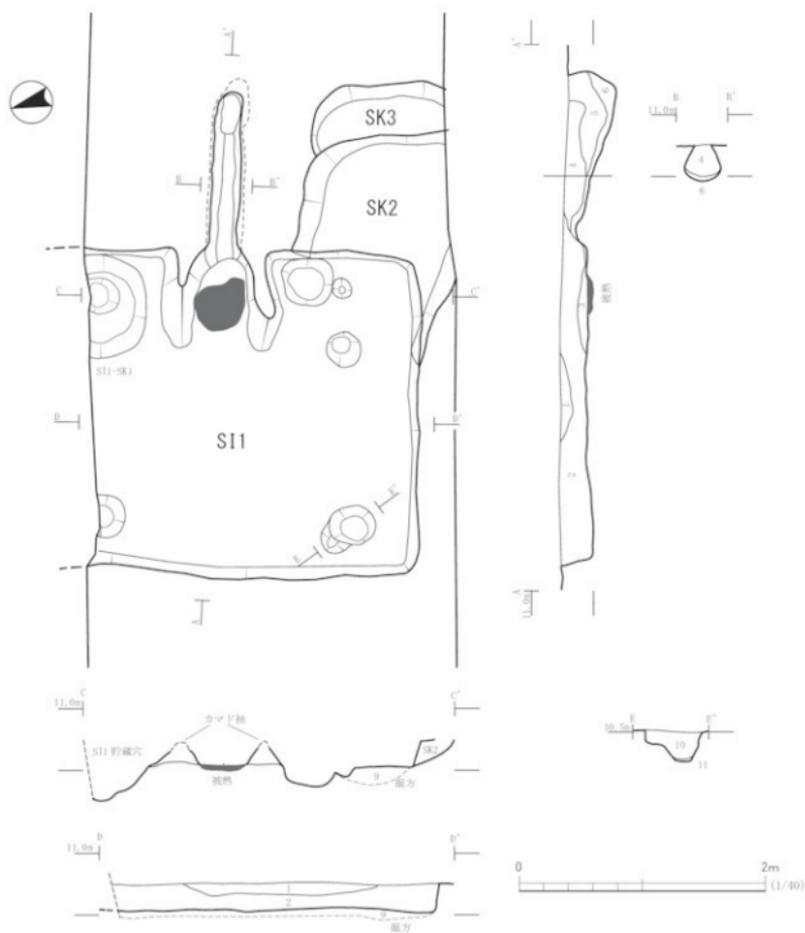
遠見塚古墳の周辺部では、これまでの調査で主に古墳時代中期の遺構・遺物が見つかったが、西側に位置する今回の調査区では、それに後続する古墳時代後期～平安時代の遺構・遺物が検出された。

土層注記

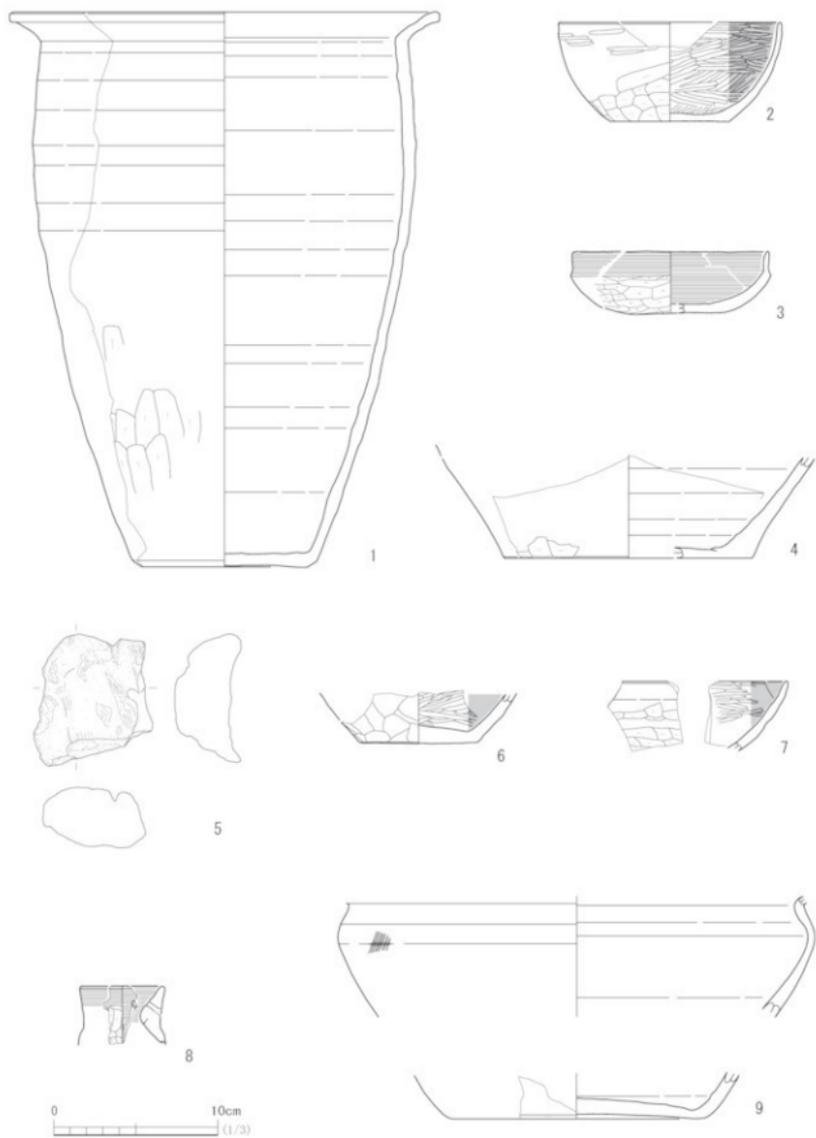
S11				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	粘性土	上面自然堆積層 IV層に近似 後年の須恵器混入
1'	10YR4/6	褐色	シルト	11に比しV層土の混入が多い
2	10YR4/3	褐色	粘性土	明褐色シルトブロック状混入
3	5YR4/8	赤褐色	焼土残滓	燃焼面上面の残滓主体層
4	10YR4/6	褐色	シルト	焼土粒・炭化物粒少量混入
5	10YR3/2	褐色	粘性土	上面の炭熱面崩落土 焼土ブロック多い
6	10YR3/2	褐色	粘性土	下面の残滓多く混入
11貯蔵穴				
層	マンセル	土色	土質	備考
7	10YR4/4	褐色	粘性土	焼土細粒混入 炭化物少量混入
8	10YR4/4	褐色	粘性土	焼土粒混入
S11掘方				
層	マンセル	土色	土質	備考
9	10YR3/3	暗褐色	粘性土	焼土細粒混入 炭化物少量混入 下層ほど褐色土ブロック多い
S11住穴				
層	マンセル	土色	土質	備考
10	10YR4/4	褐色	シルト	2を五層状混入
11	10YR5/6	にぶい黄褐色	シルト	焼土粒多量混入
SK1				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	シルト	20cm大の礫多量に含む 礫の上下に土の差はないが別と考える
SK2				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR1.7/1	黒色	粘質土	褐色粘土多量混入 炭化物多量混入
SK3				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	粘質土	褐色粘土多量混入 炭化物多量混入
B1-P1T1				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/4	暗褐色	シルト	柱頭跡
2	10YR4/4	褐色	粘質土	黄褐色土混入
B1-P1T2				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/4	暗褐色	シルト	柱頭跡
2	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	鉄分凝着
2	10YR4/4	褐色	粘質土	黄褐色土混入
SX1				
層	マンセル	土色	土質	備考
1	7.5YR6/4	にぶい橙色	シルト～粘	人為埋め戻し
2	5YR2/1	黒褐色	灰被面	外側にぶい赤褐色



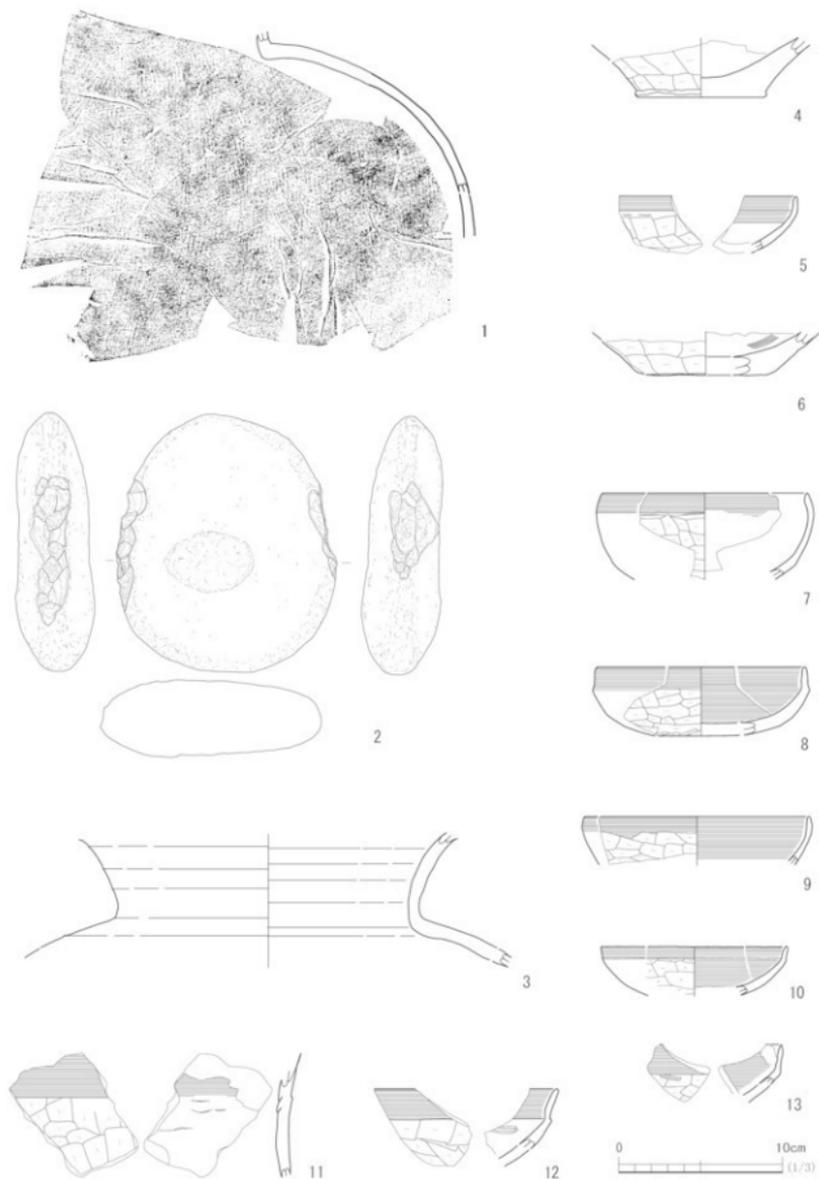
第III-11図 南小泉遺跡第74次調査



第三-12図 S11・SK2・SK3平面図・断面図



第Ⅲ-13图 出土遺物1



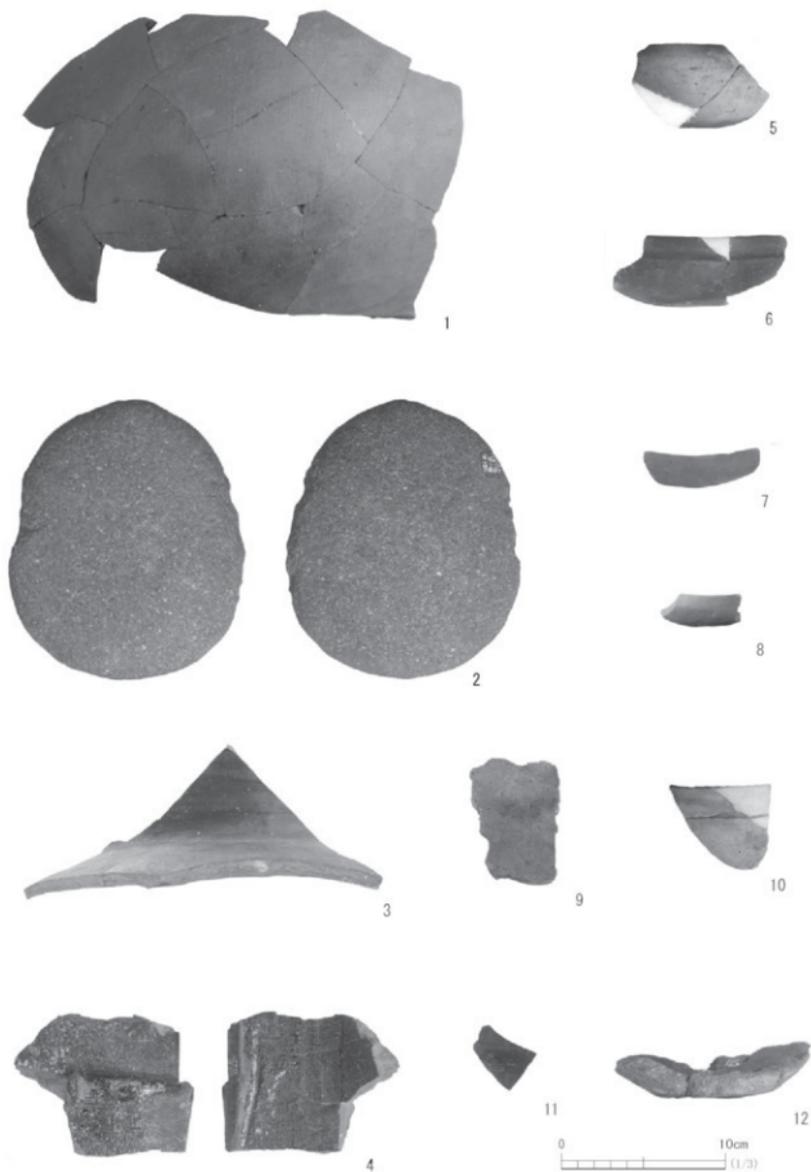
第Ⅲ-14圖 出土遺物2

遺物観察表

図録番号	写真番号	図録番号	出土遺構	出土層位	種類	図様	図録(単位)			測値			特徴・備考	
							高	幅	厚	高	内径	底		
圖-13-1	圖-8-1	D-3	0306	2層	土師器	罐	17.3	18.8	18.6	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ	ヘラケズリ跡	
圖-13-2	圖-8-2	D-2	0308	2層	土師器	杯	17.2	12.4	6.1	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ	ヘラケズリ跡	
圖-13-3		C-6	0308	1層	土師器	罐	10.8		3.8	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ		
圖-13-4	圖-8-4	E-4	S11	0402	須恵器	罐	-	10.1	16.0	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ		
圖-13-5	圖-8-5	K-2	0308	1層	石器	磨石	6.1	7.2	4.1					削り痕有り 軽石
圖-13-6	圖-8-6	D-1	S11	2層	土師器	罐	一部	12.0	13.1	ヘラケズリ				
圖-13-7	圖-8-7	D-4	S11	2層	土師器	杯	一部	-	14.3	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ	ヘラケズリ跡	
圖-13-8	圖-8-8	C-1	S11	2層	土師器	甕	一部	13.4	13.6	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ		1箇所穿孔
圖-13-9	圖-8-9	E-3	S11	2層	須恵器	鉢	一部	15.2	13.6	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ		
圖-14-1	圖-9-1	E-2	S11	2層	須恵器	罐	一部	-	-	平打ち身				解文字付
圖-14-2	圖-9-2	K-1	S11	床面	石器	磨石	13.8	13.4	4.8	口径30ナデ	ヘラケズリ			側縁・前面 鋭打 安山岩
圖-14-3	圖-9-3	E-1	S11	1層	須恵器	罐	一部	-	16.0	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ		
圖-14-4	圖-8-10	C-5	S11	1層	土師器	罐	一部	16.4	13.7	ヘラケズリ				木象痕
圖-14-5	圖-8-11	C-3	S11	0303	土師器	杯	一部	-	13.0	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ		
圖-14-7	圖-9-5	C-10	SK2	1層	土師器	杯	一部	10.4	15.3	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ		
圖-14-6	圖-9-12	C-4	S11	0303	土師器	罐	一部	7.6	12.6	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ		
圖-14-8	圖-9-6	C-7	SK2	1層	土師器	杯	一部	10.8	4.2	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ		
圖-14-9	圖-9-7	C-11	SK2	1層	土師器	杯	一部	10.4	13.0	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ		
圖-14-10	圖-9-8	C-12	SK2	1層	土師器	杯	一部	11.4	13.4	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ		
圖-14-11	圖-9-9	C-9	SK2	1層	土師器	杯	一部	10.8	13.4	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ		
圖-14-12	圖-9-10	C-13	SK2	1層	土師器	杯	一部	-	-	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ		
圖-14-13	圖-9-11	C-9	SK2	1層	土師器	杯	一部	-	13.4	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ		
	圖-8-3	C-8	SK2	1層	土師器	杯	一部	-	-	口径30ナデ	ヘラケズリ	口径30ナデ		
	圖-9-4	F-1	S11	1層	瓦	一	部	-	-					瓦片



写真図版Ⅲ-8



写真図版Ⅲ-9



1. 調査区全景(北東から)



2. 北西壁断面(南から)



3. 遺構確認状況(東から)



4. S11完掘状況(南西から)



5. S11断面(西から)



6. S11カマド完掘状況(西から)



1. S11-SK1遺物出土状況(南西から)



2. S11-SK1土器出土状況(南西から)



3. SK1断面(北から)



4. SK1完掘状況と重複遺構(北から)



5. SK11に切られるSX1(北から)



6. SK2・SK3完掘状況(北から)

第3節 養種園遺跡

1 遺跡の概要

養種園遺跡は、宮城県仙台市若林区南小泉一丁目に所在する。JR仙台駅の南東約2.5kmに位置し、広瀬川左岸の自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は約0.3km四方で、標高は13.0mほどである。東北地方南部における土師器編年の標識遺跡となっている南小泉遺跡と隣接している。

養種園遺跡は、縄文時代から近世にわたる複合遺跡である。現在までに都市計画道路建設や個人住宅建築などに伴い、断片的に発掘調査が行われている。

特に近世の遺構は注目される。遺跡北西部では、中島を伴う玉石敷の池跡などが検出され、遺跡北東部では、この屋敷地を区画するものとみられる土塁を伴う溝跡も検出されている。また、出土遺物には、伊達家の家紋である三引両紋漆器碗があり、伊達家との関わりを窺わせるものが含まれる。

これまでの調査成果から、養種園遺跡は、若林城に伴う若林城下町やその後の御仮屋の置かれた時期と、元禄5年(1692年)に造営された伊達家別荘(『伊達治家記録』の時期に大別されている。伊達家別荘については、文政9年(1826年)の『国分南小泉御仮屋敷御絵図』(宮城県図書館蔵)があり、このなかの屋敷配置と調査成果がほぼ一致している。

2 第9次調査

(1) 調査要項

遺跡名:養種園遺跡(宮城県遺跡登録番号01349) 調査地点:仙台市若林区南小泉1丁目13-6

調査期間:平成24年7月18日 調査対象面積:60.0㎡ 調査面積:15.0㎡

調査原因:個人専用住宅建築工事 担当職員:主事 水野一夫 文化財教諭 千葉 悟



第三-15図 第9次調査位置図

(2) 調査地点と調査経過

対象地は、養種園遺跡の中央東寄りに位置する。北側にある南小泉～茂庭線を平成5年度に道路建設に先立って実施した調査で報告されているIV区(仙台市教育委員会1997)で検出されたSD01は、幅20.81m深さ3.58mを測る。この堀が南へ延伸する位置にあるため、調査は堀跡の検出に主眼を置いて実施した。確認調査は平成24年7月18日に行った。建物範囲内に東西5.5m、南北2.5m程度の調査区を設定し、重機による表土・盛土の掘削を行った。0.5m弱掘削したところで南北方向の堀跡が検出された。堀は人為的に埋め戻されており、その範囲は調査区のほぼ全域に及んでいたが、埋め戻しの堆積方向から調査区内には堀の半分に満たないものと考えられた。西側上端を確認するため、北側の壁面にそって0.5m程度拡張して確認した。1.06mまで全面掘削して確認し、調査の全工程を終了して後、即日重機により埋め戻して撤収した。

(3) 基本層序

基本層は大別2層を確認した。Ⅰ層は上部が極最近のいわゆる山砂の盛土で、下部は直前まで建っていた住宅のための整地土の一部である。攪乱を間に挟んで、Ⅱ層が基盤層である。

層	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰ	10YR7/8	黄褐色	山砂	下層は10YR4/4のシルト+荒砂の整地土
Ⅱ	10YR4/4	黒褐色	粘質土	いわゆる基盤層

(4) 発見遺構と出土遺物

堀跡 SD1

堀は、既調査に続くものと考えられるため、長軸方向は南北と考えられる。溝は上部が削平されているため、実際の掘り込み面は不明であるが、調査区内での検出長は東西幅4.3m、南北長さ2.1mである。深さは、過去の調査では4.0m程度に達する。今回、狭小の調査区では1mまでの掘削が限界であったため、そこまでの記録とした。堆積土は5層に分層でき、いずれも人為埋め戻しと考えられる。遺物は出土しなかった。

(5) 遺構外遺物

遺物の出土はない。

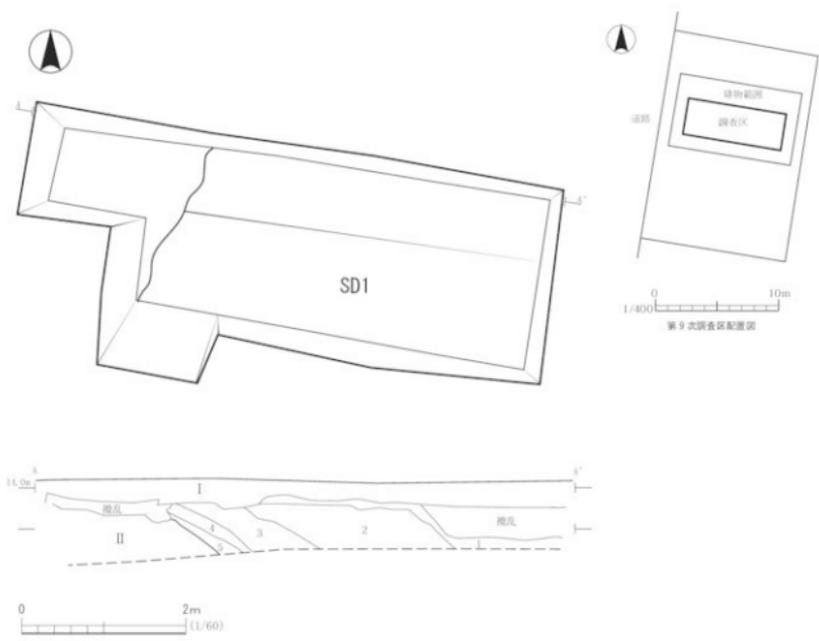
(6) まとめ

今回の調査では、養種園遺跡第1次調査のIV区で検出された幅20m超の堀跡が、南北方向に延伸する上に位置している。昭和22年米軍撮影の航空写真にもその痕跡が確認できる。上層の人為堆積土については、当該地域の宅地造成などに伴い、削平、埋め立てによるものの可能性が考えられる。堀跡は、養種園遺跡第一次調査の報告書『仙台市文化財調査報告書第214集 養種園遺跡』の挿図6図の小泉屋敷絵図模式図の中の「御鳥屋」と表記がある区画を巡るものの一部の可能性が高い。今後、周辺の調査で明らかになっていくものと考えられる。

土層注記

SD1

層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/4	褐色	シルト	旧表土 立木の次後痕あり
2	10YR5/6	黄褐色	シルト+細砂	人為埋め立て
3	10YR3/3	暗褐色	シルト+細砂	4をブロック状混入
4	10YR4/6	褐色	粘質土+シルト	3・5をブロック状混入
5	10YR3/2	黒褐色	シルト	Ⅱの崩落土互層状に混入



第Ⅲ-16図 養種園遺跡第9次調査



1. 掘跡検出状況（北から）



2. 掘跡検出状況（南から）

写真図版Ⅲ-12

第4節 沖野城跡

1 遺跡の概要

沖野城跡は、宮城県仙台市若林区沖野七丁目に所在する。JR仙台駅の南東約6.8kmに位置し、広瀬川左岸の標高6.0mほどの自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は東西約340m、南北約250mである。東西に延びる自然堤防の先端近くにあたり、遺跡の西側を除く三方は沖積低地が広がっている。現状では、城跡の様相を把握することは困難であるが、一部に土塁状の高まりや細長い宅地や畑地の形状から堀と推定される箇所がある。沖野城跡周辺は、宅地化や圃場整理などによって、原地形は原形を失っている。明治時代中期の地籍図をみると、遺跡の周辺は広範囲が水田であるのに対して、沖野城跡の範囲は宅地や畑地となっており、それを取り囲むように細長い水田が認められる。また、昭和14年(1939年)頃に作製された『六郷村沖野館屋敷割図』でも宅地を囲む「元堀」と記載された細長い水田が連続して描かれており、一部に土手も記されている。文献上の沖野城跡については、享保13年(1628年)の『仙台領古城書立之覚』や『藤原姓栗野家譜』(以下、『家譜』)、『荒町毘沙門堂縁起』(伊達家文書)などがある。まず、規模については、『仙台領古城書立之覚』に記載がある。それによると、城の規模は一〇〇間四方とある。また、西北に三重の堀、北辺の半分ほどと西に「土手形」があるとした写本もある。城主については、『仙台領古城書立之覚』では、栗野大膳の居城あるいは出城としている。『家譜』では、栗野国定が永正2年(1505年)に北目城を嫡男高国に譲り、自らは「沖ノ館」に居住したとある。また、高国子息の刑部国勝が、国定から「沖ノ館」を譲られたと記載がある。『荒町毘沙門堂縁起』では、高国の孫にあたる宗国と国治が、広瀬川の治水をめぐり争い、その結果、国治の居城である「沖城」を得た宗国がこれを焼いたとある。一方、『家譜』では、国治について、「助太郎、後左衛門。木工頭。沖ノ館ニ住ス。北目ト同時ニ没落ス」と記されている。これらの文献に記載された「沖ノ館」「沖館」が、沖野城跡を指すものとみられる。

沖野城跡では、これまでに個人住宅建築や宅地造成に伴う発掘調査が断続的に行われている。第5次調査では、幅11.90～13.50m、深さ2.50mの障壁を伴う溝跡が検出されるなど、これらの調査では、沖野城跡の区画施設とみられる遺構が検出されている。一方、沖野城跡に関わる建物跡や井戸跡など付属する施設などは検出されておらず、今後の調査に期待されている。



第三-17図 沖野城跡第13次調査区位置図

2 第13次調査

(1) 調査要項

遺跡名: 沖野城跡 (宮城県遺跡登録番号01234) 調査地点: 仙台市若林区沖野七丁目390-2
調査期間: 平成24年6月4日(月)～6日(水) 調査対象面積: 96.5㎡ 調査面積: 31.7㎡
調査原因: 個人住宅建築工事 担当職員: 主事 小泉博明 関根章義 文化財教諭 伊藤翔太 佐藤高陽

(2) 調査地点と調査経過

対象地は、遺跡の南部に位置する。調査は平成24年6月4日から開始した。建築範囲内に東西9.90m、南北3.20mの調査区を設定し、重機を用いて盛土および基本層Ⅰ～Ⅴ層を除去した。基本層Ⅰ層およびⅦ層上面で人力により遺構検出作業を行い、溝跡3条を検出した。調査では、安全面を考慮して、遺構の精査は部分的なものに留めた。6月6日に埋め戻しを行い、今回の調査を終了した。

(3) 基本層序

今回の調査で確認した基本層は、大別7層、細別12層である。Ⅰ層は現在の盛土以前の旧表土もしくは黒耕作土で、4層に細別される。Ⅱ層は暗褐色を呈するシルトで、層相から2層に細別される。Ⅲ層は黒色の粘土である。層相から2層に細別され、底面に凹凸が認められる。Ⅳ層は黄灰色の粘土で、暗灰黄色との互層である。Ⅴ層は均質な褐灰色の粘土である。Ⅵ層はにぶい黄褐色の細砂を斑状に含む黒褐色の粘土である。Ⅶ層は均質な細砂層。今回の調査における遺構検出面である。なお、今回の調査地点では、層厚約0.20～0.40mの宅地に伴う盛土があり、対象地西側に厚くなる傾向がある。

層位	マンスセル	土色	土質	備考
I a	10YR3/4	暗褐色	シルト	層上面に炭化物が堆積。近現代の機器が混入
I b	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	灰黄褐色(10YR4/2)シルトをブロック状に含む
I c	10YR3/3	暗褐色	シルト	炭化物を小ブロック状に少量含む
I d	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	均質
II a	10YR3/4	暗褐色	シルト	炭水化物をごく少量含む
II b	10YR3/3	暗褐色	シルト	炭水化物を粒状にごく少量含む
III a	10YR4/4	褐色	粘土	黒色粘土をブロック状に含む
III b	10YR2/1	黒色	粘土	黄灰色を斑状に含む。底面に凹凸あり
IV	2.5YR4/1	黄灰色	粘土	暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土との互層
V	10YR4/1	褐灰色	粘土	均質な粘土層
VI	10YR5/1	黒褐色	粘土	にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂を斑状に含む
VII	10YR5/3	黒褐色	細砂	均質

(4) 検出遺構と出土遺物

遺構面は、Ⅱ層上面とⅢ層上面である。溝跡3条を検出した。遺物は基本層Ⅰ層から石製品が1点出土している。遺構検出作業は、基本層Ⅵ層およびⅦ層上面で行っているが、調査区壁面の観察から、実際の遺構面は基本層Ⅱ層上面とⅢ層上面の2面であることを確認している。

Ⅱ層上面の遺構は、溝跡2条である。

第1号溝跡 SD1

調査区中央部で検出した東西方向の溝跡で、緩やかな弧状を呈する。SD2溝跡と重複し、これよりも新しい。検出長は約5.70mである。規模は上端幅が検出面で約0.95～1.40mである。確認した下端幅は約0.60mである。深さは調査区壁面と部分的な精査から、基本層Ⅱ層上面から約0.70mと推測される。断面形は上部が開く逆台形を呈する。堆積土は7層に細別され、炭化物や植物遺存体など含む黒褐色と暗褐色などのシルトおよび粘土質シルトである。遺物出土していない。

第2号溝跡 SD2

調査区を斜行する東西方向の溝跡である。SD1溝跡と重複し、これよりも古い。検出長は約9.25mで、規模は上端幅が検出面で2.30mほどである。底面が未検出であることから、下端幅、深さ、断面形は不明であるが、調査区壁面と部分的な精査から、深さは基本層Ⅱ層上面から0.90m以上と推測され、溝跡上部の壁は緩やかに傾斜する。堆積土は7層を確認した。にぶい黄褐色や褐色の粘土や砂質シルトを含む黒褐色などの粘土質シルトや粘土などで、6層は植物遺存体を含む。遺物は出土していない。

Ⅲ層上面の遺構は、溝跡1条である。

第3号溝跡 SD 3

調査区西部で検出した南北方向の溝跡である。北半部をSD 2溝跡に壊されているが、検出長は約3.40mで、規模は上端幅が検出面で4.00m以上である。下端幅、深さ、断面形は部分的な調査であることから不明であるが、調査区壁面と部分的な精査から、深さは基本層Ⅲ層上面から0.80m以上である。溝跡上部の壁は比較的緩やかに傾斜する。堆積土は15層に細別され、炭化物や植物遺存体を含む黒褐色や暗褐色などの粘土質シルトや粘土などである。遺物は出土していない。

(5)遺構外出土遺物

基本層Ⅰ層から、砥石が1点出土している。砥石は凝灰岩製で、4面に使用痕跡が認められる。

(6)まとめ

今回の調査では、溝跡3条を検出した。基本層Ⅱ層上面で検出したSD 1溝跡とSD 2溝跡は、展開や性格は把握できないが、SD 3溝跡とは基本層を一枚挟むことから、時期差が想定される。基本層Ⅲ層上面で検出したSD 3溝跡は、規模は不明であるが、上端幅4.00m以上におよぶ大規模なものである。いずれの溝跡も出土遺物がないことから、時期を明らかにすることはできない。これまでの調査成果から検討すると、SD 3溝跡は位置や方向、規模から、今回の調査区の西側に隣接する第8次調査で検出した南北方向の溝跡と類似し、これらは沖野城跡に関連する遺構と考えられる。基本層Ⅱ層上面で検出したSD 1溝跡とSD 2溝跡は、周辺での発掘調査では検出されていないことや時期が不明なことから、沖野城跡に関わる遺構であるかは不明である。

土層注記

SD 1		土層注記		
層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	シルト	灰黄褐色(10YR4/2)シルトをブロック状に少量、炭化物を粒状に少量含む。
2	10YR3/4	暗褐色	シルト	灰黄褐色(10YR4/2)シルトをブロック状に含む。
3	10YR3/4	暗褐色	シルト	灰黄褐色(10YR4/2)シルトをブロック状に若干含む。
4	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状にごく少量含む。
5	10YR2	黒褐色	シルト	灰黄褐色(10YR4/2)シルトをブロック状に少量含む。
6	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂を粒状に少量含む。
7	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	炭化物、黒色(10YR2/1)粘土を粒状に含む、植物遺存体を少量含む。
SD 2		土層注記		
層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR2	黒褐色	シルト	にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトをブロック状にごく少量含む。
2	10YR3	にぶい黄褐色	砂質シルト	均質。
3	10YR3	にぶい黄褐色	砂質シルト	褐色(10YR4/1)粘土をブロック状に少量含む。
4	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	褐色(10YR4/1)粘土をブロック状に少量含む。
5	2.5Y3/2	黒褐色	粘土	にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトをブロック状に含む。
6	10Y2	オリーブ灰色	細砂	植物遺存体を多く含む、暗オリーブ色(5Y4/3)粘土を互層状に含む。
7	10Y4/1	灰色	粘土	細砂を均質に含む。
SD 3		土層注記		
層位	マンセル	土色	土質	備考
1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状にごく少量含む
2	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3) 細砂をブロック状に含む
3	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3) 細砂を小ブロック状に少量含む
4	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状と小ブロック状に少量含む
5	2.5YR3/3	暗オリーブ褐色	粘土	比較的均質
6	10Y3/3	暗褐色	粘土	比較的均質
7	2.5Y3/2	黒褐色	粘土	植物遺存体を含む
8	10YR3/2	黒褐色	粘土	植物遺存体を含む
9	2.5Y3/2	黒褐色	粘土	植物遺存体をやや多く含む
10	2.5Y5/3	黄褐色	細砂	黒褐色(2.5Y3/2)粘土をブロック状に少量含む
11	2.5Y4/1	黄灰色	粘土	暗灰黄色(2.5Y5/2) 細砂をブロック状に若干含む
12	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土	黒褐色(2.5Y3/2)粘土をブロック状に含む
13	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色(10YR5/3) 粘土をブロック状にごく少量含む
14	2.5Y4/1	黄灰色	粘土	比較的均質
15	10YR3/2	黒褐色	粘土	にぶい黄褐色(10YR5/3) 細砂を粒状と小ブロック状に少量含む

遺物観察表

発掘 番号	写真 番号	登録 番号	出土 遺構	出土 層位	種類	部類	残存	出量(個)			調整			特記・備考
								長	幅	厚	洗	内	底	
18-1	19-1	K-1	1層	1層	石製品	砥石	残	8.1	5.4	3.3				刃あたり彫痕 石材：凝灰岩



1. 調査区全景（西から）



2. 調査区全景（南西から）



3. SD1溝跡検出（北から）



4. SD1・2溝跡断面（西から）



5. SD3溝跡断面（北から）



第5節 北屋敷遺跡

1 遺跡の概要

北屋敷遺跡は、宮城県仙台市若林区六丁目中町に位置する。JR仙台駅の東約6.8kmにあたり、遺跡の北東部を南東流する七北田川と南西部を東南流する広瀬川に挟まれた沖積平野の微高地上に立地する。範囲は東西約180m、南北約200mで、標高は5.0～6.0mほどである。

北屋敷遺跡は、古代から近世の複合遺跡である。昭和53年（1978年）に行われた第1次調査以降、個人住宅建設や個人住宅建築に伴う発掘調査が行われている。

これまでの調査成果から、遺跡の中心となるのは、近世の仙台平野に形成された農村の屋敷跡である。調査では、道路側溝や障地との境界を兼ねるとみられる屋敷地を囲む溝跡、その内部に掘立柱建物跡、井戸跡、土坑などが配置されていることが確認されている。出土遺物には、瀬戸・美濃陶器、大塚相馬陶器、肥前産磁器などの陶磁器類や漆器などの木製品などがある。



番号	遺跡名	種類	立地	時代	番号	遺跡名	種類	立地	時代
1	北屋敷遺跡	集落跡	自然埋没	古代～近世	11	小堂遺跡	集落跡・屋敷跡	自然埋没	近世～近世
2	東井戸遺跡	城郭跡	自然埋没	中世	12	遠見塚古墳	前方後円墳	自然埋没	古墳前期
3	東井戸中遺跡	散石地	自然埋没	古墳～中世	13	下常井遺跡	散石地	自然埋没	古代
4	宮前遺跡	水田跡	自然埋没	近世・古代	14	東井戸中家遺跡	古墳地	自然埋没	古墳
5	押口遺跡	河川跡・水田跡・古倉地	自然埋没	近世～近世	15	地蔵浦遺跡	散石地	自然埋没	中世
6	北屋敷遺跡	散石地	自然埋没	古墳・古代	16	明屋敷遺跡	散石地	自然埋没	平安
7	中在家遺跡	古倉地	自然埋没	古代	17	石段遺跡	城郭跡	自然埋没	中世
8	中在家南遺跡	土器塚・土坑墓・方形 石室墓	自然埋没	近世・古墳・古代	18	志波遺跡	散石地	自然埋没	古代
9	長倉遺跡	城郭跡	自然埋没	～中世	19	鎌倉園分尼寺	寺院跡	露出	古代
10	仙台東家塚	土器塚	後背埋没	古代					

第Ⅲ-19図 北屋敷遺跡と周辺の遺跡

2 第5次調査

(1) 調査要項

遺跡名:北屋敷遺跡(宮城県遺跡登録番号01220) 調査地点:仙台市若林区六丁の目中町7-15

調査期間:平成24年7月30日～8月30日 調査対象面積:244.8㎡ 調査面積:146.4㎡

調査原因:共同住宅建築工事

担当職員:主事 小泉博明 文化財教諭 伊藤翔太 佐藤高陽 千葉 梧

(2) 調査地点と調査経過

対象地は、北屋敷遺跡の西部に位置し、近世の屋敷地などが確認された第3次調査地点の西側にあたる。調査では、平成24年7月30日から、対象地内のアスファルト舗装の撤去作業に着手し、安全面を考慮して、対象地を全周する仮囲いを設置した。7月31日から建築範囲の南半部に調査区を設定し、重機を用いて盛土などを除去した。基本層Ⅶ層上面で遺構検出作業を行い、溝跡、柱穴を含むピットを検出した。これを受けて、記録保存を目的とした本発掘調査へ移行した。当初、Ⅰ区で検出した溝跡は、堆積土の状況から、対象地内で東西方向から南北方向に対象地内で屈曲するものと想定された。それを明らかにすることを目的に、調査区を北側に拡張することとした。調査区の拡張は、調査によって発生する残土の処理の問題から、建築範囲の北半部を東西に分割して行うこととし、対象地南半部をⅠ区、北半部の東部をⅡ区、西部をⅢ区とそれぞれに調査区名を付した。Ⅰ区の調査は7月31日から、Ⅱ区の調査は8月7日から、Ⅲ区の調査は8月21日から、それぞれ残土を反転させながら行った。調査の結果、溝跡、土坑、柱穴、性格不明遺構、ピットを検出して、精査を実施した。



第三-20図 第5次調査位置図

遺構精査・図面作製が終了した8月28日に調査区の埋め戻しを行い、現場の引渡しを行った。また、8月30日までに重機、仮照いなどの撤出が完了して、今回の調査の一切を終了した。

(3)基本層序

基本層は、大別11層、細別14層を確認した。I層は駐車場設置以前の畑地耕作土である。2層に細別され、いずれも礫やガラス片、ビニール片を含む。II層は調査区北西部で確認したにぶい黄褐色の砂質シルトをブロック状に含む灰黄褐色のシルトである。調査区壁面断面の観察から、溝跡上面の窪地を整地した人為的な盛土の可能性がある。III層は調査区北西部に部分的に分布する比較的均質な黒褐色のシルトである。IV層は調査区南部で確認した黒褐色を呈するシルトである。比較的均質である。V層は暗褐色および黒褐色を呈する粘土質シルトで、2層に細別される。Va層は上層に灰白色火山灰をブロック状に含む。近世以降とみられる遺構群は、本層上面で検出される。Vb層は、灰白色火山灰を少量含む。VI層は調査区南半部に部分的に分布する灰黄褐色を呈する細砂である。しまりがなく、灰黄褐色のシルトを斑状状に含み、層下面には凹凸が認められる。灰白色火山灰を堆積土に含む土坑などを覆う。VII層はにぶい黄褐色を呈する砂質シルトである。今回の調査における遺構検出面である。VIII層は灰オリーブ色のシルトと褐色の粘土の互層である。IX層はしまりのないにぶい黄褐色を呈する砂である。X層は褐色を呈する粘土で、植物遺存体を主体とする。XI層はしまりのない粗砂で、灰オリーブ色を呈する。基本層VII層以下は、水成堆積とみられる様相を呈している。また、今回の調査地点には、駐車場設置に伴う層厚約0.35mの盛土がある。

層位	マンセル	土色	土質	備考
I a	10YR3/4	暗褐色	シルト	均質 畑地耕作土
I b	10YR3/3	暗褐色	シルト	均質
II	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	褐色色 (10YR5/1) シルトをブロック状に多く含む
III	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状と小ブロック状に若干含む
IV	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状と小ブロック状に若干含む
V	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	層上部に灰白色火山灰を小ブロック状とブロック状に含む
VI	10YR5/1	褐色	砂	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトを斑状状に含む
VII	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	
VIII	5Y5/2	灰オリーブ色	シルト	
IX	5Y5/3	灰オリーブ色	砂	
X	5Y5/2	灰オリーブ色	砂	7.5Y4/3褐色のスクモとの互層
X I	5Y4/2	灰オリーブ色	砂	
X II	5Y4/2	灰オリーブ色	粗砂	

(4)発見遺構と出土遺物

遺構面はIV層上面とVII層上面である。検出した遺構は総数で溝跡9条、土坑4基、性格不明遺構1基、柱穴を含むビット65基である。遺構検出作業は、基本層VII層上面で行っているが、調査区壁面の観察から、遺構面は基本層IV層上面およびVII層上面の2面であることを確認している。出土遺物には、土師器、須恵器、土師質土器、陶器、磁器、瓦、木製品、石製品などがある。

VII層上面では、溝跡2条、土坑1基を検出した。

第2号溝跡 SD2

調査区南部で検出した北西～南東方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長は、一部途切れるが、約9.30mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅0.70m、下端幅0.50mで、深さ約0.10mである。断面形は皿状を呈する。にぶい黄褐色の砂質シルトおよび砂を含む暗褐色の砂質シルトである。

遺物は、土師器甕8点・台付甕1点が出土している。いずれも体部を主体とする小破片で、図示できるものはない。

第9号溝跡 SD9

調査区南部で検出した北西～南東方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長は約6.50mである。規模は上端幅0.70m、下端幅0.55mで、深さ約0.10mである。断面形は皿状を呈する。にぶい黄褐色の砂質シルトおよび砂を含む暗褐色の砂質シルトである。遺物は出土していない。

第1号土坑 SK1

調査区南西部で検出した土坑である。他の遺構との重複はない。一部の検出であることから、平面形は不明であるが、方形を基調としたものとみられる。規模は東西0.90m以上、南北1.00m以上で、深さ約0.30mである。断面形は逆台形を呈し、一部にオーバークラフが認められる。堆積土は5層に細別され、灰白色火山灰を含む褐色および黒褐色

色のシルトなどである。遺物は出土していない。

IV層上面では、溝跡7条、土坑3基、性格不明遺構1基、ピット65基を検出した。

第1号溝跡 SD1

調査区中央部で検出した北西～南東方向の溝跡である。SD3・4・5・6・7・8溝跡と重複し、SD4・7・8溝跡より新しく、SD3・5・6溝跡よりも古い。堆積土の状況から、SX1性格不明遺構と一連の遺構と考えられ、SX1東端部との接続部には、土橋状の高まりが認められる。検出長は約19.80mで、さらに調査区外へ延びる。規模はSX1性格不明遺構の西側では、他の遺構との重複のため、上部を壊されているが、上端幅2.60m以上、下端幅1.60m以上で、深さ約0.80mである。SX1性格不明遺構の西側では、上端幅約1.40～1.70m、下端幅約0.45～0.60mで、深さ約0.40～0.60mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は5層に細別され、植物遺存体を主体とする黒色の粘土やにぶい黄褐色の砂質シルト、砂を含む黒褐色、暗褐色などの粘土質シルトおよび粘土である。北側の下端とはほぼ平行する杭列と底面を直交する杭列（杭の一部：第24図2～7）が確認され、護岸などの施設が想定される。遺物は、土師器甕10点、ロクロ土師器坏5点、須恵器甕3点、丸瓦1点（第III-24図1）が出土している。いずれも体部を主体とする小破片である。

第3号溝跡 SD3

調査区北部で検出した東西方向の溝跡である。SD1・4・5・6・7溝跡と重複し、いずれよりも新しい。検出長は約15.50mで、さらに調査区外へ延びる。一部の検出であるが、規模は上端幅1.20m以上、下端幅0.80m以上で、確認した深さは約0.25～0.30mである。断面形は逆台形を呈するとみられるが、溝跡南壁は底面から比較的緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に細別され、にぶい黄褐色の砂質シルト主体層およびにぶい黄褐色の砂質シルトを含む暗褐色のシルトである。遺物は出土していない。

第4号溝跡 SD4

調査区北部で検出した東西方向の溝跡である。SD1・3・5・6溝跡と重複し、いずれよりも古い。検出長は約5.90mである。重複によって壊されているが、規模は上端幅0.90m、下端幅0.50mで、深さ約0.05～0.35mで、底面に比高差0.25mほどの段がつく。断面形は逆台形を呈する。堆積土は3層に細別され、にぶい黄褐色の砂質シルトを含む黒褐色などの粘土である。遺物は出土していない。

第5号溝跡 SD5

調査区北部で検出した東西方向の溝跡である。SD1・3・4・6・8溝跡と重複し、SD1・3・4・8溝跡よりも新しく、SD6溝跡より古い。検出長は約8.40mで、さらに調査区外西へ延びる。上部をSD6溝跡に壊されているが、規模は上端幅1.00m、下端幅0.30mで、深さ約0.40mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は3層に細別され、にぶい黄褐色の砂質シルトを含む暗褐色のシルトなどである。遺物は出土していない。

第6号溝跡 SD6

調査区北部で検出した東西方向の溝跡である。SD1・3・4・5・7溝跡と重複し、SD1・4・7溝跡よりも新しく、SD3・5溝跡よりも古い。検出長は約15.50mで、さらに調査区外へ延びる。一部の検出であるが、規模は上端幅0.90m以上、下端幅0.55m以上で、確認した深さは約0.50mである。断面形は逆台形を呈するとみられる。堆積土は5層に細別され、にぶい黄褐色の砂質シルトを含む暗褐色のシルト、植物遺存体を含む黒褐色の粘土などである。南側の下端とはほぼ平行する杭列が確認され、護岸などの施設が想定される。

遺物は、土師器甕17点、ロクロ土師器坏4点・甕1点、須恵器甕1点、灰軸陶器皿1点、土師質土器皿1点、山茶碗片口鉢1点、瓦質土器鉢1点、平瓦2点、小野相馬産灰軸碗1点、堤産灰軸甕、肥前産もしくは唐津産青緑もしくは緑軸皿1点、肥前産皿3点・碗1点、美濃産灰軸皿1点、肥前産染付碗2点、肥前産染付皿2点、肥前産染付碗2点、肥前産陶胎染付碗2点、肥前陶胎産染付香炉1点、瀬戸産鉢もしくは香炉1点が出土した。このうち、土師質土器皿1点（第III-25図9）、山茶碗片口鉢1点（第III-25図13）、瓦質土器鉢1点（第III-25図11）、小野相馬産灰軸碗1点（第III-25図1）、肥前産皿2点（第III-25図2・3）、肥前産もしくは唐津産青緑もしくは緑軸皿1点（第III-25図6）、瀬戸産鉢もしくは香炉1点（第III-25図10）、肥前産染付碗2点（第III-25図17・18）、肥前産陶胎染付碗2点（第III-25図16・第III-26図1）、等を図示した。

第7号溝跡 SD7

調査区北部で検出した東西方向の溝跡である。SD1・3・5・6溝跡と重複し、いずれよりも古い。検出長は15.50mで、さらに調査区外へ延びる。一部の検出であるが、規模は上端幅0.15m以上、下端幅は不明である。深さは約0.30m以上である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は3層を確認し、にぶい黄褐色の細砂や砂質シルトを含む黒褐色の粘土などである。遺物は出土していない。

第8号溝跡 SD8

調査区西部で検出した東西方向の溝跡である。SD1・5溝跡と重複し、いずれよりも古い。検出長は約3.70mで、さらに調査区外西へ延びる。規模は上端幅約1.00m、下端幅約0.20～0.30mで、深さ約0.30mである。断面形は上部が開く逆台形を呈する。底面に基本層を掘り残した土橋状の高まりが認められる。堆積土は5層に細別され、にぶい黄褐色の砂質シルトを含む暗褐色のシルトなどである。遺物は出土していない。

第2号土坑 SK2

調査区北東部で検出した土坑である。SD3・6溝跡と重複し、いずれよりも古い。一部の検出であることから、平面形は不明である。規模は東西1.30m以上、南北1.40m以上で、深さ約0.35mである。断面形は皿状を呈する。堆積土は5層に細別され、植物遺存体を主体とする黒色の粘土やにぶい黄褐色の砂質シルトを含む黒褐色のシルトなどである。遺物は出土していない。

第3号土坑 SK3

調査区北東部で検出した土坑である。SD3・6溝跡と重複し、いずれよりも古い。一部の検出であることから、平面形は不明である。規模は東西5.30m以上、南北1.50m以上で、深さ約0.55mである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面からやや急に立ち上がる。堆積土は8層に細別され、植物遺存体を主体とする黒色の粘土やにぶい黄褐色の砂質シルトを含む黒褐色および暗褐色のシルトなどである。

遺物は土師器環1点・甕4点、ロクロ土師器甕1点、須恵器環1点・甕2点、山茶碗系鉢1点、在地産鉢1点・甕1点、産地不明の甕もしくは壺1点、美濃産鉄軸香炉1点、石臼1点が出土している。

第4号土坑 SK4

調査区北西部で検出した土坑である。SD3・4・6溝跡と重複し、いずれよりも古い。一部の検出であることから、平面形は不明である。規模は東西1.20m、南北0.30m以上で、深さ約0.10mである。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、にぶい黄褐色の砂質シルトを含む灰黄褐色のシルトである。遺物は出土していない。

第1号性格不明遺構 SX1

調査区中央部で検出した土坑状の遺構である。SD4溝跡と重複し、これよりも新しい。堆積土の状況から、SD1溝跡と一連の遺構と考えられ、SD1溝跡と接続する東端部には、基本層を掘り残して形成した土橋状の高まりが認められる。平面形は不整楕円形を呈する。規模は東西約6.20m、南北約5.30mで、深さ約0.90mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は8層に細別され、黒色を呈する植物遺存体主体層を挟んで、大別2層に分けられる。上層はにぶい黄褐色のシルトを含む暗褐色のシルトで人為的埋土とみられる。植物遺存体主体層を挟んで、その下層は黒褐色や暗褐色の粘土などで、自然堆積土である。

遺物は、上層の人為的埋土から土師器甕9点、ロクロ土師器甕1点、須恵器環2点・甕1点・短頸壺1点、平瓦1点が出土している。また、下層の自然堆積土からは土師器環1点・甕16点、ロクロ土師器環1点、須恵器環1点、常滑産瓦1点、在地産とみられる甕1点が出土している。破片資料が主体を占め、図示できるものはない。

ピット

調査区南半部に分布し、65基を検出した。平面形は円形、楕円形もしくは方形を呈する。調査区の制約から、建物跡の検出には至らなかったが、柱痕跡が認められるものや柱材の沈下を防ぐ礎石として平坦な河原石を底面に据えたもの（P51:第Ⅲ-26図12石器転用）もあることから、建物跡の存在が想定される。

遺物は、P1から土師器甕2点、P2から土師器甕3点、P3から土師器甕1点、P5から土師器甕1点、P6から土師器甕1点、P7からロクロ土師器環1点、P12から土師器高環1点・甕8点、P24から土師器甕8点、P28から土師器甕13点、P30から土師器甕2点、P33からロクロ土師器甕1点、P51から土師器甕1点、燻し瓦1点が出土している。いずれも小破片で、図示できるものはない。

(5) 遺構外出土遺物

I層から土師器甕12点、検出面から土師器甕34点、ロクロ土師器杯2点・甕1点、須恵器杯1点・甕2点、瀬戸産鉄釉碗1点、肥前産皿1点、常滑産甕もしくは壺1点、肥前産染付皿1点、肥前産染付碗2点、焼し瓦1点が出土している。いずれも小破片を主体である。このうち、肥前産蓋1点(III-27図8)、肥前産染付皿1点、肥前産染付碗1点(第III-27図9)を図示した。

(6) まとめ

今回の調査では、遺構面がⅦ層上面とⅥ層上面に確認され、溝跡9条、土坑4基、性格不明遺構1基、柱穴を含むピット65基が検出された。

基本層Ⅶ層上面を検出面とする遺構には、溝跡2条、土坑1基がある。出土遺物がごく少量で、破片資料であることから、遺物から遺構の年代を明らかにすることはできない。しかし、SK1土坑、SD2溝跡、SD9溝跡の堆積土には、灰白色火山灰が含まれることから、10世紀初頭頃の古代に属する遺構と考えられる。

基本Ⅳ層上面を検出面とする遺構には、溝跡7条、土坑3基、性格不明遺構1基、柱穴を含むピット65基がある。溝跡は7条を検出した。いずれも概ね東西方向を基調とする。調査区北側で著しく重複するが、一部の検出であることや重複によって上部を壊されていること、遺物の出土量が少ないことなどから、詳細な規模や性格、年代については判断できない。SD1溝跡とSX1性格不明遺構は、堆積土の状況から一連の遺構と考えられる。SX1性格不明遺構の東端部とSD1溝跡の接続部には、基本層を掘り残した土橋状の高まりが認められる。また、SD8溝跡の底面でも、基本層を掘り残して形成した土橋状の高まりが認められる。この高まりについては、今回の調査で、その機能を明らかにすることはできなかった。北屋敷遺跡第2次調査においても、類似した形態の溝跡が検出されており、溝の水位調節などの同様な機能が想定される。溝跡の時期は、SD6溝跡の堆積土から陶磁器類を主体として漆器碗が出土しており、その年代から17～18世紀を中心とした年代が考えられる。したがって、SD6溝跡より古いSD1・4・7溝跡は17～18世紀以前、SD6溝跡より新しいSD3・5溝跡は17～18世紀以降と考えられるが、概ね近世の範疇に収まるものと考えられる。なお、溝跡底面から3列の杭列が検出されている。護岸などを目的としたものと推測される。位置と検出状況からSD1溝跡およびSD6溝跡に伴うものとみられるが、溝跡の重複が著しく、明確に判断することはできなかった。土坑は調査区北半部で3基を検出した。いずれも溝跡と重複し、全体を把握することはできない。このうち、SK3土坑は2基の土坑が重複している可能性も考えられたが、今回の調査では明らかにすることができず、形態や堆積土の状況が類似することなどから、一連の遺構として精査を行った。いずれの土坑も出土遺物から明確な時期を明らかにすることはできない。遺物はSK3土坑から、17世紀代の美濃産鉄釉香炉が出土している。また、SK2・3土坑は、SD6溝跡よりも古いことから、17世紀から18世紀を中心とした近世以前と考えられる。SK4の年代についても同様である。ピットは調査区南半部に分布し、65基を検出した。調査区の制約から、掘立建物跡を確認することはできなかったが、柱痕跡を伴うものや掘り方の底面に河原石を礎石として据えたものがあることから、建物跡の存在が想定される。年代を明らかにできる遺物は出土していないが、P49掘方理土から焼し瓦の小破片が出土しており、近世以降に属するものと考えられる。

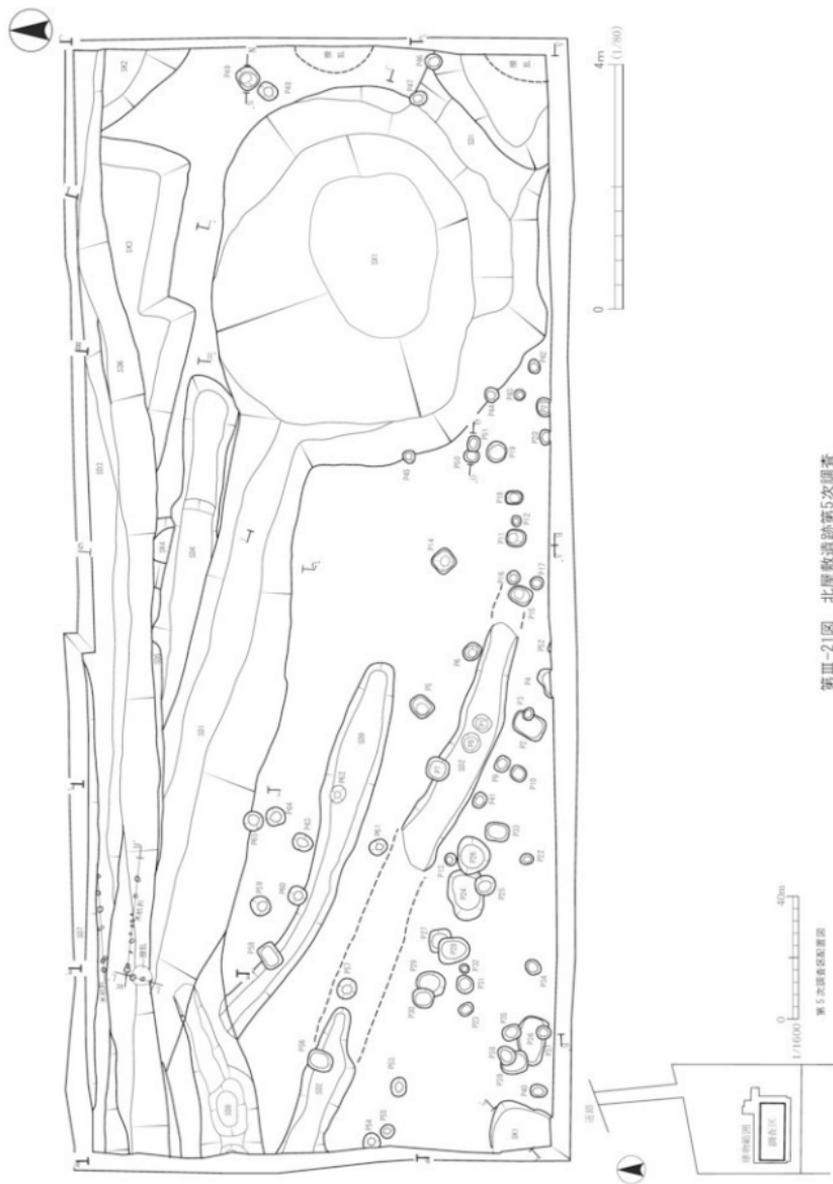
今回の調査で検出した遺構は、Ⅶ層上面検出遺構：古代以前とⅦ層上面検出遺構：近世以降に大別される。

古代の遺構群の時期は、灰白色火山灰降下以前である。また、SD2溝跡からは、古墳時代前期の塩釜式に属する土師器台付甕が出土している。該期の遺構や居住域を把握することはできなかったが、対象地の周辺に分布している可能性がある。

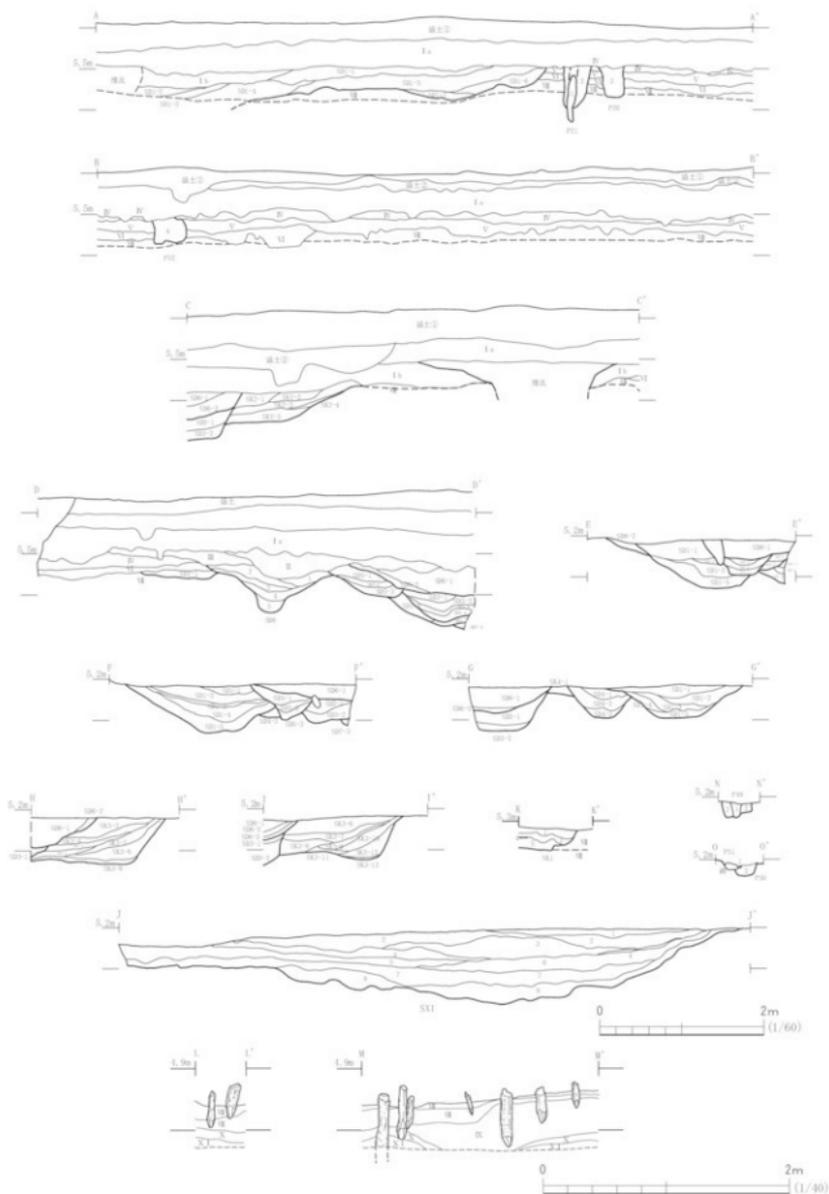
近世以降の遺構群は、仙台平野の微高地上に成立した農村部の屋敷地とそれを区画する施設の可能性がある。屋敷地の地割や区画された内部の様相については、今後の調査成果の蓄積を待ち、検討が必要である。

土層注記

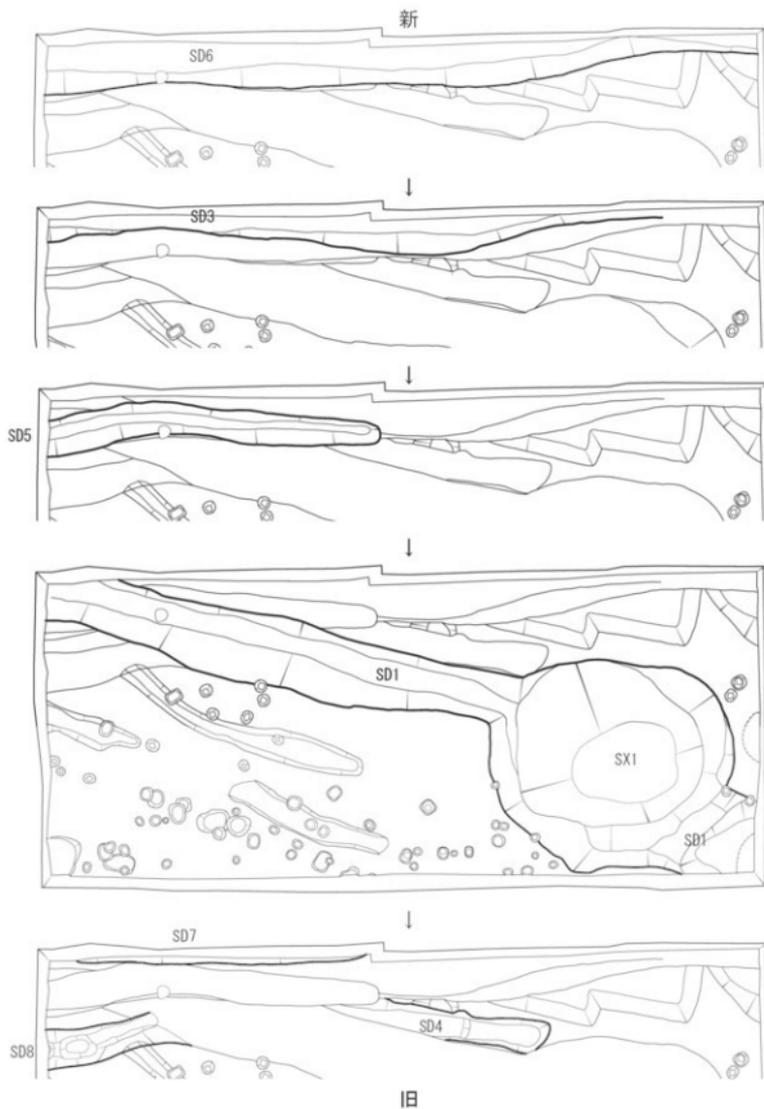
SD1 (1区)						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	10YR3/4	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)シルトを小ブロック状に少量含む		
2	2.5Y2/2	黒褐色	砂質シルト	砂を多量に含む		
3	10YR2/1	黒色	粘土	植物遺存体主体層		
4	2.5Y2/2	黒褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトを小ブロック状に少量含む	SK1-5層対応	
5	2.5Y2/2	暗オリーブ褐色	砂質シルト	にじい黄褐色(10YR5/4)砂質シルトを混状に含む		
6	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	にじい黄褐色(10YR3/4)をブロック状に含む	SK1-5層対応	
7	2.5Y2/2	黒褐色	砂質シルト	にじい黄褐色(10YR3/4)を小ブロック状に含む	SK1-7層対応	
SK1						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	10YR3/2	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/4)砂質シルトを小ブロック状に若干含む	人為的埋土	
2	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	にじい黄褐色(10YR3/4)砂質シルトを小ブロック状に少量含む		
3	10YR2/2	暗褐色	シルト	砂を多量に含む		
4	10YR2/1	黒色	粘土	表層部の植物遺存体主体層		
5	2.5Y2/2	黒褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトを小ブロック状に少量含む	SD1-6層対応	
6	2.5Y2/2	暗オリーブ褐色	粘土	表層部の植物遺存体主体層を互層状に含む		
7	2.5Y2/2	黒色	砂質シルト	にじい黄褐色(10YR3/4)をブロック状に含む	SD1-7層対応	
8	2.5Y2/2	黒褐色	粘土	にじい黄褐色(10YR3/2)砂を混状に含む		
SD1 (2区)						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	10YR3/2	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトを小ブロック状に多く含む	人為的埋土	
2	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトを小ブロック状に少量含む		
3	10YR2/2	暗褐色	粘土質シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトを小ブロック状に若干含む		
4	10YR2/1	黒褐色	粘土	植物遺存体主体層		
5	10YR3/1	褐色	粘土	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトをブロック状に含む		
SD2						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	10YR3/2	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトを比較的多く含む		
SD3 (黄区)						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	2.5Y2/2	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	黄土をブロックを多く含む		
2	2.5Y2/2	黒褐色	粘土	黄土ブロックを少量含む		
3	10YR2/2	暗褐色	砂質シルト	暗オリーブ褐色粘土を混状に含む		
4	2.5Y2/2	暗オリーブ褐色	粘土	植物遺存体主体層		
SD4 (黄区)						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	10YR3/1	褐色	細砂	黄褐色(10YR3/2)砂質シルトをブロック状に含む		
2	10YR2/2	暗褐色	粘土	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトをブロック状に含む		
3	10YR2/2	暗褐色	粘土	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトをブロック状に若干含む		
SD5 (黄区)						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	10YR3/4	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトを混状に少量含む		
2	10YR2/2	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトを混状に少量含む		
3	10YR3/1	褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトを混状に多く含む		
SD6 (黄区)						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	10YR3/3	にじい黄褐色	シルト	黄褐色(10YR3/2)砂質シルトを比較的多く含む		
2	10YR3/4	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトを比較的多く含む		
3	10YR3/2	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトを比較的多く含む		
SD7 (黄区)						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	10YR3/2	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトを比較的多く含む		
2	2.5Y2/2	暗オリーブ褐色	粘土	互層を混状に含む		
3	2.5Y2/2	黒褐色	粘土	植物遺存体主体層		
SD8 (黄区)						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	10YR3/1	褐色	粘土質シルト	暗褐色(10YR3/2)粘土をブロック状に少量含む		
2	10YR2/4	暗褐色	粘土質シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトをブロック状に少量含む		
3	10YR2/2	暗褐色	粘土質シルト	砂を多量に含む		
4	10YR2/4	暗褐色	粘土質シルト	暗褐色(10YR3/2)粘土を互層状に含む		
5	10YR3/1	褐色	砂質シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトを混状に含む		
SD9 (1区)						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	10YR2/2	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトをブロック状に少量含む		
SK1 (1区)						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	10YR3/1	褐色	シルト	灰白色火山灰を大ブロック状に多く含む		
2	10YR3/2	暗褐色	シルト	灰白色火山灰を比較的多く含む		
3	10YR2/2	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトをブロック状に少量含む		
4	10YR2/4	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)暗褐色を大ブロック状に多く含む		
5	10YR3/1	褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)暗褐色を大ブロック状に多く含む		
SK2 (黄区)						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	10YR2/2	暗褐色	粘土質シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)粘土をブロック状に少量含む		
2	10YR2/2	暗褐色	粘土質シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)粘土をブロック状に若干含む		
3	10Y R2/2	暗褐色	粘土	暗褐色(10YR3/2)粘土質シルトとの互層		
4	10Y R3/4	暗褐色	粘土質シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)粘土を比較的多く含む		
5	10Y R3/4	暗褐色	砂質シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)粘土を比較的多く含む		
SK3 (黄区)						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	10YR2/4	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)シルトをブロック状に多く含む	人為的埋土	
2	10YR2/2	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)シルトをブロック状に若干含む		
3	10YR2/1	黒褐色	粘土	暗褐色を多く、にじい黄褐色(10YR3/2)シルトを小ブロック状に少量含む		
4	10YR2/1	黒褐色	粘土	暗褐色を多く、にじい黄褐色(10YR3/2)シルトを小ブロック状に少量含む		
5	10YR2/2	暗褐色	粘土質シルト	暗褐色を若干含む		
6	10YR2/2	暗褐色	粘土	にじい黄褐色(10YR3/2)シルトをブロック状に少量含む		
7	10YR2/2	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)シルトを多く含む		
8	10YR2/1	黒色	粘土	表層部の植物遺存体層		
SK4 (黄区)						
層位	土色	土色	土質	備考		
1	10YR2/2	暗褐色	シルト	にじい黄褐色(10YR3/2)砂質シルトをブロック状に多く含む	人為的埋土	



第III-21圖 北魏敕道跡第5次調查



第Ⅲ-22圖 北屋敷遺跡断面圖



第Ⅲ-23図 溝跡重複関係図



1



2



3



4



5



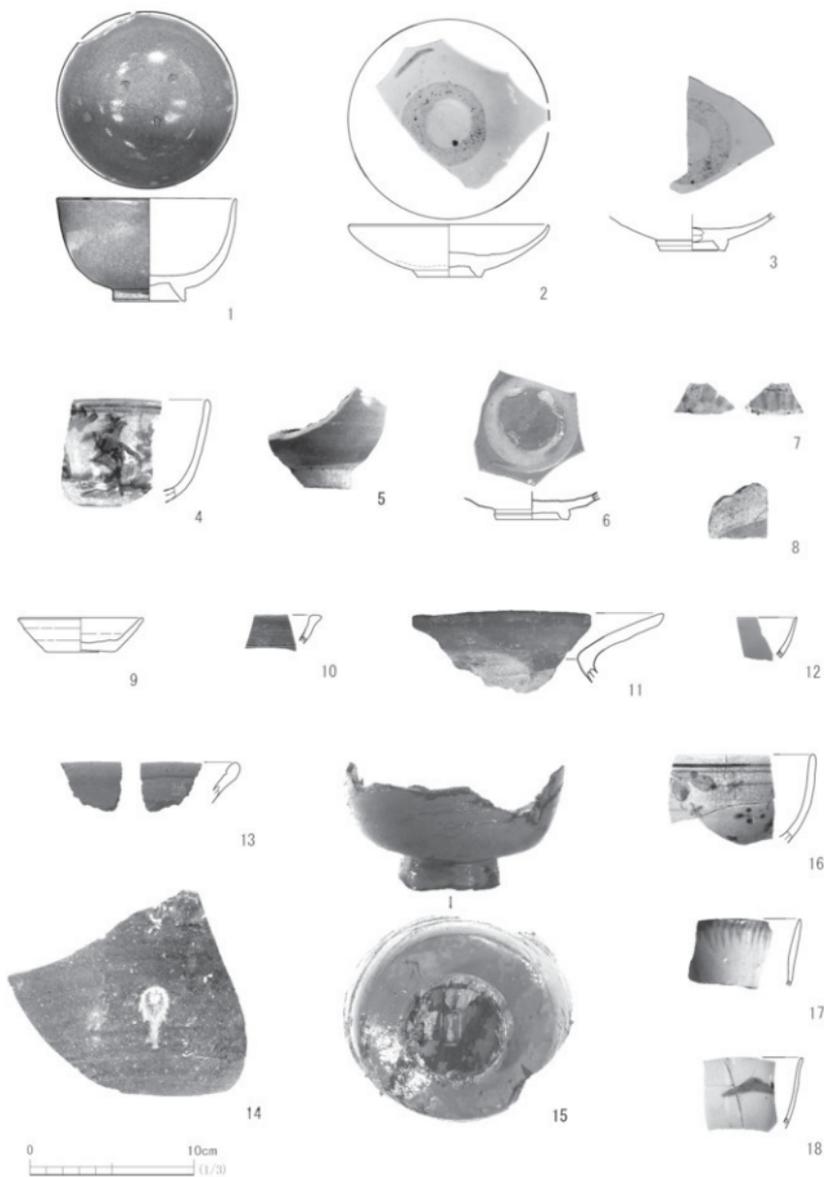
6



7



写真図版Ⅲ-14 出土遺物1



第Ⅲ-24図 出土遺物2